

令和元年度
神戸市埋蔵文化財年報

2023
神戸市

序

神戸市域には古来より多くの人々が住み、その営みの痕跡である遺跡が1061ヵ所も存在しています。

遺跡の範囲内で開発事業が行われる場合、遺跡から知ることができるかけがえのない地域の歴史を後世の人々に伝えるため、発掘調査を行い、人々の営みの痕跡について記録を取り、残しています。また調査から得た成果を市民の皆様へ還元し、活用するための事業にも取り組んでいます。

本書では、令和元年度（平成31年度）に実施した15遺跡、25件の発掘調査の成果を概要として収録いたしました。本書が神戸の歴史と文化を学ぶための資料として、また、埋蔵文化財へのご理解を深めていただける一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

神戸市

例 言

1. 本書は、神戸市教育委員会が令和元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長
菱田哲郎 京都府立大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	長田 淳		
教育次長	後藤徹也		
文化財課長	安田 滋		
埋蔵文化財センター担当課長	前田佳久		
埋蔵文化財係長	東喜代秀		
文化財課担当係長	齋木 巖	松林宏典	
〃（埋蔵文化財センター担当）	中村大介		
事務担当学芸員	阿部敬生	井尻 格	瀬戸文佳
	荒田敬介		
調査担当学芸員	山口英正	佐伯二郎	浅谷誠吾
	藤井太郎	石島三和	小野寺洋介
	田島靖大	加納大誉	萱原朋奈
埋蔵文化財センター担当学芸員	内藤俊哉	関野 豊	中井菜加
〃（保存科学担当）	山田佑生		

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 事業の概要のうち、1～4については橋詰が執筆し、5については松林・中村が執筆した。III. 文化財科学的調査の成果は小林謙一・佐野雅規・李貞・中塚武・中村が執筆した。本書の編集は中井・田島が行った。
4. 調査現場の写真撮影、遺構・遺物図のトレースなどについては、各調査担当者が行った。
5. 表紙写真（松原城跡）は東海アナース株式会社が、裏表紙写真（篠原遺跡第40次調査出土銅製品）は中村が撮影を行った。

目 次

序

例言

I. 事業の概要

1. 事業体制……………2
2. 開発指導……………2
3. 埋蔵文化財調査事業……………2
4. 刊行物一覧……………3
5. 埋蔵文化財の公開活用事業……………3

II. 令和元年度の発掘調査

1. 井戸田遺跡 第3次調査…………… 15
2. 岡本北遺跡 第13次調査…………… 19
3. 岡本北遺跡 第14次調査…………… 23
4. 篠原遺跡 第40次調査…………… 25
5. 中央区 No.14 遺跡 第1次調査…………… 29
6. 雲井遺跡 第41次調査…………… 31
7. 二宮東遺跡 第5次調査…………… 37
8. 祇園遺跡 第22次調査…………… 39
9. 楠・荒田町遺跡 第62次調査…………… 53
10. 楠・荒田町遺跡 第63次調査…………… 57
11. 兵庫津遺跡 第78次調査…………… 61
12. 兵庫津遺跡 第79次調査…………… 71
13. 兵庫津遺跡 第80次調査…………… 77
14. 兵庫津遺跡 第81次調査…………… 79
15. 兵庫津遺跡 第82次調査…………… 85
16. 兵庫津遺跡 第83次調査…………… 93
17. 松原城跡 第1次調査…………… 97
18. 小坂遺跡 第4次調査…………… 103
19. 御蔵遺跡 第71次調査…………… 109
20. 大田町遺跡 第22次調査…………… 113
21. 垂水日向遺跡 第39次調査…………… 115
22. 出合遺跡 第53次・第54次・第56次調査…………… 119
23. 出合遺跡 第55次調査…………… 127

III. 文化財科学的調査の成果

- 本山遺跡第34次調査出土杭材の年代測定…………… 129

I. 事業の概要

1. 事業体制

神戸市教育委員会文化財課は、埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に関わる届出などの窓口業務、試掘調査や本調査の受託契約等の事務や補助金事務は中央区の本庁文化財課で行い、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復及びその後の管理と活用に関しては、西区の埋蔵文化財センターで行っている。出土品や発掘調査で得られた写真や図面等は、記録保存のために空調管理した取蔵施設で保管し、さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座等は埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による取蔵資料に対する資料調査や貸出にも対応している。

職員の配置は、従来の業務の他に、熊本地震の復興調査支援のため、学芸員1名を熊本県上益城郡益城町に派遣した。また、学芸員1名を文化庁の研修生として派遣した。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

令和元年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は703件（前年度694件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が649件（前年度640件）であった。また、開発行為事前審査106件（前年度104件）、試掘調査依頼は110件（前年度104件）であった。これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報をGISデータに集積し、それを基に可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

3. 埋蔵文化財調査事業

令和元年度に実施した埋蔵文化財調査事業は、調査事業26件、整理事業3件で、それに要した経費の総額は、89,189千円であった。

国庫補助事業 発掘調査事業のうち、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。令和元年度の緊急発掘調査事業費は34,000千円であった。

市内発掘調査 発掘調査件数は、26件である。

発掘調査面積は13,084㎡（延べ19,360㎡）であった。公共事業は1件のみで、民間関連事業によるものが12,962㎡（延べ19,238㎡）であった。

面積別でみると、調査事業26件のうち300㎡以下の調査が22件を占め、個人住宅などを中心にした小規模開発事業が多いことを示している。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても地盤改良工事などで基礎が深くなり、遺構などに抵触することが要因の1つであると考えられる。

埋蔵文化財調査の公開事業として松原城跡第1次調査の発掘調査現場の一般公開（2回開催・2019年8月31日・2019年12月14日）を実施した。

これまで刊行した発掘調査報告書については、準備の整ったものから奈良文化財研究所の「全国遺跡総覧」において公開を進めている。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法93・94条関係）	703件
	i 民間の事業に伴う発掘届（93条）	649件
	ii 公共の事業に伴う発掘通知（94条）	53件
	iii 発掘届・発見通知（92・96・97条）	1件
2	開発行為事前審査等各種申請	106件
3	試掘調査（依頼件数）	110件
4	発掘調査（大規模確認調査も含む）	26件
	i 民間事業に伴う発掘調査	25件
	ii 公共事業に伴う発掘調査	1件
5	工事立会	75件
6	整理作業（復興調査整理作業を含む）	3件

4. 刊行物一覧

令和元年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『熊内遺跡第8次調査発掘調査報告書』令和2年3月刊行 頒価600円、『郡家遺跡第95次発掘調査報告書』令和2年3月刊行 頒価800円、『平成29年度神戸市埋蔵文化財年報』令和2年3月刊行 頒価1,000円、『神戸市埋蔵文化財分布図（令和2年度版）』令和2年3月刊行 頒価500円、『海を見つめて～コウベの海と考古学～』平成31年4月刊行 頒価無料、『木を視て森を観る～植物利用の考古学～』令和元年7月刊行 頒価300円、『昭和のくらし・昔のくらし14』令和2年1月刊行 頒価無料、『神戸市西区の遺跡』令和2年3月刊行 頒価200円。

5. 埋蔵文化財の公開活用事業

考古資料の調査・整理・保管および特別利用等

埋蔵文化財センターでは発掘調査の一環として出土遺物の復元・修復作業および金属製品・木製品等の保存科学的処置ならびに、発掘調査報告書の編集作業を行っている。修復・調査作業の完了した遺物および写真・図面等の記録類は主として埋蔵文化財センターにおいて保管され、公開活用事業や調査研究等の利用に供している。令和元年度における資料の特別利用は表4～7のとおりである。

埋蔵文化財センターにおける公開活用事業

埋蔵文化財センターでは展示や体験講座等、広く市民への公開活用事業を行っているが、新型コロナウイルスまん延防止策とし、令和2年3月から5月にかけて臨時休館とした。そのため当年度の入館者数は26,437人に留まり、30,000人を超えていた例年を大きく下回った。

4・5月は6年生の歴史学習導入時期であり、弥生時代や古墳時代等の学習のために、また1・2月には「人びとのくらしのうつりかわり」として“ちょっと”昔のくらしを学習する3年生が、冬季企画展『昭和のくらし・昔のくらし』を見学するために来館している。ただし、当年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、市内小学校団体の入館は77校3,895名（全体の約15%）に留まった。また近隣市町からの小学校団体についてもほとんど来館を見なかった。

表2 発掘調査面積（単位：㎡）

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	12,962	122	13,084
延べ調査面積	19,238	122	19,360

表3 発掘調査面積別件数（試掘および確認調査を除く）

調査面積	件 数	%
～100㎡	15件	57
101～300㎡	7件	27
301～500㎡	0件	0
501～1,000㎡	2件	8
1,001～2,000㎡	1件	4
2,001～5,000㎡	0件	0
5,001㎡以上	1件	4
合 計	26件	100

表4 考古資料の館外貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	和歌山県立紀伊風土記の丘資料館	特別展『開かれた棺-紀伊の横穴式石室と黄泉の世界-』	新内古墳出土 双脚輪状文形埴輪 (1点) 〃 写真 (1点)	2
2	舞鶴市立赤れんが博物館	常設展示	旧神戸外国人居留地跡煉瓦下水渠出土煉瓦	1式
3	尼崎市立田能資料館	特別展『どくうちゃん』	生田遺跡・篠原遺跡・雲井遺跡・宇治川南遺跡・長田神社境内遺跡出土 土偶 (各1点)	5
4	兵庫県立考古博物館	特別展『埴輪の世界-埴輪から古墳を読みとく-』	住吉東古墳出土 人物埴輪 (3点) 〃 馬形埴輪 (1点) 五色塚古墳出土 楕円円筒埴輪 (1点)	5
5	明石市	企画展『発掘された明石の至宝』	新方遺跡出土 鹿角製指輪 (3点) 西神 N.T.No.65 遺跡出土 銅鐻鍔型未成品 (1対) 白水瓢塚古墳出土 腕輪形石製品 (13点) 〃 面文帯神獸鏡 (1点) 〃 玉類 剥ぎ取り (1式) 〃 朝顔形円筒埴輪 (1点) 〃 円筒埴輪 (1点) 五色塚古墳出土 合子 (1点) 〃 子持勾玉 (1点) 〃 須恵器杯身 (1点) 〃 甕形埴輪 (1点) 〃 円筒埴輪 (1点) 〃 盾形埴輪 (1点) 吉田南遺跡出土 墨書土器 (1点) 〃 円面硯 (1点) 〃 漆紙文書 (1点) 〃 木屐 (1点) 神出塚跡群出土 鬼瓦 (2点)	33

企画展の開催 埋蔵文化財センターでは平成3年の開館以来、毎年数回の企画展を開催しており、当年度は表8のとおり3回の企画展を開催した。

春季企画展は先述したとおり、小学校6年生の歴史学習導入に際し、歴史に興味を持てるようなわかりやすい展示を心掛けている。当年度は『海を見つめて ～コウベの海と考古学～』と題し、「海」をメインテーマに水産業やマツリ、交通、交易などにスポットをあてた展覧会を開催した。会期中、展示関連イベントとして外部講師を招聘した講演会をはじめ、当課学芸員による展示解説とバックヤードツアーを実施した。

夏季企画展は、遺跡出土の植物質資料に着目した『木を視て森を観る-植物利用の考古学-』を開催した。展示では縄文～弥生時代を中心に、植物利用の歴史を大きく3つのテーマ、「植物を食べる」「編む・組む・織る」「木を加工する」に分け、概観した。出品資料は市内遺跡出土資料だけでなく、富山・石川・滋賀や兵庫県下の市町から出土した資料を借用し、見ごたえがありつつ、わかりやすい展示を志した。会期中は外部講師による講演会およびワークショップなどのイベントを開催した。

冬季は今回で14回目となる企画展『昭和のくらし・昔のくらし』を開催し、昭和のくらしを身近に体験できる展示を行った。この企画展は小学校3年生の学習課程に則した展示でもあるため、小学校団体の見学が多い。一方で昭和に馴染みを感じる幅広い世代の方々からも好評を得ている。特に昭和30～40年代の生活空間を再現したジオラマでは、各世代間での会話が膨らみ、好評を博した。

企画展に関連したイベントとしては、埋蔵文化財センターボランティアスタッフが主力となり「昭和のあそび 昔のあそび」を開催した。会場では割りばし鉄砲づくり・こま回し・竹馬・糸巻き戦車などの昔懐かしい遊びをはじめ、神戸市立西図書館のご協力による絵本の読み聞かせなど、子供たちの笑顔があふれた一日だった。また旧車運転同好会の協力のもと「昭和の車

表5 考古資料の特別利用

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	学術研究	湯山御殿跡出土 瓦類	-
2	個人	論文執筆	本山遺跡出土 木製品 (18点) 大間遺跡出土 柱状片刃石斧 (3点) 木製品 (4点)	25
3	個人	学術研究	鎌谷城跡出土 甲	50
4	個人	学術研究	兵庫津遺跡出土 目貫	9
5	尼崎市教育委員会	尼崎市立田能資料館特別展『どくうちゃん』にかかる資料調査	生田遺跡・篠原遺跡・雲井遺跡・宇治川南遺跡・長田神社境内遺跡出土 土偶 (各1点)	5
6	個人	夏休み自由研究	篠原遺跡出土遺物	-
7	個人	学術研究	隈高山遺跡出土 瓦 (18点) 花隈城跡出土 瓦 (12点)	30
8	個人	学術研究	西求女塚古墳出土 鉄製武器類	1式
9	西宮市教育委員会	同教委主催歴史講座にかかる資料調査	狩口台きつね塚古墳出土 家形石棺材 (1式) 多間古墳群大塚ヶ平支群15号墳出土 家形石棺材 (1式) 多間古墳群深谷支群1号墳出土 石棺材 (2点)	-
10	個人	博士論文執筆	白水部塚古墳出土 腕輪形石製品 (13点) 塩田北山東古墳出土 紡錘車形石製品 (1点)	14
11	個人	学術研究	天王山4号墳出土 八雲鏡 (1点) 高津橋大塚古墳出土 撰文鏡 (1点)	2
12	明石市市史編纂室	『明石の歴史』3号 掲載論文執筆	大蔵山遺跡出土 石鏡・石匙・石斧ほか (1式) 舞子東石谷遺跡出土 石鏡・ガラス玉・石製管玉 (1式)	-
13	吉野ヶ里公園管理センター	夏季特別企画展 (9月～) 出品希望資料下見	北青木銅鐸 新方遺跡出土 指輪 (6点)・3号人骨・鑄造鉄斧・弥生土器 (9点) 玉津田中遺跡出土 銅鏡 (4点)・木製器台・弥生土器 (6点)	29
14	個人	学術研究	住吉宮町遺跡出土遺物 (1式) 西岡本遺跡出土埴輪 (1式)	-
15	兵庫県立考古博物館	特別展に係る事前調査および写真撮影	大間遺跡ほか 市内遺跡出土資料	27

表6 考古資料の掲載・調査成果の公表

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	弘前大学人文社会学部	『日本の出土米V 西日本編』への掲載	雲井遺跡出土 炭化米	1式
2	個人	ICOM 会議 (9/3) での発表	2018 おおとし山まつりチラス	1式
3	個人	「弥生時代における低地集落と高地性集落－石鏡からみた明石川流域の小地域様相－」『考古学研究』	市内遺跡出土 石鏡 西神 NT No.50 (5点)・隈高山 (2点)・新方 (3点)・西神 NT No.65 (1点)	11
4	個人	「神戸層群凝灰質砂岩製石棺における製作技術の系譜」『合田茂伸館長退職記念論集』への掲載	多間古墳群大塚ヶ平支群第15号墳出土 石棺	1式
5	個人	科研費報告書『三次元計測を用いた近世刀鏡具鑄造技術の考古学的研究』	兵庫津遺跡出土目貫 9点	9

表7 画像データ等の貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
1	テレコムスタッフ㈱	NHK・BSプレミアム『英雄たちの選択 原始日本SP』	大開遺跡第1次調査出土 石棒 写真(3点) // 調査状況 写真(2点)	5
2	柳朝日旅行	同社企画ツアード『歴史ロマン紀行』	五色塚古墳 写真	2
3	衛三猿舎	講談社刊『日本の歴史』	五色塚古墳 写真(1点) 吉田南遺跡出土車輪 写真(1点)	2
4	模はる制作室	宝島社刊『TJ MOOK 最新調査でわかった日本の古代史 完全保存版』	五色塚古墳 航空写真	1
5	グループ・コロンブス	岩崎書店刊『古墳のなぞがわかる本』	五色塚古墳 航空写真	1
6	柳山川出版社	山川出版社刊『図説 歴史散歩事典 改訂版』	舞子台場跡 復元CG画像	1
7	(一財) 神戸観光局	歴史街道パネル展『百舌鳥・古市古墳群～関西の古墳を巡ろう!』大阪府立中央図書館	五色塚古墳 写真	2
8	柳洋泉社	洋泉社刊『百舌鳥・古市古墳群のすべて』	五色塚古墳 墓石 写真	1
9	柳ジッピープロダクション	BSテレビ東京『出発!ローカル旅聞きこみ発見旅』	五色塚古墳 空撮(現代+60年代) 写真	3
10	神戸市立博物館	特別展『建築と社会の年代記』収録および関連講座	雲井遺跡第1次調査 空中写真	1
11	明石市	企画展『発掘された明石の至宝』	新方遺跡出土 鹿角製指輪・装着状況他 写真(3点) 白水稲塚古墳 玉類出土状況他 写真(5点) 西神No.65 遺跡出土 銅鐸鎗型未成品 写真(6点) 五色塚古墳 墳丘・出土遺物 写真(8点) 舞子浜遺跡出土 埴輪 写真(1点) 吉田南遺跡出土 木簡他 写真(7点) 神出塚跡群出土 瓦瓦 写真(2点) 西神No.40 遺跡 写真(1点) 多聞古墳群 写真(1点) 大蔵山遺跡 写真(1点) 天王山5号墳 写真(2点)	37
12	クラブツーリズム㈱	ツアーパンフレットおよびホームページ	五色塚古墳 写真	2
13	日本経済新聞社	日本経済新聞別刷り『プラスワン』古墳企画	五色塚古墳 写真	2
14	白鶴酒造資料館	常設パネル展示	御影御古酒蔵群 写真	2
15	たつの市立龍野歴史文化資料館	特別展『道としての瀬戸内海』展示・図録	兵庫津遺跡 写真	1
16	兵庫勤労市民センター	同センター主催講演会『大輪田からコウペまで-港町兵庫の考古学-』広報	兵庫津遺跡第14次調査 空中写真(1点) 兵庫津遺跡第62次調査 兵庫城石垣写真(1点)	2
17	農林水産省農村振興局整備部	(一社) 農業農村整備総合情報センター発行『ARIC情報』	住吉宮町遺跡他出土 鉄製農具 写真	1
20	柳岩波書店	ブライアン・ロウ『古代寺院のネットワーク』岩波書店刊	深江北町遺跡12次調査出土 木簡 赤外写真	1
21	柳フォード・オリジナル	柳ジェイビーエヌ刊『マイティール』	市内出土 勾玉 集合写真(1点) 市内出土 装飾品(玉類) 集合写真(1点)	2
22	舞鶴市立赤れんが博物館	常設展示解説パネル	旧神戸外国人居留地煉瓦下水道遺跡 出土状況 写真(1点) // 煉瓦下水道内面刻印 写真(1点)	2
23	柳講談社	同社刊『古墳散歩』『週刊現代』	五色塚古墳 写真	2
24	神戸市立博物館	常設展示『KOBE 歴史の旅～神戸市立博物館歴史展示ガイド～』	市内遺跡 写真	30
25	神戸市立博物館	博物館情報コーナー「神戸の歴史マップ」	神戸市埋蔵文化財センター外観 写真	1
26	神戸市危機管理室	防災展示室・研修室説明用リーフレット	旧神戸外国人居留地遺跡 写真	5
27	柳碧水社	ディアゴスティーニ・ジャパン社刊『週刊 日本の城』	兵庫津遺跡第62次調査 写真	8
28	サンケイリビング新聞社	同社刊『リビング新聞 12月27日号』・webサイト『リビング兵庫web』	五色塚古墳 写真	2

29	垂水区総務部まちづくり課	垂水区老人クラブ連合会広報紙	五色塚古墳 写真	1
30	文英堂	同社刊『完全理解 小学 社会』	五色塚古墳 写真	1
31	個人 (執筆・編集)	朝正進社刊『社会科資料集 6年』	五色塚古墳 写真	1
32	個人	『国際博物館会議 (ICOM)』会議録	西求女塚古墳 埋葬施設検出状況 写真 (1点) 平成30年度「おとおし山まつり」チラシ データ (1点)	2
33	個人	朝倉書店刊『石の歴史・文化事典』	兵庫津遺跡 写真	1
34	柳イディー	『ESCORT』	五色塚古墳 写真	4
35	柳シービーエス	浜松市広報番組制作のため	五色塚古墳出土 埴輪 写真	1
36	柳隆風社	JR 西日本発行『電車 & ワーク』フリーページ特集ページ	五色塚古墳 写真	3
37	個人	個人的研究	五色塚古墳 写真	1
38	個人	明石市『明石の歴史』3号	舞子東石ヶ谷遺跡 航空写真 (1点)・焼失住居 写真 (2点)	3
39	朝日新聞大阪本社	朝日新聞夕刊『災害考古学』第7部	湯山遺跡 岩風呂 写真 (1点) 住吉宮町遺跡第23次調査 井戸 写真 (2点)	3
40	個人	『愛知淑徳大学大学院文化創造研究紀要』第7号	五色塚古墳 航空写真	1
41	協同組合インフォメーションテクノロジー関西	webサイト『JRおでかけネット』	五色塚古墳 写真	3
42	柳碧水社	講談社刊『古墳～平安時代』『タテ割り日本史 乗り物の日本史』	五色塚古墳 航空写真 (1点)・復元CG画像 (1点)	2
43	柳ネットゲン	NHK BS プレミアム『英雄たちの選択』「再検証！中国大返し」	兵庫津遺跡 写真	5
44	柳神戸新聞総合印刷	大平茂『兵庫の遺跡が語るまつりの古代史』	長田神社境内遺跡出土 土偶 写真 (1点) 新方遺跡 1・3号人骨出土状況 写真 (1点)・出土石棒 写真 (1点) 西求女塚古墳出土 青銅鏡 写真 (1点) 白水龍塚古墳 第1主体部 写真 (1点) 五色塚古墳 航空写真 (1点)・出土子持勾玉 写真 (1点)	7
45	柳Q	関西テレビ『新説！所！JAPAN』	白水龍塚古墳出土 石剣 写真	2
46	尼崎市立田能資料館	特別展『どくうちゃん』	宇治川南遺跡・生田遺跡・藤原遺跡・雲井遺跡出土 土偶 複合写真 (1点) 長田神社境内遺跡出土土偶 写真 (1点)	2
47	兵庫県立考古博物館	特別展『埴輪の世界－埴輪から古墳を読みとく－』	住吉東古墳出土 人物埴輪・馬型埴輪 (4点)・埴輪列復元 写真 (1点) 五色塚古墳出土 埴輪集合・埴付円筒埴輪 (2点)・航空写真ほか (3点)	10
48	個人	神戸学院大学『博物館実習！』講義	神戸市内遺跡の発掘調査作業状況・保存処理作業状況・出土資料写真	61

表8 企画展

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
海を見つめて ～コウベの海と考古学～	4/13 (土) ～5/26 (日)	42	7,294
木を視て森を観る 植物利用の考古学	7/13 (土) ～9/23 (月)	63	4,046
昭和のくらし・昔のくらし 14	1/11 (土) ～3/8 (日) ※3/3～臨時休館	44 (50)	6,357

表9 歴史講演会・ワークショップ

開催日	講演名	講師	参加者数
5月6日	海の幸の考古学 ～貝・魚・鯨～	東海大学海洋学部 講師 丸山 真史 氏	40
5月12日	弥生時代のタコ醤油 ～名産「明石ダコ」のルーツ～	兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 次長 中川 渉 氏	37
8月18日	編み織りの考古学	福井大学国際地域学部 講師 東村 純子 氏	52
8月25日	ワークショップ ミニチュア丸木舟をつくらう	京都女子大学 非常勤講師 中川 正人 氏	36

表 10 こうべ考古学

月 日	講 演 名	講 師	参加者数
5月18日	遺跡からわかる神戸の古環境	神戸市教育委員会学芸員 中村 大介	74
6月22日	神戸における弥生時代の始まり	神戸市教育委員会学芸員 前田 佳久	89
7月13日	古墳時代の武力衝突	神戸市教育委員会学芸員 荒田 敬介	100
8月24日	古代のお役所	神戸市教育委員会学芸員 佐伯 二郎	74
9月21日	まじないの世界	神戸市教育委員会学芸員 松林 宏典	90
1月18日	近世都市『兵庫』一町屋から探る	神戸市教育委員会学芸員 内藤 俊哉	76
3月7日	こうべ発掘最新情報	中止	-

大集合」とし、昭和時代のレトロな車9台が集まったのバレードや乗車体験を実施した。

また阪神・淡路大震災25年を迎えたこの年、パネル展示『-復興への発掘調査-』を冬季企画展と同時開催し、遺跡の被災状況や震災復興事業に関連する発掘調査を写真で振り返った。

体験考古学講座 夏休みの期間を中心に、「体験！考古学講座」を実施した。土器や勾玉、銅鐸など、遺跡の発掘調査からの出土品の製作技法を学び、それに近い方法によって古代のものづくりを体験する講座で、参加は小学校4年生以上を対象としたものである。10種類の講座で、のべ527名が受講した。

歴史講演会 各企画展のテーマにあわせ展示をより深く理解できるような内容で、先述のとおり春季および夏季の企画展に際し、外部講師による講演会を3回開催した。のべ129名が聴講した。

連続講座「こうべ考古学」 全7回の連続講座で、当年度は学芸員それぞれが個別のテーマについての講演を行った。第7回の最終回には「こうべ発掘最新情報」として当該年度に実施した発掘調査成果を報告する予定だったが、こちらもコロナウィルス対策で中止となった。全6回でのべ505名の参加があった。

出張考古学講座・出張授業・出張講義 埋蔵文化財センターで実施する体験考古学講座以外に、市内小学校や公民館からの依頼により学芸員が赴き、勾玉づくりや土器づくりの体験講座や、地域の歴史について授業や講義を行っている。当年度は13団体（うち小学校10校）、589名（うち小学校526名）の参加があった。

学校等との連携授業 神戸市と連携協定を結んでいる神戸学院大学の博物館学芸員課程の実習として、学生が企画したテーマについて展示実習を行い、11月9日～30日に同学図書館において『太古のクッキング』『食器/過去からの招待状～椀ダフルライフ』の展示を開催した。

夏季休暇期間、各大学より博物館実習生を受け入れている。当年度は8月6日～10日の5日間、4校計7名の実習生を受け入れ、考古資料の取り扱いや展示保管環境の測定、資料の写真撮影、保存科学、埋蔵文化財センターエントランスホールでの模擬展示などの実習を行った。

6月3日～7日および11月11日～15日の2回、兵庫県内の中学校2年生の職業体験プログラムである「トライやるウィーク」に協力し、市内8校から計16名の生徒を受け入れた。出土した土器の水洗や木製品の保存処置作業など、埋蔵文化財センターでしかできない実物資料に触れる業務を体験してもらった。

また学生インターンシップの市役所全体での受け入れ方針に伴い、文化財課でも1名の大学生を受け入れ、8月19日～23日の5日間、埋蔵文化財センターでの職場研修を行った。カ

リキュラムは文化財保存科学業務を軸に、主として文化財害虫・害菌の管理をテーマとし、館内のトラップ調査や環境測定をもとに、最終日には研修成果の報告会を行った。

また毎年、神戸市小学校教育研究会社会科部と連携し、神戸市生涯学習支援センター「コミスタこうべ」において9月に開催される小学生の夏休み自由研究作品展である『神戸市小学校社会科作品展』において、考古学的な遺物や遺跡に関する優秀な研究作品を50点選定し、『埋蔵文化財センター賞』を授与した。

地域連携事業

埋蔵文化財センターでは、地域で開催しているイベントや区役所、図書館などと随時連携し、埋蔵文化財の公開活用事業を実施している。

地域事業への参加協力 西区では西図書館主催の「2019 西図書館自由研究相談室」において、学芸員が「神戸の遺跡相談室 レアな！？植物質遺物たち」と題した講座を開催した。また夏休みの期間中両館を回るクイズスタンプラリー「お宝だいぼうけん！9」を実施した。

『五色塚古墳まつり』の開催 垂水区に所在する国史跡五色塚古墳の活用促進を目的として、平成26年度より垂水区役所と連携し『五色塚古墳まつり』を行っている。当年度は6月15日を開催予定とした。これに先立つ6月6日、地元の霞ヶ丘小学校6年生（194名）に授業の一環として、小型の円筒埴輪を製作してもらった。しかし当日の雨天のため、まつりは止む無く中止となった。

『おとし山まつり』の開催 例年、文化財保護強調週間（11月1～7日）の期間中、垂水区にある市史跡大蔵山遺跡（舞子細道公園）において、垂水区役所との連携事業として『おとし山まつり』を開催している。当年度は11月3日に実施し、遺跡公園内に復元している弥生時代の竪穴建物の公開と、「勾玉づくり」「土器づくり」「塩づくり」「赤米試食」などいろいろな古代体験イベントを開催した。当日は790名の参加があった。

「西区地域学」の開催 西区役所と連携し、年1回、西区とその周辺地域に所在する文化財を巡るバス見学会を開催している。13回目となる当年度は、『戦国のお城探訪』と題し、11月23日、端谷城跡（西区榎谷町）、三木市立みき歴史資料館（三木市）、三木城跡（三木市）、平井山ノ上付城跡（三木市）、淡河城跡（北区淡河町）をマイクロバスで移動して見学した。34名の参加があった。

史跡五色塚古墳の公開

垂水区所在の史跡五色塚古墳は、日本で初めて築造当時の姿に復元された、実際に墳丘上に立つことのできる巨大前方後円墳として全国的に有名であり、歴史学習の場として学校教育・社会教育に活用されている。また明石海峡を望む絶好のビューポイントとして多くの見学者がある。令和元年度の入場者は39,030人であった。見学に訪れた小学校団体および希望のあった団体に対しては、学芸員が現地において解説を行った。



fig.1 夏季企画展『木を見て森を観る』



fig.2 冬季企画展関連イベント「昭和の車大集合」



fig.3 バックヤードツアー（体験講座準備見学）



fig.4 出張体験講座（土器・埴輪をつくる）



fig.5 トライやるウィーク（企画展開催補助）



fig.6 おおとし山まつり



fig.7 西区地域学『戦国のお城探訪』（端谷城跡）

表 11 埋蔵文化財発掘調査一覧

道跡名	所在地	調査担当者	調査面積 (㎡) 掘調査面積 (㎡)	調査期間	調査内容	調査理由
1 井ノ田道跡 第3次調査	兵庫県本山中町2丁目62-1	小野寺洋介	32.4 55.4	02.01.06 ~ 02.01.24	奈良時代と考えられる遺構面を検出。弥生時代中期から古墳時代、奈良時代から中世の土器が出土。	個人住宅建設
2 岡本北道跡 第13次調査	兵庫県西岡本5丁目56番	小野寺洋介	90 120	01.07.16 ~ 01.08.08	弥生時代後期の竪穴建物、土坑、ピット、溝を検出。	個人住宅建設
3 岡本北道跡 第14次調査	兵庫県西岡本4丁目9番2	藤原文佳・荒田敬介	9 9	01.10.31 ~ 01.11.01	弥生時代後期後半～室内式併行段岡型竪穴建物遺構を検出。	個人住宅建設
4 福原道跡 第40次調査	福区福原南町3丁目33番1	藤井太郎 加納大貴	270 810	01.10.24 ~ 01.12.27	縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の竪穴建物・土坑・溝・周溝溝。平安時代末～鎌倉時代の竪柱建物・土坑・竪石遺構・溝を検出。	共同住宅建設
5 中央区 No.14 道跡 第1次調査	中央区生田町3丁目322番、323番	小野寺洋介	50 50	01.12.16 ~ 01.12.27	弥生時代後期と考えられる溝を検出。弥生時代後期の溝、高坪が出土。	共同住宅建設
6 曹井道跡 第41次調査	中央区等ノ廻町3丁目392番	石島三和	530 1590	01.12.18 ~ 02.03.27	古墳時代後期から飛鳥時代の竪柱建物・竪穴建物を検出。	共同住宅建設
7 吉東道跡 第5次調査	中央区二宮町1丁目31番	浅谷誠吾	15 15	01.06.17 ~ 01.06.21	古墳時代後期の溝を検出。	倉庫建設
8 網原道跡 第22次調査	兵庫区下網原11番	石島三和	709 1152	01.07.03 ~ 01.10.11	平安時代末の竪柱建物の可能性があるピット列、土器埋戻し土坑。弥生時代中期の竪穴建物を検出。	集合住宅建設
9 柳・荒田道跡 第62次調査	中央区柳町5丁目4-18	石島三和	185 185	01.05.09 ~ 01.05.31	平安時代を中心とする遺物包含層と弥生時代から遺器類を含む遺物包含層を検出。	集合住宅建設
10 柳・荒田道跡 第63次調査	兵庫区西馬場19-13、19-14	小野寺洋介	25.8 51.6	01.10.09 ~ 01.10.10	中世の遺構面2面を確証。溝、落ち込みを検出。土師器、遺器類が出土。	個人住宅建設
11 兵庫津道跡 第78次b調査	兵庫区北港瀬田町1番21	荒田敬介	109 436	01.04.01 ~ 01.04.12	18世紀の遺構面を4面検出。庵籠寺の寺遺構に関する東西溝を確証。「部」階層土器片出土。前年度から継続調査。	会社事務所兼倉庫建設
12 兵庫津道跡 第79次調査	兵庫区本町2丁目4-13	藤井太郎	270 540	01.06.03 ~ 01.09.06	室町時代後期の建物・土坑・柱穴、江戸時代初期の井戸・土坑・溝。大型竪石建物を検出。	共同住宅建設
13 兵庫津道跡 第80次調査	兵庫区北港瀬田町1-4	荒田敬介	4.5 36	01.06.25 ~ 01.06.26	江戸時代後半以降の遺構面を8面検出。	倉庫建設
14 兵庫津道跡 第81次調査	兵庫区西出町8番6、北比呂町6番8	浅谷誠吾	200 400	01.07.08 ~ 01.09.30	江戸時代後半の石垣、井戸、箱渠、土坑、江戸時代中期の井戸、土坑を検出。	共同住宅建設
15 兵庫津道跡 第82次調査	兵庫区本町1丁目3-16	山口英正 加納大貴	190 950	01.07.30 ~ 01.09.30	江戸時代中期の礎石建物、井戸、礎石建物、中世後期の礎石建物、瓦敷遺構、石組遺構、井戸を検出。	共同住宅建設
16 兵庫津道跡 第83次調査	兵庫区小向通1丁目1番1,118,19	浅谷誠吾	25 35	01.11.18 ~ 01.11.20	江戸時代の遺物包含層と平安時代の縁輪物器・直産部転用瓦を含む遺物包含層を検出した。	社屋建設
17 兵庫津道跡 第84次a調査	兵庫区三田町1丁目1-61、1-62	浅谷誠吾 加納大貴	70 70	02.03.09 ~ 02.03.31	江戸時代後半の土坑を検出。(次年度へ継続)	共同住宅建設
17 松原城跡 第1次b調査	北区追分町日下番字西山	佐伯二郎・藤原文佳・小野寺洋介・田島浩大・荏原聖希	8542 10930	01.04.01 ~ 02.01.21	中世山城の土塁、堀切、切岸、曲輪を検出。礎石建物、石敷遺構などを検出。前年度からの継続調査。	宅地造成
18 小坂道跡 第4次調査	北区八多町中607-1,607-3	山口英正・浅谷誠吾・加納大貴	1500 1500	01.05.07 ~ 01.07.03	中世の谷状地形を検出。	宅地造成
19 御藏道跡 第71次調査	浜田区御藏通5丁目211番地12号	小野寺洋介	24.4 97.6	01.08.19 ~ 01.08.23	古代～弥生時代の遺構面。奈良時代のピット、溝。弥生時代の溝・水田跡を検出。	倉庫建設
20 大田町道跡 第22次調査	須磨区大田町7丁目65番	荒田敬介	19.4 19.4	01.10.15 ~ 01.10.16	奈良時代の遺物包含層を確証。ピットを検出した。	個人住宅建設
21 須磨多聞橋 (試験調査)	須磨区板本町1-3丁目	小野寺洋介	122 122	01.12.09 ~ 01.12.19	大規模試験。遺物包含層や遺構は確認できず。路上や流れ込みから少量の遺物が出土。	都市計画道路 須磨多聞橋建設
22 垂水日向道跡 第39次調査	垂水区日向2丁目202番5	荒田敬介	14.5 14.5	01.05.27 ~ 01.05.28	中世の竪柱建物の可能性がある柱穴・土塀・墓子・土坑・溝・ピットを検出。	個人住宅建設
23 山崎道跡 第53次調査	西区平野町中津津9丁目2611番	荒田敬介	6 6	01.07.29	中世と考えられる土坑を検出。	個人住宅建設
24 山崎道跡 第54次調査	西区平野町中津津9丁目2614番地	小野寺洋介	25.5 106.5	01.08.29 ~ 01.09.04	弥生時代と平安時代後期～鎌倉時代の3面の遺構面を検出。	個人住宅建設
25 山崎道跡 第55次調査	西区下塚台5丁目108番10	荒田敬介	22.4 22.4	01.11.12 ~ 01.11.13	古墳時代の遺物包含層を検出。	個人住宅建設
26 山崎道跡 第56次調査	西区平野町中津津9丁目2600番	小野寺洋介	22.5 45.0	02.03.02 ~ 02.03.06	弥生時代後期～末期と平安時代～鎌倉時代の2面の遺構面を検出。	個人住宅建設
		調査面積合計	13,093.4㎡			
		掘調査面積合計	19,368.6㎡			

表 12 出土遺物整理事業一覧

道跡名	調査担当者	実施期間	事業内容	調査理由
1 都家道跡第95次調査	山口英正	01.04.01 ~ 02.03.31	出土遺物整理、記録類整理、報告書作成(令和2年3月発行)	共同住宅建設
2 柳内道跡第8次調査	藤原文佳・田島浩大	01.05.01 ~ 02.03.31	出土遺物整理、記録類整理、報告書作成(令和2年3月発行)	共同住宅建設
3 上岡道跡第5・6・7・8・11・13・14・15・18・21・22・27・29・32・34・35・43・44・45・48・51・53・57次調査	植田佳久・山口英正・山田祐生・小野寺洋介・加納大貴	01.04.01 ~ 02.03.31	出土遺物整理・遺物実測	(国庫補助金)

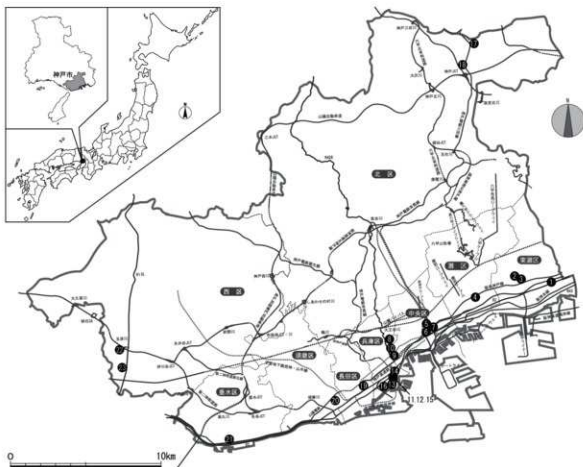


fig.8 令和元年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図 1:250,000
 (各遺跡の番号は、掲載遺跡番号と一致)

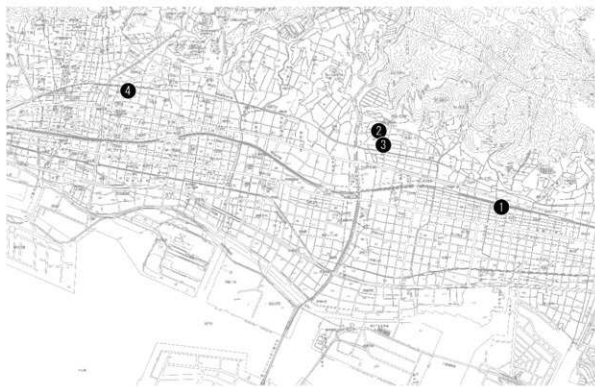


fig.9 調査地点位置図(1) 1:50,000

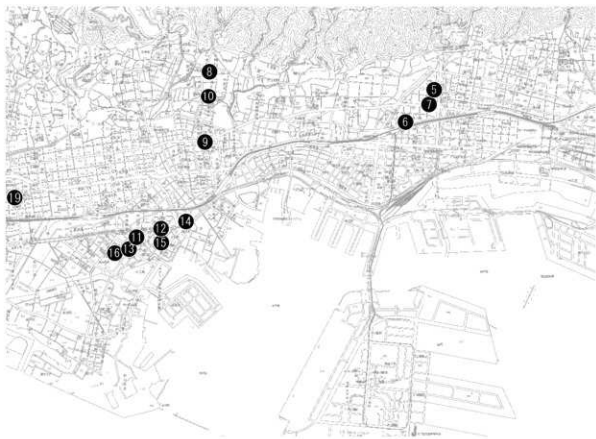


fig.10 調査地点位置図 (2) 1:50,000

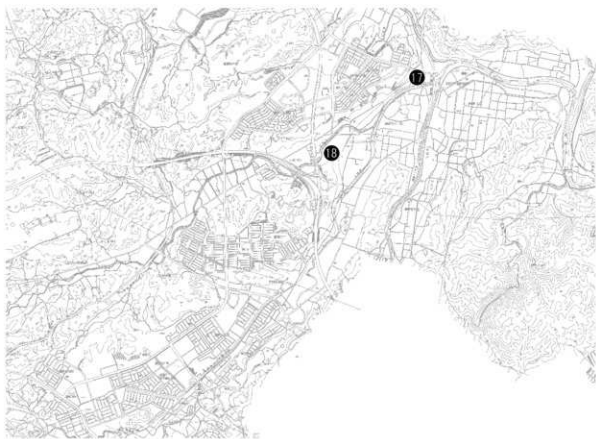


fig.11 調査地点位置図 (3) 1:50,000



fig.12 調査地点位置図 (4) 1:50,000



fig.13 調査地点位置図 (5) 1:50,000

II. 令和元年度の発掘調査

1. 井戸田遺跡 第3次調査

1. はじめに

井戸田遺跡は、六甲山系南麓に形成された扇状地末端の標高8～15mの地点に立地する遺跡である。昭和63年(1988)に遺跡の存在が周知されて以降、2回の発掘調査が行われており、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明している。第1次調査では、古墳時代・奈良時代・中世の土坑・柱穴・溝状遺構が検出された。第2次調査では、弥生時代後期の遺構面が3面確認され、自然流路と水田畦畔が検出された。このうち、自然流路内から縄文時代晩期の土器が出土しており、周辺に当該期の遺跡の存在が示唆されている。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設工事に伴うものである。調査区は北側を1区、南側を2区に分割して行った。

基本層序

現地表面は標高15.0m前後を測る。層序は上層より、盛土、洪水砂、オリーブ黒色粘質土、青黒色粘質土(第1遺物包含層)、暗オリーブ灰色粘質土(上面が第1遺構面、第2遺物包含層)、オリーブ黒色粘質土(第2遺物包含層)、灰オリーブ色粘質土(第2遺物包含層)、にぶい黄褐色粘質土(上面が第2遺構面)の順に堆積する。

第1遺構面

中世～近世の遺物を含んだ青黒色粘質土を掘削後、暗オリーブ灰色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面は標高13.5～13.6mを測る。遺構面上から古墳時代～中世の土師器、須恵器、磁器が出土した。試掘調査時にピット状遺構を検出したものの、本調査では遺構は確認できなかった。基盤層が20cm程度の角礫を多量に含む粘質土であり、後世に流れ込んだ土砂の上面である可能性が高い。堆積時期は中世が上限と考えられる。

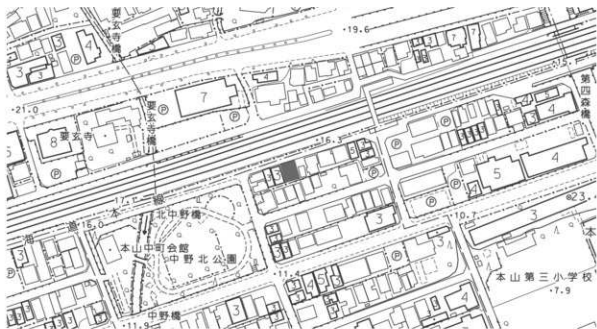


fig.14 調査地位位置図 1:2,500

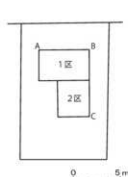
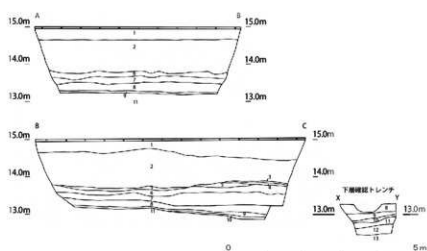


fig.15 調査区配置図



- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 2.5Y6/6 明黄褐色粘砂質土 (遺土) | 9. 7.5Y5/1 オリーブ灰色粘質土、暗赤褐色粘質土ブロック状になる |
| 2. 2.5Y5/2 暗黄褐色粘質土 (遺土) | (第2遺構遺物包含層) |
| 3. 10Y5/4 に近い黄褐色粘砂質土 (洪水砂) | 10. 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土 (第2遺構遺物包含層) |
| 4. 10GY4/1 暗緑灰色粘砂質土 (洪水砂) | 11. 10Y5A/3 に近い黄褐色粘質土、灰～黄灰色粘質土層になる |
| 5. 10GY4/1 暗緑灰色シルト質土 (洪水砂) | (第2遺構遺構層) |
| 6. 5GY2/1 オリーブ黄色粘質土 | 12. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 |
| 7. 5BG2/1 赤褐色粘質土 (第1遺構遺物包含層) | 13. 5Y4/1 灰色粘質土、均質(～15cm)多量に含む |
| 8. 2.5GY2/1 暗オリーブ灰色粘質土、角礫(～20cm)多量に含む | (第1遺構遺構層、第2遺構遺物包含層) |

fig.16 土層断面図

第2遺構面

弥生時代～奈良時代の遺物を含む暗オリーブ灰色粘質土、オリーブ黒色粘質土、灰オリーブ色粘質土を掘削後、にぶい黄褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面は北側で標高13.2m前後、南側で標高12.8～12.9mを測る。遺構面上から奈良時代の土器が出土しており、この時期に営まれたものと考えられる。本遺構面では、南東方向に向かって地形が下がっていく様子が確認できた。平成24年度(2012年度)に本調査地の南東側の区画で実施された試掘調査では、谷状の落ち込みが検出されており、これに続くものと考えられる。

SE201 1区北側で検出した長径145cm・短径120cm・深さ48cmの井戸である。埋土は黒褐色粘質土、暗オリーブ褐色粘質土、黒色粘質土、黄灰色粘質土の順に堆積し、遺構埋土中より奈良時代の土師器、須恵器が出土した。本遺構の深度はさほどではないものの、最下層で5cm程度の礫を敷いていたことから井戸と考えられる。最上層は第2遺物包含層と同様の角礫を多量に含んだ暗オリーブ黒色粘質土が堆積しており、後世の洪水によって埋没したものと推定される。なお、本遺構からは長さ8.3cm×幅1.0cm×厚さ5.2mmの木片が出土している。スギと考えられる板目板で平面を平滑に加工した板材であるが、用途は不明である。

SP201 1区北西側で検出した長径60cm・短径49cm・深さ27cmの楕円形のビットである。詳細な時期は不明であるが、土師器片が出土した。

SP202 1区北西側で検出した長径38cm・短径24cm・深さ8cmの楕円形のビットである。

SP203 1区北西側で検出した長径60cm・短径25cm・深さ10cmの楕円形のビットである。

SP204 1区北西側で検出した直径20cm・深さ6cmのビットである。詳細な時期は不明であるが、土師器片が出土した。

下層確認トレンチ

下層における遺構・遺物の存在の有無を確認する目的で2区中央部南側に設定したトレンチ

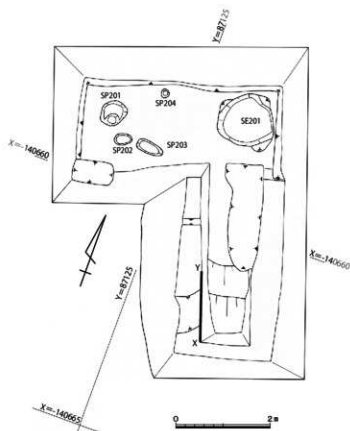


fig.17 第2遺構面平面図

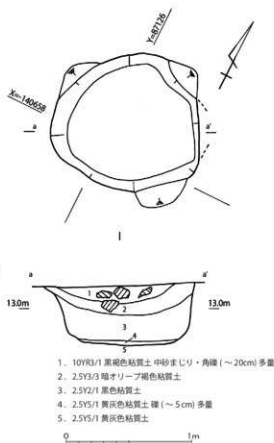


fig.18 SE01 平・断面図

である。第2遺構面を上面とするにふい黄褐色粘質土以下、灰オリーブ色粘質土、灰色粘質土の順に堆積する。灰色粘質土は直径15cm程度の円礫を多量に含むことを確認したため、本層位で掘削を終了した。標高は、灰色粘質土上面で12.5m前後を測る。なお、第2遺構面下より遺物は確認されなかった。

3. まとめ

今回の調査では、2面の遺構面とそれらに伴う遺構および遺物を確認することができた。本遺跡の第1次調査では、奈良時代の遺構面が検出されており、今回検出した第2遺構面およびこれに属する遺構と同時期のものと考えられる。第2次調査では、弥生時代後期の水田畦畔が検出されているものの、今回の調査では同時期の遺構は確認できなかった。しかし、遺物包含層から弥生時代中～後期の土器が出土していることは、井戸田遺跡における活動時期を考えるうえで重要といえる。

本遺跡では、自然流路が多く検出されており、旧地形が入り組んでいた可能性がある。また、本遺跡の西隣を流れる要玄寺川が幾度か氾濫をおこしていることも考慮すると、居住には適さない土地であったとも考えることができる。しかし、近隣には住居跡が検出されている本山遺跡や本山中野遺跡があり、これらの遺跡と井戸田遺跡は有機的な関係をもって営まれたものと推測できる。このように、今回の調査ではこの周囲における古地形・環境、当時の活動を復元するうえで重要な成果を得たといえる。



fig.19 1区第1遺構面全景（南東から）



fig.20 1区第2遺構面全景（北西から）



fig.21 SE201全景（南東から）



fig.22 2区第2遺構面全景（北西から）

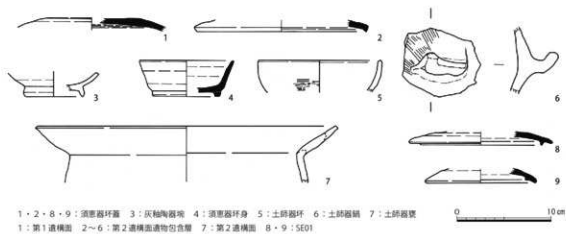


fig.23 出土遺物

2. 岡本北遺跡 第13次調査

1. はじめに

岡本北遺跡は、六甲山系から南東方向に流れる住吉川によって形成された扇状地の標高約40～57mの地点に位置する遺跡である。平成元年度（1989年度）の第1次調査以降、これまでに12次の発掘調査が行われ、弥生時代～古墳時代前期と中世の集落遺跡であることが確認されている。とくに、本調査地の南東側に隣接する第2次調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物11棟や鎌倉時代の掘立柱建物3棟など多数の遺構が検出された。また、今回の調査地の北西側に隣接する西岡本遺跡第9次調査においても、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が確認されている。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、調査区を南北（南東側：1区、北西側：2区）に2分割し、南側から調査を開始した。

基本層序

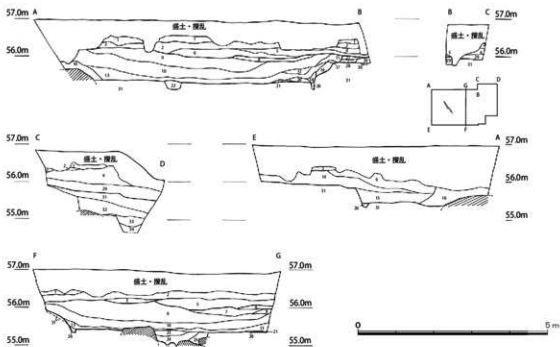
現地表面の標高は、北側で57.0m前後、南側で56.0m前後を測る。層序は上層より、盛土・攪乱、旧耕地、にぶい黄橙色粘質土（第1遺構面遺物包含層）、黒褐色粘質土（上面が第1遺構面、第2遺構面遺物包含層）、橙色粘質土（上面が第2遺構面）、褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土、明黄褐色粘質土の順に堆積する。第2遺構面下であるにぶい黄褐色粘質土には直径30cm以上の花崗岩の転石、明黄褐色粘質土には大きさ15cm前後の角礫がみられ、遺構・遺物の存在する可能性が低いことから標高54.6m付近で掘削を終了した。なお、1区内では遺構面が2面確認できたのに対し、2区内では遺構（SB101）の存在や傾斜地の堆積のため、1面のみ確認している。

第1遺構面

にぶい黄橙色粘質土を掘削後、黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は北側で56.2m前後、南側で55.9m前後を測る。遺構は竪穴建物・ピットを検出した。遺構面の時期は、上層および遺構内の遺物から弥生時代後期と考えられる。



fig.24 調査地位置図 1:2,500



1. 2.5W5/2 暗灰黄色砂質土 (旧耕土)
2. 10V5/4 におい黄褐色粘質土, 灰色砂質土 (旧耕土)
3. 10V4/4 褐色粘性砂質土, バイラン土少量に混じる (第1遺構面遺物包含層)
4. 10V3/6 におい黄褐色粘質土 (第1遺構面遺物包含層)
5. 7.5V4/4 褐色粘性砂質土, バイラン土多量に混じる (第1遺構面遺物包含層)
6. 7.5V2/2 黄褐色粘質砂質土, バイラン土少量に混じる (SB101 埋土)
7. 10V2/2 黄褐色シルト質土, バイラン土少量に混じる
8. 10V3/4 暗褐色シルト質土, バイラン土少量に混じる (SB101 埋土)
9. 10V2/1 黒褐色粘性砂質土, バイラン土多量に混じる (SB101 埋土)
10. 10V3/3 暗褐色粘質砂土 (SB101 埋土)
11. 10V4/4 におい黄褐色粘質土, バイラン土多量に混じる (SB101 埋土)
12. 10V3/3 暗褐色粘質土, バイラン土少量に混じる (SB101 埋土)
13. 10V2/2 黄褐色粘質土 (SB101 埋土)
14. 7.5V4/4 褐色粘質土, バイラン土少量に混じる
15. 10V4/4 におい黄褐色粘性砂質土, 赤褐色ブロック(～1mm) 砂少量混じる (SB101 埋土)
16. 2.5V4/6 オリーブ褐色粘質土 (SB101 埋土)
17. 10V4/2 灰黄褐色粘質土, バイラン土多量に混じる (SB101 埋土)
18. 7.5V3/4 暗褐色シルト質土, 粗砂混じり (SB101 埋土)
19. 7.5V4/4 褐色シルト質土, 粗砂混じり, バイラン土少量混じる (SB101 埋土)
20. 10V7/6 明黄褐色粘質砂土 (SB101 埋土, 上面硬面)
21. 10V4/4 褐色粘質土 (SB101 埋土)
22. 7.5V3/2 黄褐色粘質土 (SB101-4に埋土)
23. 10V4/4 褐色粘性砂質土, バイラン土少量に混じる (SB101-K1 埋土)
24. 10V4/3 におい黄褐色シルト質土 (SB101-K1 埋土)
25. 7.5V4/4 褐色シルト質土, 粗砂混じり, バイラン土少量混じる (SB101-K1 埋土)
26. 10V4/3 におい黄褐色粘性砂質土, バイラン土少量混じる (SB101 埋土)
27. 10V2/2 黄褐色粘質土 (第1遺構面遺物包含層)
28. 7.5V6/6 褐色粘質土, バイラン土多量に混じる, 角礫(～5cm) 多量に混じる (第2遺構面遺物包含層)
29. 7.5V6/6 褐色粘質砂質土, バイラン土多量に混じる (第2遺構面遺物包含層)
30. 10V3/3 暗褐色粘質土, バイラン土多量に混じる (SO201 埋土)
31. 7.5V6/6 褐色粘質土, バイラン土多量に混じる (第2遺構面遺物包含層)
32. 7.5V4/3 褐色粘質土, 粗砂混じり, バイラン土少量混じる
33. 10V6/4 におい黄褐色粘質土, 粗砂混じり, 転石(花崗岩) 含む
34. 10V6/6 明黄褐色粘質土, 粗砂混じり, 角礫(～15cm程度) 多量に混じる

fig.25 土層断面図

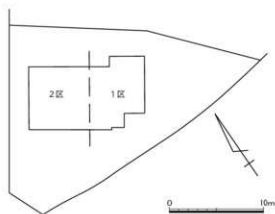


fig.26 調査区配置図

SB101 方形の竪穴建物である。調査範囲の中央～北側約6割を占め、2区内はほとんどがこの遺構内におさまる。本遺構の北西隅・北東隅・南西隅が調査区外に位置するため全容は不明であるが、南北8.0m・東西7.9m以上、深さは北側で0.85m・南側で0.65mを測る。軸はほぼ南北方向に平行である。埋土は、褐色粘性砂質土、黒褐色細砂質土、黒褐色シルト質土、暗褐色シルト質土、黒色粘性砂質土、暗褐色粘性砂質土、黒褐色砂質土の順で堆積する。褐色粘性砂質土内より弥生土器が出土したが、黒褐色細砂質土～黒褐色シルト質土内より6～7世紀の須恵器が出土しており、洪水などにより埋土が攪乱されているものと考えられる。周溝(幅0.1～0.3m・深さ0.2m)・土坑4基・ビット12基が伴い、床面の一部には硬化面が確認できた。黒褐色砂質土～床面にかけて出土した遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

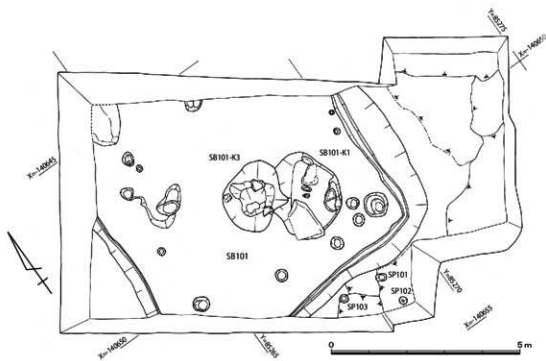


fig.27 第1遺構面平面図

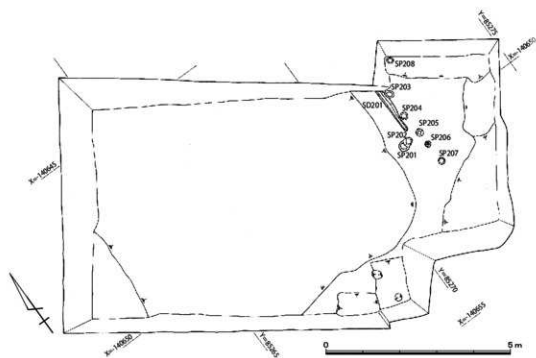


fig.28 第2遺構面平面図

SB101-K1 SB101内の南東側で検出した楕円形の土坑である。長径2.3m・短径1.9m・深さ0.3～0.35mを測る。SB101-K3に切られた状態で検出されたため、これよりも前に設けられたものと推測されるが、本遺構の性格については不明である。

SB101-K3 SB101内のほぼ中央で検出した楕円形の土坑である。長径1.9m・短径1.7m・深さ0.6mを測る。黒褐色粘質土、褐色粘質土、暗褐色粘質土、褐色粘質土の順に堆積する。このうち、暗褐色粘質土には焼土、褐色粘質土には焼土と炭化物がみられたため、灰跡と判断される。

SP101～103 SB101の南側で検出されたピット群である。いずれも暗褐色粘性砂質土を埋土とし、「L」字状に並ぶものの、一連のものかは不明である。

第2遺構面

弥生時代後期の遺物を含む黒褐色粘質土を掘削後、橙色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は55.8～56.1mを測る。遺構はピット・溝を検出した。遺構面の時期は弥生時代後期と考えられる。

SP203～207 調査区東側で検出したピット群である。いずれも暗褐色粘質土を埋土とし、直線状に並ぶものの、ピット同士の直径や深さに類似性がみられないため、一連のものかは判断しがたい。このうち、SP204とSP207から弥生土器が出土したが、小片のため詳細は不明である。

SD201 調査区東側で検出した溝である。長さ約1.4m以上・幅0.1～0.2m・深さ5cmを測り、埋土は暗褐色粘質土である。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴建物・土坑・ピット・溝といった遺構とそれらに伴う遺物を得た。

本遺跡では、第2次調査や第12次調査で弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の竪穴建物が確認されている。また、本調査地の北西隣に位置する西岡本遺跡第9次調査では弥生時代後期の土坑などが検出され、北側に位置する西岡本遺跡第12調査では遺構には伴っていないものの、弥生時代後期と推測される銅鐻と磨製石剣が出土しているなど、今回の調査地周辺では、弥生時代後期における活発な活動の痕跡がみえる。

このように、今回の調査では既存の調査成果に加え、岡本北遺跡および西岡本遺跡の弥生時代後期における集落域の広がりを考えるうえで重要な成果を得たといえる。



fig.29 1区第2遺構面全景（南東から）



fig.30 2区第1遺構面全景（南東から）

3. 岡本北遺跡 第14次調査

1. はじめに

今回の調査地は、標高約 45.0 m の緩傾斜地で、甲南大学岡本キャンパス 1 号館から南西へ直線距離で約 240 m のところにあたり、弥生時代後期～終末期の竪穴建物を検出した第 10 次調査の北側に隣接している。

2. 調査の概要

個人住宅建設に伴い施工時の掘削深度が最も深くなる部分 (fig.33 A～C 区) が第 10 次調査で検出されている弥生時代の遺構面にあたる可能性が生じたため、工事施工時に立会を実施した結果、弥生時代の遺構面を確認した。そのため、今回の工事計画で予定されている施工掘削深度までを人力で掘削し調査を行った。

基本層序

A 区で黄褐色混じり暗灰色粘質中砂を除去すると、竪穴建物の埋土とみられる黒色中砂を検出した (SB03)。黒色中砂は、複数の遺構 (性格不明遺構) に切られていた。性格不明遺構は出土遺物から、いずれも弥生時代後期後半～庄内式併行期に比定できる遺構とみられる。黒色中砂は、第 10 次調査で検出されている竪穴建物埋土と土層の特徴が類似していることから、竪穴建物の埋土と判断した。黒色中砂は、わずかに弧を描く掘形を呈していた。出土遺物から、弥生時代後期後半～庄内式併行段階にあたるものとみられる。B 区は、施工掘削深度まで掘削したが弥生時代の遺構面までは到達しなかった。C 区は、現地表面から約 1.8 m まで掘削したが、弥生時代の遺構面は検出されなかった。



fig.31 調査地位位置図 1:2,500

3. まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代の竪穴建物とみられる遺構を1基、性格不明遺構を2基検出した。竪穴建物は、第10次調査で検出されているSB01が北側につづくものにあたる可能性も考えたが、第10次調査で検出されているSB02の直径が約5.0m前後と推定されており、第1次調査で検出されている円形竪穴建物が直径5.0～7.0m前後であることを踏まえると、SB01とSB03は、切り合い関係にある別の建物にあたるものと考えられる。

今回の調査地点を含む近隣一帯では、弥生時代後期後半～庄内式併行期の建物群が20棟以上見つかっていることから、当該期の西岡本遺跡とともに、比較的安定した段丘上や自然堤防上を利用して集落が形成されていた状況がうかがえる。今回の調査で検出した竪穴建物は、弥生時代から古墳時代への過渡期に当地へ形成された集落の一部分を示すものとして位置づけることができる。

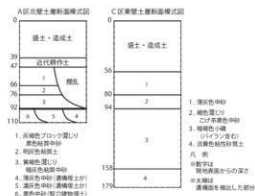


fig.32 土層断面模式図

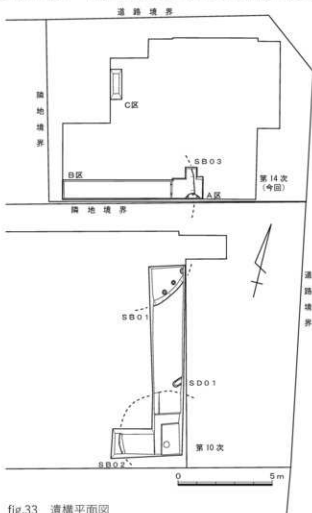


fig.33 遺構平面図



fig.34 A区第1遺構面検出状況(北から)



fig.35 A区西壁土層断面(南東から)

4. 篠原遺跡 第40次調査

1. はじめに

篠原遺跡は灘区篠原北町・中町・南町一帯に広がる縄文時代～中世にいたる集落遺跡である。昭和4年(1929)に学術雑誌に紹介されて以来、考古学界で著名な遺跡として知られる。

昭和58年(1983)以降、これまでの調査では、縄文時代後期～晩期、弥生時代後期～終末期を中心とする遺構・遺物が確認されている。

なお、令和2年度に『篠原遺跡第40次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地は六甲山南麓の六甲川と楠谷川の合流地点の東約400mに位置し、現標高55.0～56.0m付近の扇状地上に立地する。

基本層序

調査区内には上層より現代盛土、現代耕作土、近世耕作土、中世耕作土、褐色粘質土(古代～中世遺物包含層)、暗灰褐色および黒褐色砂質土(第1遺構面・弥生時代遺物包含層)、灰褐色砂質土(第2遺構面・弥生時代遺物包含層)が堆積し、黄灰色砂質土(第3遺構面・地山面)となる。第1遺構面は北東部で標高54.3mを測り、南西部では標高53.5mである。第2遺構面、第3遺構面はそれぞれ上層遺構面から約0.2mずつ下がる状況である。調査地付近は全体に南下がりの地形で、調査区内でさらに東から西へ緩やかな傾斜地形を呈している。

第1遺構面

掘立柱建物1棟、溝7条、集石遺構、土坑5基、ピットを検出した。

SB101 調査地の北東部で検出した総柱の掘立柱建物である。径約0.4m、深さ0.1～0.3m



fig.36 調査地位置図 1:2,500



fig.37 調査区配置図及び断面図位置図

の柱穴が柱間 1.7 m ~ 1.9 m で並ぶ。調査区内では南北 3 間、東西 2 間を検出したが、調査区外の北と東に続くものと思われる。柱穴から土師器皿や須恵器が出土した。

SD104 調査区中央で検出した東西方向の溝である。検出長は約 13.0 m で西側へさらに延びる。最大幅約 2.0 m、深さは西側が深く約 0.6 m、中央付近で約 0.2 m、東端は浅くなり消滅するが、調査区東端まで痕跡と思われる土壌の変色は確認できる。遺物は、土師器皿・椀、須恵器椀・甕や瓦器椀などが出土した。

SX101-1 ~ 10 調査区中央北側、SB101 の西側、SD104 の北側で帯状に延びる集石群を検出した。調査区内で南北約 7.0 m を検出し、北側にさらに続くものと考えられ、10 基ほどの単位に分けられる。石の間からはわずかに須恵器椀の破片や土師器鍋、甕と考えられる陶器の破片などが出土した。形態から埋葬施設や火葬施設の可能性を想定したが、石に被熱痕は確認できず、周囲を含め炭や骨片などの検出もなかった。

SK104 2 区南半で検出した土坑である。平面隅丸長方形で東西約 2.2 m、南北 2.7 m、深さ 0.35 m を測る。灰色系のやや粘性のある砂質土の埋土には人頭大から倍ほどのやや大振りの大きさの石が含まれる。須恵器椀と土師器皿が出土した。

第 2 遺構面

竪穴建物 1 棟、溝 1 条、土坑、落ち込み、柱穴を検出した。

SB201 調査区北東部で検出した円形竪穴建物で、調査区外の北側に続く。推定径約 9.0 m と考えられるが、やや歪な箇所があり、多角形の可能性も考えられる。埋土は下層に黒灰色粘質土、上層に黒褐色粘質土が堆積する。周囲に高床部があり、その内側は方形の落ち込みとなる。この落ち込みの西辺で炭化材を検出し、これに沿う土坑 SX203 は被熱状況が顕著であった。炭や焼土が互層堆積し、炉跡の可能性がある。建物の南端部に長辺 2.0 m、短辺 1.5 m の平面長方形の土坑があり、人頭大の石を伴う SK208 や SK206・207 の土坑が並んでいる。この部分が建物への入口部分の可能性がある。遺物は南東部の高床上からまともって出土したほか、西側の高床部などから銅鐵が 4 点出土した。

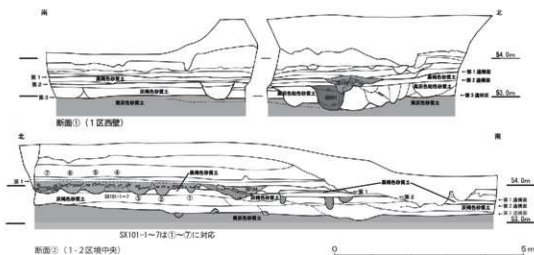


fig.38 土層断面図

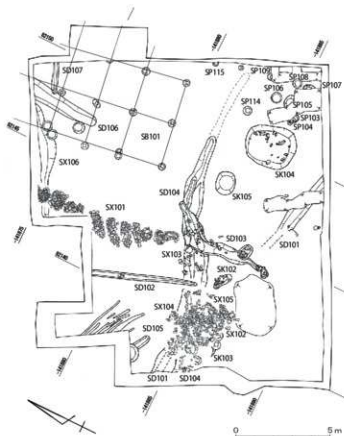


fig.39 第1遺構面平面図

形は不明である。深さは約0.3mで埋土は暗灰色粘性砂質土の単一層である。埋土上層、検出面付近から縄文時代晩期の深鉢や浅鉢が出土した。

第3遺構面

黄灰色砂質土の地山面で径0.2～0.4mのビットを20基ほど検出した。いずれも深さは0.2mほどである。出土遺物に乏しく、弥生土器や縄文土器と考えられる土器片が出土したビットがあるが、詳細な時期は不明である。



fig.40 1区第1遺構面全景(南から)



fig.41 2区第1遺構面全景(南西から)

SD201 調査地西側で検出した溝で、南東部で屈曲し、平面逆L字状を呈する。東西約4.5m、南北約7.0mで、西側と北側にさらに延びるものと判断される。溝の幅は約1.0～1.4m、深さは0.5mほどである。底から人頭大の石が1個出土した。遺物はほとんどが小片で部位のわかるものは少ない。

SX201 最大幅約1.5m、検出長約4.0m、深さ0.1～0.3mの落ち込みである。SD201の内側に位置することから埋葬施設を想定したが、底は平らではなく、平面形も特に南側は不明瞭となった。小片ながら弥生土器を主体として、縄文土器を含む比較的多くの土器片が出土した。

SK205 東西約1.0m、南北約2.5mを検出したが、北側が中世の落ち込みSX106に切られるなど、規模や平面

3. まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認し、遺構・遺物を検出した。

縄文時代の中期～晩期の遺構・遺物は、阪急電鉄神戸線以南での遺構の検出は初めてであり、分布域がさらに南側に拡がるのが判明した。

弥生時代後期後半から終末期にかけては、竪穴建物や周溝墓の可能性のある溝を検出しており、篠原遺跡における同時期の居住域、また墓域の形成、変遷を考える上で重要なものである。竪穴建物は推定径約9.0mを測る大型であり、ここから少なくとも銅鏃4点が出土しており、拠点集落の青銅器保有の様相を考える上で興味深い資料である。

篠原遺跡ではこれまで中世の建物などの検出は少なかった。今回の調査では掘立柱建物をはじめ、屋敷地の区画に伴う可能性のある溝や集石群といった特異な遺構を検出しており、中世段階の篠原遺跡の景観を復元する上で重要な成果であった。

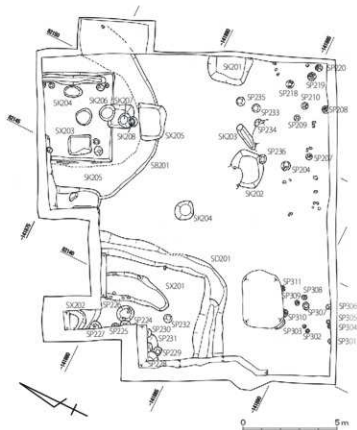


fig.42 第2・第3遺構面平面図



fig.43 1区第2遺構面全景（南から）



fig.44 2区第2遺構面SB201全景（南西から）

5. 中央区 No.14 遺跡 第1次調査

1. はじめに

中央区 No.14 遺跡は中央区生田町に存在する。南側は二宮東遺跡に接し、周辺には二宮遺跡、生田町古墳群、熊内遺跡が近接する。また近隣には古墳の存在が想定される中央区 No.11 遺跡、中央区 No.12 遺跡が存在する。

生田町の古墳について初めて報告されたのは明治 32 年 (1899) の『東京人類學會雜誌』「神戸市生田村発見古墳の調査」である。それによると、江戸時代後期には畑地としてすでに開墾されており、ほとんどの古墳は原型を留めていなかったらしいが、横穴式石室の存在や多数の須恵器、鉄製品、石製紡錘車等の出土が確認されている。しかし全ての古墳が畑地にはならず、昭和 5 年 (1925) 『考古学雑誌』「鉗子発見の神戸市生田町古墳」等でも確認できる古墳は存在した。また、大正元年 (1912) に畑地の下層から横穴式石室を確認し、鉗子や銀環、ガラス小玉、直刀、馬具、鉄鍬、人骨等が出土したことも記されている。最近では、平成 11 年度 (1999 年度) に生田町古墳群第 1 次調査が実施され、古墳時代後期の溝、土坑を確認した。

これらの文献の記録や調査の成果により、生田町古墳群の存在や中央区 No.10 遺跡～中央区 No.14 遺跡にも古墳が存在するであろうことが認知され、現在に至っている。

2. 調査の概要

今回は共同住宅の建設に伴い、中央区 No.14 遺跡の第 1 次発掘調査を実施した。

基本層序

近現代の攪乱層直下が黄褐色砂質土の遺構面となる。遺構面は北が高く、標高 26.3m ～ 26.8m を測る。

検出遺構

今回の調査では、ほぼ南北方向に伸びる溝を 1 条確認した。

SD01 幅約 3.0m、深さ約 0.6m を測る溝である。溝の側面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト質極細砂、暗黄茶褐色砂質土、暗褐色砂質土が堆積している。



fig.45 調査地位位置図 1:2,500

遺物は、弥生時代後期の甕、高坏等の小片が出土した。弥生後期土器片が多く出土していることから、SD01は弥生時代後期の遺構である可能性が高い。また、須恵器の微細な破片が1点出土した。器種等は不明だが、古墳時代後期以降のものと考えられる。

3. まとめ

今回は中央区 No.14 遺跡で初めての調査であった。調査の結果、溝を1条確認した。溝内出土遺物は、ほぼ弥生時代後期の土器だが、微細な須恵器片が1点だけ出土し、古墳時代後期まで存続していた可能性もある。ただし、遺物の大部分は弥生時代後期の土器であり、当遺跡では古墳時代以外に弥生時代後期の遺構も存在する事が判明した。

周囲では南接する二宮東遺跡で弥生時代後期の遺構と遺物が確認されており、一連の遺跡である可能性がある。

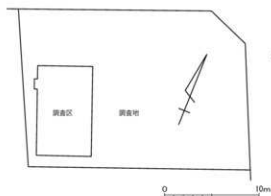


fig.46 調査区配置図



fig.48 SD01 全景 (東から)



fig.47 土層断面図

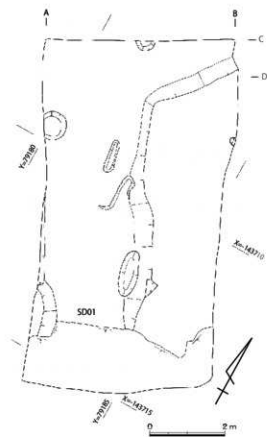


fig.49 遺構平面図

6. 雲井遺跡 第41次調査

1. はじめに

神戸市中央区に所在する雲井遺跡は市内有数の縄文遺跡として広く知られ、これまでの調査では、縄文時代全般を通して遺構・遺物の存在が確認されている。また、弥生時代中期には竪穴建物や玉作りに関連する遺物、武器形青銅品の石製鋳型などが発見され、集落の最盛期を迎える。古墳時代後期には掘立柱建物や溝などが確認され、以後中世にいたるまで断続的に集落が存続する。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査範囲を南北に1、2区と2分割して順次調査を実施した。なお、令和2年度に『雲井遺跡第41次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

基本層序

今回の調査では、中世～近世、古代、縄文時代後期の計3面の遺構面を確認した。堆積層は、基本的には調査区全域において同質である。ただし第2遺構面基盤層については、一部遺構形成に伴う地業が実施されており、その範囲は本来の自然堆積層が人為的な客土に置換されている。整地層の分布は調査範囲の北東端で一部確認したもので、今回の調査地を超えてさらに北および東に広がっている。

第1遺構面

現地表下には近世～近現代の土器を含む旧耕作土層およびその直下の床土が認められる。第1遺構面の検出高は、調査区北側で標高16.7m前後である。第1遺構面基盤層は黒褐色系粘土層で、この層自体が弥生時代中期～中世前期頃までの土器片を豊富に含む遺物包含層である。この面で確認された遺構は鋤溝2条とピット数基だが、埋土の質よび出土土器片から判断して、いずれも上位の層の耕作に伴う可能性が高い。



fig.50 調査地位位置図 1:2,500

第2遺構面

第2遺構面は、第1遺構面基盤層である遺物包含層とその直下の黒褐色系粘土層を取り除いた標高16.2m前後の面を基盤層とする。第2遺構面直上位に堆積する層は、上位の第1遺構面基盤層とほぼ同一の色調ながら、1

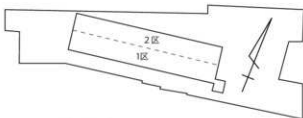


fig.51 調査区配置図

～3mm大の微細な花崗岩粒を多く含む点

と、遺物の包含量において相違がみられる。今回第2遺構面として報告する遺構の一部は、実際にはこの下位の遺物包含層上面から切り込んでいるものもあり、一括して第2遺構面基盤層上で検出することとした。

第2遺構面は、調査区西側では比較的軟弱な黄色褐色系砂層、東側は黄褐色系粘質砂～細砂からなる堅緻なバイラン土層を基盤層とする。検出された遺構は、古墳時代後期から飛鳥時代を主体とする。これらの遺構群は調査地の東側で集中して検出された。検出高は標高16.2m前後に収まり、東側と西側で高低差はさほどない。

第2遺構面で確認された遺構は、整地層1か所、掘立柱建物1棟 (SB201)、竪穴建物1棟 (SB202)、門の可能性があるピット2基、廃棄土坑2基 (SX201、202)、焼土と炭を埋土とする土坑1基、そのほかピット多数である。平面が切り合うことから、時期的前後関係が存在するとわかる。

整地層 整地層は、弥生時代～飛鳥時代までの土器類を含む土からなり、色調、土質から判断して、概ね周辺由来の土で構成されていると考えられる。確認できた範囲での整地層の平面規模は南北約10m×東西約10m程度で、平面形は不定形、調査区を超えて北、および東側にさらに続く。



fig.52 1区第2遺構面全景 (北東から)



fig.54 第2遺構平面平面図

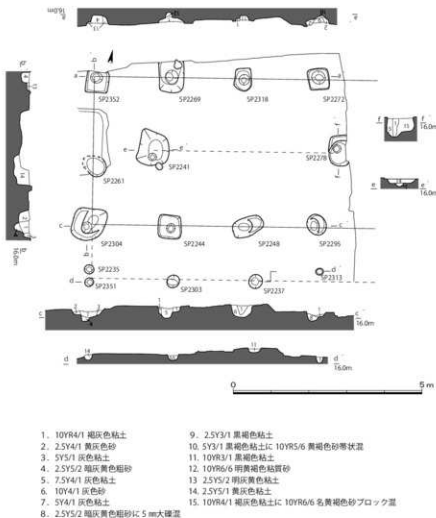


fig.55 SB201 平・断面図

整地層を構成する土は、概ね①黄褐色系砂（本調査区基本層序における「縄文土器包含層」あるいはその直下の「縄文時代遺構面基盤層」に由来する可能性が高い）②黒褐色系粘質砂～粘土③褐色系粗砂～砂礫（本調査区における、「土石流堆積層」に由来）で、これら性質の異なる3種類の土を、ブロックの状態ランダムに整地範囲内に投入している

SB201 整地層上で検出した桁行4間以上、梁行2間の側柱建物である。東辺は調査区外に存在する。桁行7.0m以上、梁行3.7mの規模を持つ。

柱穴掘方は一辺60cmの方形または隅丸方形で、柱穴の深さは、南辺で30.0～45.0cm前後、北辺で25.0cm～30.0cm前後、西辺で40.0cm～50.0cm前後を測り、柱穴掘方はすべて整地層を掘り込んで作られている。また、SP2241とSP2278を屋内棟持柱として捉える可能性も提示しておきたい。各柱穴からは、土師器、須恵器片が出土している。

SB202 南東部で検出した方形竪穴建物である。建物北辺と東辺を検出しているが、後述のSX202に北西隅を切られており、西辺および南辺は調査区外である。検出できた下範囲では北辺3.5m×東辺3.8m以上、壁高約15.0cm程度で、大型の攪乱坑が存在するため、柱配置も不明である。西辺は周壁溝が検出されたが、北辺については確認されていない。

SP2324・SP2325 整地層の広がり西端で、門の可能性のある平面円形の土坑2基を並んだ状態で検出した。直径70.0cm程度、深さ25.0cm程度で、埋土は単層ないし二層程度である。遺物は小片のみであり、時期等の詳細な決定は困難であった。仮に門であれば簡便な形式であり、官衙公門のような格式と性格は想定し得ない。

SX201 SB201の内側で検出された、長辺2.0m、短辺1.2m、深さ1.0mほどの不整形の土坑である。整地層を掘り込み、かつ周辺に存在する複数のピットを切って形成されている。細片の遺物が出土している。

SX202 SB201の南側で検出された南北径4.0m、東西径2.9m、深さ0.6mほどの不整形の土坑である。整地層を彫り込んで形成されている。炭・焼土を顕著に含み、火災後の清掃に伴う土坑である可能性が高い。出土遺物はいずれも小片であったが、おおむね飛鳥時代の遺構と考えられる。

第3遺構面

第2遺構面基盤層のうち、調査地西側の沖積砂層およびパイラン土層からは、北白川C式を主体とする縄文土器が若干量出土した。これらの層を縄文時代の遺物包含層と認識し、その直下層上面を遺構面として検出を試みたが、顕著な遺構は確認されなかった。

3. まとめ

今回の調査で時期の明確な遺構は、TK209併行期か飛鳥時代のいずれかに属する。TK209期の遺構は整地層の広がり周縁部に位置し、整地層の広がる範囲では当該期の遺構は地業に伴い削平された可能性が高い。飛鳥時代の遺構はSX202が存在し、整地層およびSB201の時期は上記2時期の間になろう。

以上のように、当該地における建築遺構の変遷は、6世紀末から8世紀第1四半期へと推移し、ほぼ1世紀近い時間を経過していることになる。これは飛鳥時代初頭から奈良時代初頭に相当し、第1次調査地の東方から、今回調査地までを包括するエリア、すなわち生田川左岸の自然堤防沿いの後背地が、奈良時代の遺跡の範囲として推定できよう。今回調査地では、建物の造営に伴う地業痕が確認されているが、整地層以南では奈良時代の遺構は検出されておらず、当該時期の遺跡の南限を考察するうえでは、重要な情報である。



fig.56 SB201 検出状況 (北西から)



fig.57 SB202 検出状況 (北から)

7. 二宮東遺跡 第5次調査

1. はじめに

二宮東遺跡は現在の生田川西方に広がる遺跡で、周辺にはかつて古墳群が存在したことが知られている。平成15年度(2003年度)に第1次調査が実施され、弥生時代後期の大溝2条を確認している。平成17年度(2005年度)の第2次調査では、古墳時代後期の大溝も確認した。平成21年度(2009年度)の第3次調査では、この古墳時代後期の大溝の続きを確認したほか、縄文時代早期の遺物包含層、また縄文時代早期の遺構の可能性も考えられる落ち込み等も確認している。平成23年度(2011年度)の第4次調査では、第3次調査と同じく縄文時代早期の遺物包含層が確認されている。

2. 調査の概要

今回は倉庫建設に伴い発掘調査を実施した結果、古墳時代後期と考えられる大溝を確認した。この大溝を確認した遺構面は第3次調査における縄文時代早期の遺構面に相当するが、今回の調査区では、縄文時代早期の遺構および遺物包含層は確認できなかった。

基本層序

調査地は一部にアスファルトが敷かれており、下面の碎石、攪乱、灰褐色砂質土(旧表土)、褐色砂質土(古墳時代後期遺物包含層)と続き、その下面が黄褐色砂質土遺構面である。遺構面までの深さは、約1.8mを測る。



fig.58 調査地位置図 1:2,500

検出遺構

SD01 幅約 5.5m で、そのうち主体となる深い部分では幅約 4.0m、深さ約 0.8m を測る大溝で、埋土は黒灰褐色砂質土が堆積する。今回の調査では少量の弥生土器と伴に古墳時代前期の遺物が出土しただけだが、当該調査に先立つ試掘調査で大溝埋土である黒灰褐色砂質土から古墳時代後期の須恵器が出土しており、大溝の最終埋没時期は古墳時代後期と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の大溝を確認した。第2次調査、第3次調査でも古墳時代後期の大溝を確認しており、当該調査で確認した大溝もほぼ延長線上に位置するため、同一の古墳時代後期の大溝である可能性が高い。ただし、古墳時代後期では大溝以外に明確な同時期の遺構は確認しておらず、古墳時代後期の集落の存在は現在のところ不明である。

また、縄文時代早期の遺物包含層等については、既往の調査で確認しているが部分的に存在している様であり、今回の調査区では縄文時代早期の遺物包含層や遺構は確認できなかった。



fig.59 SD01 完掘状況 (東から)

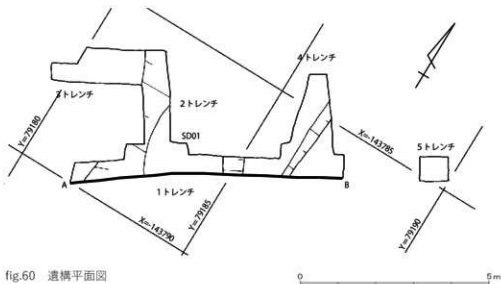


fig.60 遺構平面図

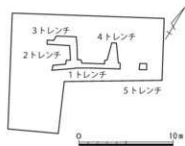


fig.61 調査区配置図

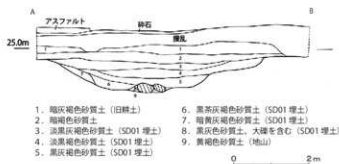


fig.62 土層断面図

1. 暗灰褐色砂質土 (日耕土)
2. 暗褐色砂質土
3. 淡黒灰褐色砂質土 (SD01 埋土)
4. 淡黒褐色砂質土 (SD01 埋土)
5. 黒灰褐色砂質土 (SD01 埋土)
6. 濃茶灰褐色砂質土 (SD01 埋土)
7. 暗黄灰褐色砂質土 (SD01 埋土)
8. 黄灰褐色砂質土、大礫を含む (SD01 埋土)
9. 黄褐色砂質土 (地山)

8. 祇園遺跡 第22次調査

1. はじめに

神戸市兵庫区に所在する祇園遺跡は、古くは弥生時代より集落形成の認められる遺跡である。しかし平安時代末に平清盛が福原山荘（奥平野付近）を営み、後に京の都に代わる新都造営を構想したことによって、「福原京跡」として広く知られる。京城とされる段丘上およびその周辺は当時福原荘の荘域であり、同荘は応保2年（1162）の検注と押領以来、畿内でも深く平氏勢力が浸透した地のひとつであった。

しかし実際は、「福原（之）京」という語は現存史料中には確認できない。当初清盛が新都を構想したのは福原の南東、和田の地であって、土地の狭隘さゆえに計画が二転三転した挙句、天皇の福原行幸という形で事態を取捨せざるを得なかったという経緯を経て生まれたのが、福

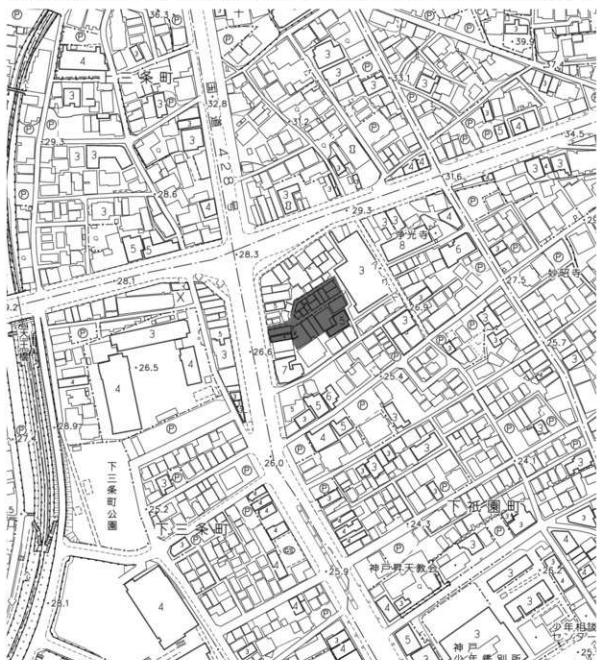


fig.63 調査地位位置図 1:2,500

原行宮である。にもかかわらずこんにち「福原遷都」の強烈なイメージが流布しているのは、『平家物語』や『方丈記』によって形作られたフィクションの要素が多分に影響した結果であろう。

和田に予定された新都は、平安京同様正統的な都城構造をとるものであった。ところが六甲山南麓に平安京と同規模の条坊を再現しうる土地はなく、九条兼実は途中から平城京型のフレキシブルな地割への変更や京城の縮小などを検討するも、いずれも計画のまま頓挫する。その混乱のさ中の治承4年(1180)6月、安徳天皇の福原への「都遷り」が清盛の号令のもと敢行されたが、これにも兼実はあくまで「行幸」として対応し、首都移転とする態度はとらなかった。その後更なる紆余曲折を経て、最終的に同年8月高倉院が行宮を離宮と改め、平安京を首都、福原を副都とする妥協案を提示したことにより、ようやく福原の政治的な位置づけは確定したのであった。

つまり福原「京」の沿革とは、天皇の御座所の所在地を半ば既成事実的に首都化する試みであった。高倉院の政治決断によりようやく都城としての整備は前に進み始め、このころから一定の都市計画に基づき施道や宅地造成の本格着手されたことが『玉葉』、『山塊記』、『吉記』などには記録されている。それら古記録によれば実際に着工されたのは「内裏」・「御所南大路」・「東大路」・「東造路」といった施設であるが、現在これらの正確な位置はわかっていない。有馬街道から天王谷川を包括する平野地区一帯に、「雪御所」「三条町」といった都の存在を示唆する地名を残すばかりである。

平野交差点を挟んで今回調査地の北に向かい合う祇園遺跡第5次発掘調査地点では、大量の京都系土師器の廃棄跡を伴う庭園遺構が発見され、安徳天皇里内裏や後白河法皇三条邸といった説が出されているが、未だ評価は定まっていない。一方新造された内裏については、2003年に祇園遺跡南方に位置する楠・荒田町遺跡で検出された濠遺構をその一部と考える説もあり、これによって福原「京」が、祇園遺跡のみならず、複数の遺跡にまたがるのが鮮明になった。

安徳帝の新造内裏移御から12日のちの11月23日、天皇・院・法皇一行は福原を放棄して平安京へと遷御した。都城としての福原の整備に費やされた期間はわずか百余日。この遷御に随行した清盛は再び福原の地を踏むことなく、平安京において殞死する。

2. 調査の概要

調査区の設定 今回の調査は、集合住宅建設に伴うもので、工事影響範囲に対して行った。工程の便宜上、調査範囲を3分割して(1~3区)順次調査を実施したが、いずれの調査区でも、第1遺構面として福原「京」の時代に該当する12世紀末の遺構面を、その下位で第2遺構面として弥生時代IV期の面を確認している。

基本層序

1~3区すべての調査区で、基本層序はほぼ同様の状況を示した。ただしその堆積状況は極めて複雑である。

第1遺構面

現地表面から約1.0m~1.2m程度掘り下げた地点で第1遺構面を検出している。第1遺構面基盤層と現地表面をなす盛土の間に

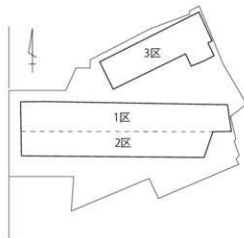


fig.64 調査区配置図

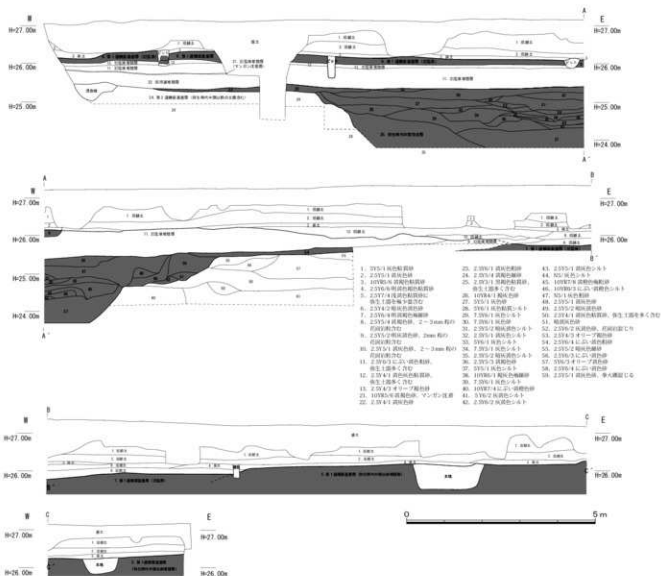


fig.65 1区北壁土層断面図

は、2～3層程度の旧耕作土が認められるが、その時期は近現代から中世後期までと幅広い。特に第1遺構面直上位には、中世後期の耕作にともなうと考えられる床土様の黄色系粘土が調査区全域にわたって約5cmの厚さではほぼ水平堆積しており、第1遺構面基盤層の上部が、中世後期の耕作によって削平されていることを示すと考えられる。ただし削平の程度は不明である。

第1遺構面の検出高は、1・2区で標高26.0～26.3m前後、3区で26.8m程度である。両者の標高差は六甲南麓の南に下がる傾斜地上に位置することに起因するもので、地表面からの深さは、ほぼ同程度である。

1・2区では、第1遺構面の標高は西に向かって高くなる。これは調査区の東半と西半で基盤となる層が異なることに起因する。調査区東半では、六甲山南麓に特有のバイラン土が第1遺構面の基盤をなす。この層は地山ではなく、ごく微量の弥生土器片を含んでいる。

一方調査区西半では、このバイラン土層は氾濫水由来の砂層によって覆われる。広義の氾濫原であり、この氾濫原上にバイラン土層上と同時期の遺構が連続し、遺構面をなす。

氾濫水由来の砂層は西ほど厚く、東に向かって取返し、調査区中央を超えたあたりで消失す

る。すなわちこの砂層をもたらした氾濫水は西から押し寄せたもので、出水元となった河川の左岸に氾濫に伴い自然堤防が形成されたため、西側の標高が高くなったと推測される。現在も調査地西方には天王谷川が南流しており、第1遺構面基盤層堆積時の出水元も天王谷川と推測されるが、氾濫当時の流路位置は今回の調査地より西としか分からない。あるいは現在の国道428号線（有馬街道）がそれにあたる可能性はある。

氾濫水由来の砂層には、弥生時代Ⅲ期、古墳時代後期、飛鳥時代、平安時代前期頃と、様々な時代の遺物が含まれており、周辺遺跡の層を碎屑物として巻き込みつつ堆積したと思われる、その最新相が氾濫の時期を示す可能性が高い。従来の祇園遺跡の理解が、弥生時代中期と平安時代末の二時期に集約されてきたことに比して、出土遺物の時期がかなり広範にわたる点は、今後の調査において留意すべきである。

3区の東西で1・2区は遺構面の高さに差がないのは、単純に調査区の位置が東寄りだからに過ぎない。3区においては、氾濫水由来の砂層が消失する地点付近より以東が調査対象にあたるため、西に厚くなる砂層堆積の東端のみを確認し、以西の状況は不明として調査を終えている。

以上のように、本調査地においては東側では風性のバイラン層を、西側ではバイラン層を覆う氾濫水由来の砂層が形成する氾濫原を第1遺構面基盤として、西にやや高まる地形上に遺構形成されたものである。後述するが第1遺構面の遺構の主体的時期は12世紀末であり、福原「京」の造営時期とほぼ一致する。つまり平氏政権がこの地で大規模な都市計画を実施していた当時の当該地は、氾濫水による浮遊砂が堆積して形成された自然堤防帯の後背湿地、または軟弱地帯であった。本調査区を超えて以東に風性バイラン土の堅牢な地盤が広がっていたことは、調査地東半の遺構面基盤層および東隣する第14次調査によって明らかである。この地耐力の差は結果的に遺構分布の違いとなって現れるのだが、その点については別途詳述する。

第2遺構面

第2遺構面の遺構は、弥生時代Ⅳ期を主体とする。上述の氾濫原が広がる範囲では、氾濫原堆積層を取り除いた標高25.4m付近が第2遺構面となり、氾濫原以東では、第1遺構面と同一面上で弥生時代の遺構を検出している。つまり本調査地では、東半が14次調査の検出面と連続する1面2時期（平安時代末と弥生時代中期）、西半は層が分岐して2面2時期という構成をとる。

2面構成の範囲のうち、1・2区西端では氾濫水由来の砂層直下において東半の遺構面基盤層と同質のバイラン土層が、調査区中央においては氾濫の出水元となった河川とは異なる（より古相の）旧河道のプランが検出された。この旧河道埋土からは、第1遺構面基盤層となった氾濫水由来の砂層のように多彩な時期の土器は出土せず、弥生時代Ⅳ期の土器のみが出土する。

旧河道内には弥生時代Ⅳ期の遺物包含層が肩から底に向かって急傾斜で流れ込み、河川活動の時期を示している。バイラン土層は旧河道の両岸をなし、弥生時代の遺構はこの岸上に形成されたものである。あるいはこの河道も天王谷川の旧流の可能性はあるが、詳細は不明である。旧河道の深さは1.5mを超えるが、工事影響深度の関係で川底まで確認せず調査を終えている。バイラン土層以下層

今回調査地の東側で第1遺構面基盤層をなし、14次調査地の遺構面とも連続する風性バイラン土層については、前述の通り弥生時代の土器片をごくわずかに含む。この層の上面で検出される弥生時代の遺構はⅣ期であるから、層自体の堆積はそれ以前である。断ち割りトレンチ

を設定してパイラン土層以下の堆積について確認を行ったが、パイラン土層の下には再び水流性の砂層の堆積が連続しており、当該地が度重なる河川氾濫と、その合間の間欠的な六甲連山の風化層との互層によって形成された土壌であることが判明したのみである。パイラン土層以下の水流性堆積層は、トレンチ調査の限りにおいては無遺物であった。

検出遺構

第1遺構面では12世紀末を主体とする遺構群を、第2遺構面では弥生時代IV期を主体とする遺構および旧河道を検出している。以下詳細を各説する。

第1遺構面（12世紀末 一部中世後期と近世を含む）

当該遺構面では、掘立柱建物の可能性があるビット列2か所（SB101、102）、土師皿埋納坑8基、土師皿廃棄ビット1基、溝3条のほか、建物を構成しない不規則配置のビット群などを検出した。このうち12世紀末の福原「京」関連遺構と確定できるのは、土師皿廃棄土坑および溝SD102である。ビット群に関しては、弥生時代中期から近世までのものが混在している。

溝SD102は、埋土の状況から人為的な遺構でなく、自然浸食痕に周辺遺物が流入した可能性がある。SB101、SB102については、行論の便宜上「SB」と番号したが、建物遺構と確定するにいたらなかった。この2か所のビットのまとまりについては、12世紀末の土器片に、中世後期～近世の土器片が伴出する柱穴も含まれており、時期確定が困難である。

掘立柱建物の可能性がある遺構

SB101 1・2区西端で検出したビット5基である。規則的な配列を示すのは南北3間分の柱筋1列と、それに直行する1基で、周辺に呼応する列がない。ただし調査区より西にビット列が続く可能性はある。また、上述の通り遺構面基盤層の上部は中世後期段階の耕作に伴う削平がみられる。これによって柱穴が欠損し、このような検出状況になった可能性も考えられる。



fig.67 1区第1遺構面全景（東から）



fig.68 2区第1遺構面全景（東から）

このピットのまともまりについて建物の可能性を肯定する要素としては、ピットの断面観察で柱痕が認められるものや、ピット底に礎板石が認められるものが存在すること、規則配列を示す柱列から想定される軸方向は方眼北から東に 52° 程度振れ、既往調査において福原京関連遺構として報告される建物の造営軸と一致する点が挙げられる。

他方否定的な要素としては、南北3間の柱間の寸法は2.4m程度と妥当だが、東西の柱間寸法が5mあり、不適当な点が挙げられる。現状では梁・桁方向を把握できるだけの数が揃わず、建物以外に柵等の可能性を検討する必要がある。ただし柵であったとしても、付随する建築遺構を伴わないことは不自然である。



fig.69 3区第1遺構面全景(西から)

なおSB101を構成するピットには12世紀末の土師器片を出土するものもあるが、近世の土器片を出土するものもある。いずれも小片のため、新相の土器が混入なのか建物の時期を示すものであるのか判定できない。ただしピットの一部は第1遺構面より上位の層から切り込んでいるため、積極的に平安時代の遺構とは認めず、あくまで時期不明とする。

各ピットの直径は40～45cm程度、深さは15cm～60cmと個体差が大きい。

SB102 3区で検出したピット8基である。東西に2間分、南北に1間分以上の柱列で調査区より北に続く可能性があるが、南東隅柱穴を欠いている。梁・桁方向は不明。SB101同様便宜上SBとしたが、建物でない可能性がある。

肯定的要素は、軸方向が方眼北から東に 52° 程度振れる軸方向である点である。

否定的要素は、いずれのピットも浅く、断面で柱痕も確認できない事と、柱間寸法に一貫性がないことである。ただしピット深さについては、遺構面上部の削平に起因する可能性がある。

南北の柱間寸法は1.5mの通りと2.0mの通りの2種類あり、東西では2.2mと2.5mの通りがある。これらのピットには土師器片を出土するものがあるが、小片のため正確な時期判定が不能である。各ピットの直径は40cm程度、深さは10cm～20cm程度。

土師皿埋納土坑

当該遺構面では、土師皿を集中的に埋納した土坑が複数確認されている。1・2区で検出したSX101、SK103、SK104、SK105、SK106、SK108と3区で検出したSK107がそれである。そのほか1・2区のSP142も遺構規模は小さいが、土師皿の濃密な埋納状況から見て、上記土坑群と同質の属性を持つと考えられる。本報告ではこれらを一括して土師皿埋納土坑と総称する。

土師皿埋納状況の図化記録については、残存状態の良い5基を提示する。SK103、SK106については多量の土師皿片を出土したもののすべて破砕しており、原位置を保つ土器がほとんど存在しなかったため、割愛した。以下に各土師皿埋納土坑の法量を列記する。

SX101 1・2区の北東で検出した。確認できたのは一部で、調査地外北側に続いており、全体像は不明である。確認できた範囲では方形様を呈し、東西辺は約1.92mである。南北辺は

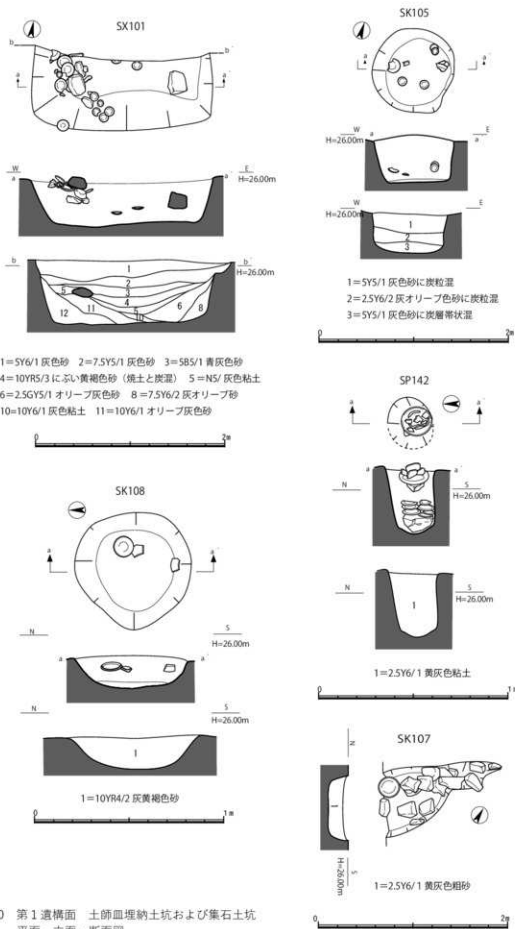


fig.70 第1遺構面 土師器埋納土坑および集石土坑
 平面・立面・断面図

不明。深さ68cm程度。埋土には焼土や炭層が認められる。土器は埋土中層付近から遺構肩に集中しており、そのごく一部が原位置を保った状態で出土した。原位置を保つ土器はすべて口縁を上に向けた正位置である。土師皿と共伴して漆椀が1点、南西角あたりにやはり正位置で置かれていた。

SK103 1・2区西端で検出した南北にやや長い楕円形の平面形である。長径約1.4m、深さ約20cm、多量の土師皿が出土しているが、土圧等による粉砕が著しく、原位置を保つ土器はほとんどなかった。

SK104 1・2区西端、SK103の西に並んで検出した。不整形形の平面形である。直径約1.3m、深さ約25cm、多量の土師皿を出土しているが、原位置を保つ土器はごくわずかである。

SK105 SK103の東に並んで検出した。不整形形の平面形である。直径90cm、深さ50cm、多量の土師皿を出土しているが、原位置を保つ土器はごくわずかである。埋土には炭粒が多量に含まれていた。

SK106 1・2区南端で検出した。不整形形の平面形である。直径90cm、深さ10cm、多量の土師皿を出土しているが、原位置を保つ土器はほとんどなかった。

SK107 3区西端で検出した。調査区外西側に続いており、全体像は不明である。検出した範囲では不整形の平面形を呈する。拳大の礫を集積した遺構で、土器よりも石の出土量が多い点が他の土坑と異なる。埋土から一定量の土師皿が出土しているが、原位置を保つものは杯一点のみである。検出した範囲で南北長1.3m、東西幅70cm、深さは12cm程度である。他の土師皿埋納土坑と異なり、粗砂を主体とした埋土である。

SK108 1・2区北側で検出した。円形の平面形である。直径62cm、深さ17cm、多量の土師皿を出土しているが、原位置を保つ土器はごく一部である。

SP142 SK108の西側に検出した。直径28cm、深さ35cmのピット内に土師皿と杯を正位置で複数枚重ねて埋納した遺構である。

これらの土坑に埋納されるのは、ほぼすべて土師皿だが、まれに東播系須恵器碗または鉢、瓦器碗、輸入陶磁器などの破片を伴う場合がある。これら客体的な土器類については、いずれも微量かつ細片であり、大半が土圧と経年劣化により破損しているとはいえ、埋納の段階では明らかに完形品と思われ、かつ大量に埋められた状況を示す土師皿とは異なる経緯を経て、同一遺構内に包含されたものと判断できる。同一遺構内での土師皿とそれ以外の土器の出土状況・量・質の差異は、これらの土坑群形成の主眼があくまで土師皿の埋納にあることを示している。土師皿埋納土坑から出土する土師皿は平安京分類（小森案）における皿Nを主体として、一定量の杯N、皿A cと、平安京分類にはない回転系切技法の轆轤成型タイプを共伴することが通例である。いずれの土坑にも共通する特徴であり、この組み合わせが当該時期の六甲南麓地域で出土する土師皿のセット関係をなし、そこに在地性が看取できる。

また個々の土坑間を比較した場合、これらの土師皿はおおよそ同じ期別の範疇にあり、土坑同士が同質のセット関係を維持しながら同時期に形成されたことを示している。土師皿埋納土坑から出土する土師皿の各型式は、おおむね以下のような形態である。

皿Nは、手づくね成形の京都系土師皿で、口縁径10cm未満である。口縁端部が外反し、体部外面は二段凹みナデの段階。

皿A cは、手づくね成形の京都系土師皿で、口縁端部が立ち上がり、端面が内傾して断面三角形を呈する、いわゆる「コースター型」である。内傾の傾斜は鋭角で底部は不調整。口縁径

は10cm未満である。

杯Nは口縁径が12～15cm程度のもの。口縁端部が直立からやや内径気味に立ち上がり、体部外面は二段または一段凹みナデのものと、外反する口縁端部のものがある。直立する口縁形態のものは、外反口縁のものとは明瞭な形態的差異があるので、本来は峻別すべきものである。鋤柄分類でいう皿A 2。

回転系切痕をもつロクロ成形の土師皿は、皿Nより小口径である。播磨から瀬戸内地方にかけての地域に生産地系列を求めることができる。

これらの型式の土師皿胎土には、褐色系、橙色系、明橙色系などの色調が認められるが白色系は存在しない。形態と胎土色調相互の間に規則性はなく、同じ型式でも色調を異にする場合がある。砂粒についても型式間で目視で確認できるほどの差異はなく、また京都系、非京都系の間にも目視で確認できる胎土の差はない。当該調査区で出土した土師皿については、京都系土師皿についても在地産の可能性はある。いわゆる「うつし」の土器である。

主体となる皿Nが二段凹みナデの段階で、かつ組み合わせの中に「て」の字状口縁形態の土師皿は認められず、すでに消失した段階であることから、平安京VII期（旧VI期）がこれら土坑群の形成時期と判断される。

このように出土時の属性に共通性を示しながら、一方で土師皿埋納土坑の遺構形態は方形、円形、ビット様と、多種多様で一貫性がない。その理由は不明だが、大きささまざまな規模で原理を同じくする埋納行為の行われたことは確かである。

SD102 溝状の遺構のうち、明瞭な時期の判明しているものはSD102のみである。検出した範囲では長さ2.2m、幅60cm、深さ9cm程度だが、調査区外南側に続いており、全体像は不明である。強い二次焼成痕をもつ平瓦片数点とともに土師皿、輸入白磁輪花碗片などが出土している。平瓦はおそらく東播磨の12～13世紀のもの、白磁碗は、あるいは南宋系のものである。土師皿は上記土坑群と同型式の範疇にある。SD102は遺物の出土が顕著であったため遺構として検出・記録したが、埋土は他の遺構には見られない極粗砂を基調とし、浸食痕等自然地形の可能性はある。

第2遺構面（弥生時代IV期）

当該遺構面では、円形竪穴建物1棟（SB201）、溝2のほか、旧河道1条、建物配列をなさない不規則な配置のビット等を検出した。すべて弥生時代IV期の遺構である。旧河道左岸については、第1遺構面基盤層上面がそれに該当し、右岸は氾濫水由来の堆積層を掘り下げて検出したが、掘り下げ作業の段階では、第1遺構面上の弥生遺構については調査既済のため、新しく検出作業の必要範囲まで調査区規模を縮小して実施している。1・2区東半の第1遺構面上において、明確に弥生時代の遺構と判別できたのはSP101のみである。その他の遺構は、平安時代と確定したものまたは、出土遺物が細片のため、時代判定が不可能なものである。

その他、旧河道右岸では、土坑状の落ち込みを3か所確認しているが、これについては、上位の氾濫原の堆積過程で形成された浸食痕（自然地形）と判断している。いずれも断面が漏斗形を呈し、内部には極細砂層と極粗砂層、5mm程度の礫層が互層をなして堆積し、氾濫原堆積層と同じ幅広い時期の土器片を出土するという共通点がある。氾濫水の急流によって、水面に対し鉛直方向の小規模な渦が発生した際、氾濫水が覆う地面上にこのような漏斗状の浸食痕が形成される。

SB201 1・2区の旧河道左岸肩付近で検出した、円形の竪穴建物である。直径4.8m程度、

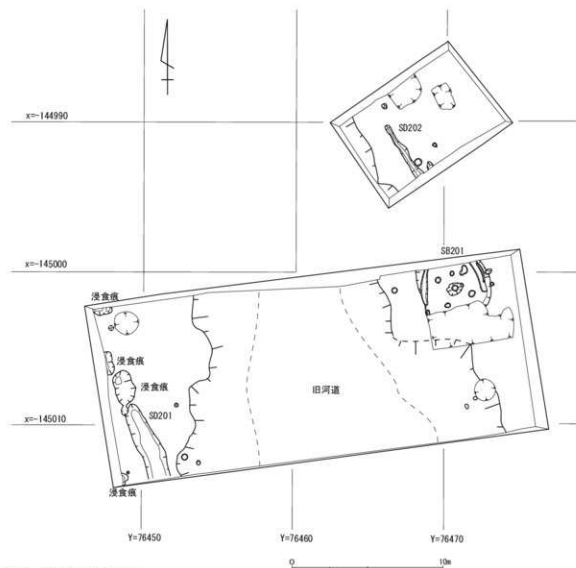


fig.71 第2遺構面平面図

壁高14cm程度、周壁溝を有し、溝の深さは約2cm、幅約40cmを測る。床面中央に楕円形の炉および、支柱穴と判断される柱穴4基のほか、ピット1基を確認している。炉の規模は長径約90cm、短径約80cm、深さ約45cm、埋土に炭層を含む。

SB201から出土する弥生IV様式の土器については、凹線文の盛行する段階だが、高杯脚内面にヘラケズリが認められず、IV様式の古相段階の可能性はある。ただし旧河道出土のIV様式には、ヘラケズリを施したのも混在しており、当該遺構面のIV期遺構全体をおしなべた場合、その時期は必ずしも古相に限定されるものでない可能性が高い。

SD201・SD202 1・2区の旧河道右岸で1条(SD201)と3区の旧河道左岸で1条(SD202)検出した。いずれの溝も、埋土からわずかに弥生IV様式の土器を出土する。検出した範囲での規模はSD201が幅約1.5m、深さ約40cm、SD202が幅約50m、深さ約5cmである。どちらも調査区外南側に続き、全体像は不明である。SD202については、1・2区においてその続きは確認されていない。

旧河道 幅約14mの自然河川である。左右岸から弥生時代IV期の包含層が河底に向かって堆積しており、この時期が河川活動の最盛期と判断される。旧河道については、作業時の安全確保の観点から全体掘削を実施せず、トレンチによる断ち割り調査で規模等および堆積層の状況

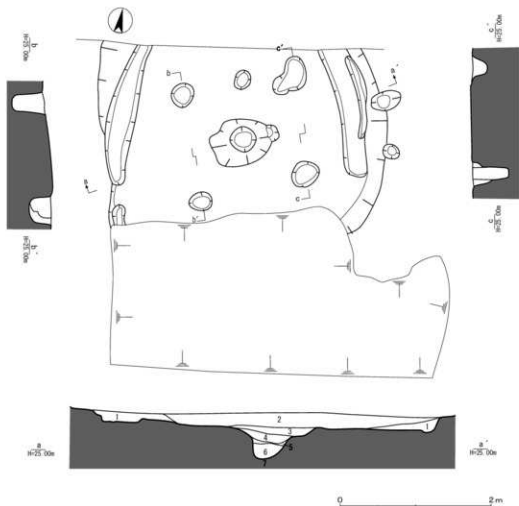


fig.72 SB201 平・断面図

を確認するにとどめた。岸の標高から深さ 1.5 m まで確認した地点で工事影響深度に達したため、川底は確認せず調査を終了した。

3. まとめ

以上のように、今回の調査では 2 時期の遺構を確認した。上位の遺構は 12 世紀末、下位の遺構は弥生時代 IV 期を主体とする。弥生時代の遺構に関しては、東隣する第 14 次調査区の調査結果とほぼ整合しており、当該調査区も弥生中期の集落の範囲内であることが判明した。

平安時代末期の遺構については、周辺を良好な福原「京」関連の屋敷地遺構で囲まれた土地でありながら、今回そういった遺構は一切認められなかった。第 1 遺構面でも 12 世紀末と確定できる遺構は、土師皿埋納土坑 8 基のみである。その他不規則配置のピットの中にも当該時期の遺構は存在すると思われるが、遺物が小片のため確定には至らなかった。

第 1 遺構面基盤層は中世後期の耕作に伴う削平を受けているものの、その削平の程度は、貴族邸宅のごとき大規模な柱穴が完全に消失するほどの深さでないことは、土坑群の残存状態からみて明らかである。したがって、当該地は福原京造営当時から、宅地開発の対象外であったと考えるのが妥当であろう。

その理由は定かでないが、ひとつの要因として、前節でのべたような、天王谷川の自然堤防の後背湿地またはそれに準ずる軟弱地帯帯であることが指摘できる。条坊内に河川が存在する



fig.73 2区第2遺構面SD201 検出状況(南から)



fig.74 1区SB201 検出状況(南から)



fig.75 3区第2遺構面全景(東から)

こと、またはその河川の氾濫によって京城の地形に経年変化が生じる例は平安京においても認められ、平安京ほどの完成度を誇る都城であっても、日本においては自然地形を完全に改変する羅城ではなく、むしろ自然の所為にある程度左右されつつ、それと共存する一種開放的な方向に発展した歴史がある。ましてや福原の場合、「京」前史にあたる平氏別業時代は当然、自然地形に極端に逆らう邸宅配置はとらないであろうし、わずかに百余日の京城造営期間に広域かつ一律的な土木活動の行われなかったことも、当時の古記録類が記すとおりである。福原「京」の都城としての整備は、おそらく拠点的でスポット単位の造営にとどまった。

これまで福原研究の関心は和田之京の位置比定と一体となりながら、もっぱら京城の確定に注がれてきた。古くは喜田貞吉、竹内理三、近年では足利健亮、山田邦和などが計画範囲の復元を試みているほか、山田や高橋昌明は具体的な邸宅の位置にまで焦点を絞り、京城内の景観復元を目指した。これら先行研究をおしなべてみると、山田の案を除けばいずれの説も、前提としてそれなりに完成された都城形態を想定している点に特徴がある。しかしながら、冒頭に述べた沿革をたどれば明らかのように、福原の地は京造営に邁進した期間よりも、その前史としての平氏別業時代、さらに言えば政権崩壊後の没官領化から一条家伝領後の荘園時代、福原京後史のほうがはるかに長い。その土地の持つ長い歴史の、一過性の高いある部分だけを切りとるのではなく、遺跡全体を通史的に捉える視角が要求される。

祇園遺跡における福原「京」関連遺構は今のところ点的な発見にとどまり、面的な景観復元にいたるだけの考古学的データは得られていないが、今回の調査結果は、内裏や主だった貴族邸宅、大路等の造営が、地盤良好な土地（水はけのよい微高地）を選地しながら進められた可能性を示し、天皇・院の里内裏または一級貴族の宅地周辺であっても、直近に微低地や湿地帯

を中心とした空隙地の存在したことが類推できる。それはすなわち、平氏別業時代の福原の名残を留める土地であろう。また 12 世紀末の遺構面を削りながら形成された耕作地の痕跡は、あるいは一条家領荘園の時代に更新された地形のはずである。

このような空隙地に、土師皿埋納土坑が集中して形成されている点は極めて興味深い。過去に第 5 次調査または第 14 次調査等の貴族邸宅跡で確認された土師皿集中遺構は園池、井戸といった既存の施設内部に一括投棄されたもので、今回のような完結した小規模な土坑への埋納とは形成過程を異にする。両者の遺構形成には、該期の社会における土師皿の清浄性、非日常性、または儀礼的性格への認識が通底的に影響しているものの、12 世紀末段階の土師皿大量埋納行為は、同一遺跡内においてもその形態が一様でないことを示唆している。過度な意味論の検討は即物に徹する考古学的方法論に適さないためここでは退けるが、こういった遺構の形態差は、すなわち最終的に土師皿の埋納によって完結する共同飲食行為または饗宴、広義の祭祀行為の規模・性質の差に起因するとみる判断自体は有効であろう。饗宴儀礼とは社会における身分秩序の再認識の効果を持つとする指摘が妥当であるとすれば、その差異の背景に埋納を実施した集団の差異を見ることもまた可能かもしれない。この問題の解決には、さらなる事例の増加を待つ必要がある。

神戸市域における 10 世紀から 12 世紀にかけての遺跡で、土師皿の集中埋納が報告される例は、今のところ祇園遺跡において顕著である。仮にその出現時期が 12 世紀末の福原「京」関連遺構に限定されるのであれば、京都的な儀礼と投棄の習俗の当該地方への導入がその時期を端緒とすると考えることもできる。また当該地方では祇園遺跡という「都城」跡においてはじめて採用されたことにも、従来指摘されているような意味が確かにあろう。特定の集団、この場合は平氏という中央社会に属する武家またはそれと密接に関連する院王家・貴族層を中心として六甲南麓地域にもちこまれ、なおかつ今回のような例を見れば、都城内のさらに広範な貴族社会において再生産された習俗と位置付け得る。この習俗はやがて、14、5 世紀の兵庫津遺跡において爆発的な盛行を見るのだが、この段階ではすでに、貴族・武家といった一部特権階級の枠や京都モデルという制約を超え、庶民空間としての町場（都市部）における普遍的かつ大衆化したものへと変化している。そこでの埋納行為に支配階級的な身分秩序の再構築という意識は薄く、土師皿が持つ清浄性・非日常性の表現という本来的な目的へと、儀礼は再び純化される。

9. 楠・荒田町遺跡 第62次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は六甲山南麓中段丘裾に立地する複合遺跡で、縄文時代中期から室町時代までと長期にわたり存続した。遺跡の最盛期は弥生時代と平安時代末期の二時期に分かれるが、殊に後者については、平清盛が福原山荘（奥平野付近）を営み、後に京の都に代わる新都福原京造営を構想した地として広く知られる。京城と推定される段丘上およびその周辺は、当時福原荘の荘域であり、同荘は応保2年（1162）の検注と押領以来、畿内で最も深く平氏勢力が浸透した地のひとつであった。

一方弥生時代に関しては、前期段階に段丘南辺部に集中していた遺構が次第に北進し、中期前半には段丘北東部、中期後半には段丘北西部まで集落が大規模化する事が既済発掘調査によって判明しているが、今回の調査では弥生時代の遺構は確認できず、平安期頃および弥生土器と須恵器を含む遺物包含層がそれぞれ1層ずつ認められた。

2. 調査の概要

今回の調査は、民間事業者による集合住宅建設に伴うもので、工事影響範囲に対して行われた。工程の便宜上、調査範囲を4分割して（1～4区）順次調査を実施し、1区および4区では、現地表面から約1.2～1.3m程度掘り下げた地点で2層の明瞭な遺物包含層と、楠・荒田町遺跡で遺構面基盤層として通有に見られるパイラン土由来の地山層を確認した。

2区では、1および4区より低い標高で、近世～近代頃の耕作地を確認した。この調査区は、

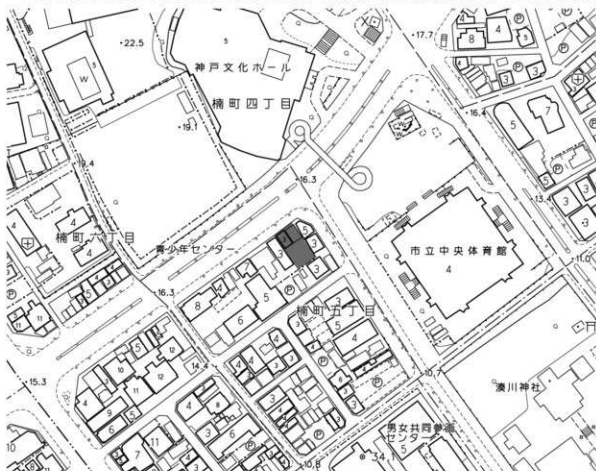


fig.76 調査地位置図 1:2,500

本来の地形を削りこんだ棚田状の耕作地跡地で、包含層および遺構基盤層はすでに削平されていた。耕作面までの深さは、現地表面から2.5m前後である。

3区については、2区の調査実施時点で同様の地形と予測されたため、全面調査ではなく、1.5m×7.5mのトレンチによって工事影響深度内の堆積層を確認し、調査を終えている。調査の結果、同区の堆積状況、地形、土地利用履歴、および地山面までの深度は2区に準ずることを確認した。

基本層序

1および4区について詳述する。

今回の調査地点は六甲南麓に位置し、南に下がる傾斜地形を呈する。現地表面から遺物包含層までの間には、従前の建物解体に伴う盛土と2～3層程度の旧耕作土の堆積が認められる。旧耕作土直下に遺物包含層2層（第1包含層および第2包含層とする）が堆積し、さらにその直下で、パイラン土由来の暗褐色系の地山（地山初層）、すなわち既済の調査において遺構面基盤層とされる面に至る。

1および4区では、現地表面の標高16.1m（道路面高さ）に対し、第1包含層上面の標高が15.0m前後、第2包含層の上面が14.9m前後、パイラン土地山上面の標高は14.7m前後で確認されている。なお2区で確認された耕作土層上面の標高は13.7m前後で、本来1・4区から続く緩やかな傾斜面であった土地を、近世ないし近代段階に棚田状の段地形に削り変更したものである。当該区では耕作土以上層はすべて現代から近代の層で、1・4区で認められた遺物包含層および地山初層は残存していない。

1及び4区における遺物包含層の時期と地山面の遺構密度

上述の通り、調査地北半では2層の遺物包含層を確認している。うち上位の第1包含層は平安時代を中心とした時期の土器が出土し、下位の第2包含層では弥生土器と須恵器が混在する。

これら2層の上面および直下の地山層上面で顕著な遺構は確認されず、地山上面で後世の耕作に伴う可能性の高い小径のビット3基のみを検出した。ビット内から遺物は出土していない。ビットの直径は全て15cm前後、深さ20cm程度。断面尖底形を呈し、杭痕の可能性がある。

3. まとめ

本節では遺跡本来の地形が維持されていた1および4区を中心に、調査で得られた知見を述べる。まず今回調査で確認された2層の遺物包含層については、遺物が細片のため、詳細な時期決定が困難である。ただし平安時代を主体とする第1包含層については、調査地点の北西に、指呼の距離で福原京関連遺構の確認された第46次調査地点（現在の神戸大学医学部基礎学舎周辺）が位置し、これと連続する層である可能性が高い。

第46次調査では幅4m、深さ2m近い大規模な堀が検出され、屋敷地に伴うと考えられているが、これは近年京都市で発掘された六波羅探題関連遺構の堀とほぼ同等の規模であり、福原京内における中心施設の一つとする判断が妥当である。山田邦和による福原京復元案（山田2005）では、第46次調査地点を内裏とし、今回調査地の直近西隣に藤原忠親邸を想定している。この復元案に拠った場合、今回調査地も条坊内と考え得るのだが、調査の結果は必ずしもその推定を支持していない。

今回調査地点は、京城の開発が及ばなかった土地と考えられる。ただし条坊内の空隙地であるのか、開発区域の東端を示すのかは、遺跡全体を俯瞰的に検証する必要がある。今後の課題となる。東限であれば、京の具体的な範囲の一端を捉えたのであり、空隙地であれば、平氏政

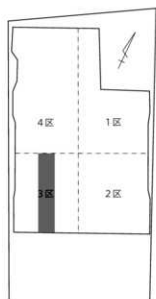


fig.77 調査区配置図

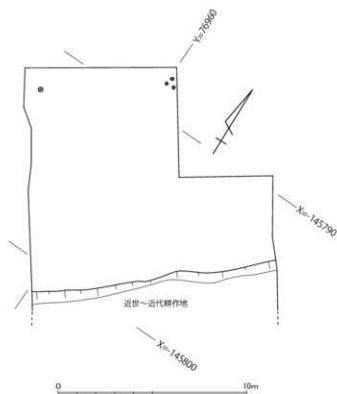
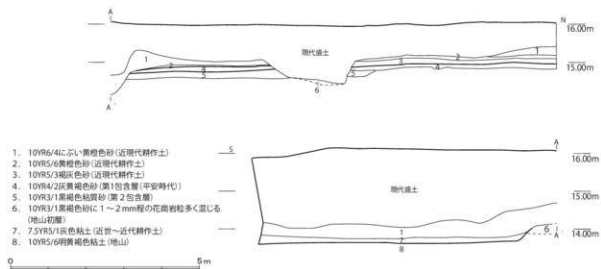


fig.78 1・4区遺構面平面図



1. 10YR6/4にぶい黄褐色砂(近現代耕作土)
2. 10YR5/6黄褐色砂(近現代耕作土)
3. 10YR5/3暗灰色砂(近現代耕作土)
4. 10YR4/2黄褐色砂(第1包含層(平安時代))
5. 10YR3/1黄褐色粘質砂(第2包含層)
6. 10YR3/1黄褐色砂に1～2mm程の花崗岩粒多く混じる(地山初層)
7. 7.5YR5/1灰色粘土(近世～近代耕作土)
8. 10YR5/6黄褐色粘土(地山)

fig.79 1・2区西壁土層断面図

権による遷都事業の完成度の高低を測る一例となろう。

福原遷都の沿革は混迷と錯綜を極めており、計画的かつ一律的とは言い難いものであった。それはとりもなおさず、治天の君ならざる身で内裏造営に踏み込んだ平氏政権の政治構想力の限界が可視化した現象であり、院権力という既存の価値観を振り切った世界に幕府を打ち立てた源氏政権との、端的な相違であった。このような観点に立ててみれば、今回の調査成果は、福原京ひいては平氏終焉の発端地としての楠・荒田町遺跡を歴史上に位置づける作業における重要な情報を含むものとして、高く評価できる。

【参考文献】 山田邦和 2005 『福原京』の都市構造『古代文化』第57巻第4号 財団法人古代学協会



fig.80 1区全景（南から）



fig.81 4区全景（南から）

10. 楠・荒田町遺跡 第63次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧淡川によって形成された扇状地と中位段丘上に立地する遺跡である。これまでに、62次の発掘調査が行われ、縄文時代～中世の複合遺跡であることが判明している。今回の調査は個人住宅建設工事に伴うもので、試掘調査の結果、遺物包含層および遺構面が確認されたため、工事影響範囲について発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

調査区は柱状改良工事が集中して施工される部分において試掘坑状に2ヶ所設定し、北東側から1・2区と設定した。

基本層序

層序は上層より、盛土・攪乱、旧耕土、暗褐色中砂質土、にぶい黄褐色粘性砂質土（上面が第1遺構面）、褐色粘質土、黒褐色粘質土（上面が第2遺構面）、暗オリーブ褐色粘質土の順に堆積する。

第1遺構面

にぶい黄褐色粘性砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高はGL - 1.0 m前後を測る。遺構面上から室町時代の土師器と須恵器が出土した。

SD101 2区中央部で検出した北東-南西方向にのびる溝である。幅は0.2～0.3 m、深さは0.2 mを測る。遺構埋土中より室町時代中期（15世紀前半）の土師器が出土した。

SX101 遺構面検出時に検出できなかったが、2区北東側壁土層断面で確認した遺構のため形状・規模は不明である。断面での幅は1.2 m、深さは0.4 mを測る。褐色粘質土上面から掘



fig.82 調査地位置図 1:2,500

削して形成された遺構でSD101に切られる。

第2遺構面

黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高はGL-1.5m前後を測る。遺構面上から平安時代後期（11世紀後半）の土師器と須恵器が出土した。

SX201 1区北西側で検出した不明遺構である。大部分が調査区外にかかるため全容と性格は不明であるが、深さは0.1m程度を測る。

3. まとめ

今回の調査では、中世の2面の遺構面および遺構とそれらに伴う遺物を得た。本調査地点より南西側20mの地点に位置する第48～50次調査でも、平安時代後期（11世紀後半）の遺構が検出されており、現地表からの深度をみても、本調査での第2遺構面と同一の遺構面と考えられる。しかし、第1遺構面およびSD101、SX101に関連する遺構面、遺構については不明である。

今回の調査では、第48～50次調査の調査成果とあわせて、楠・荒田町遺跡の中世における活動範囲を考えることのできる調査成果を得た。

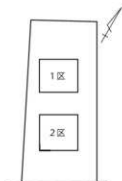


fig.83 調査区配置図

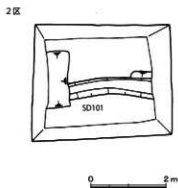
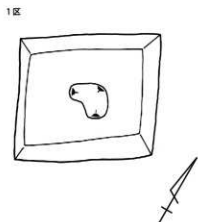


fig.84 第1遺構面平面図

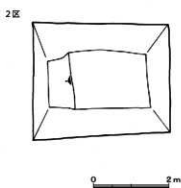
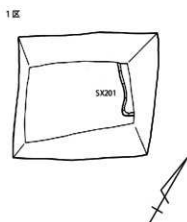
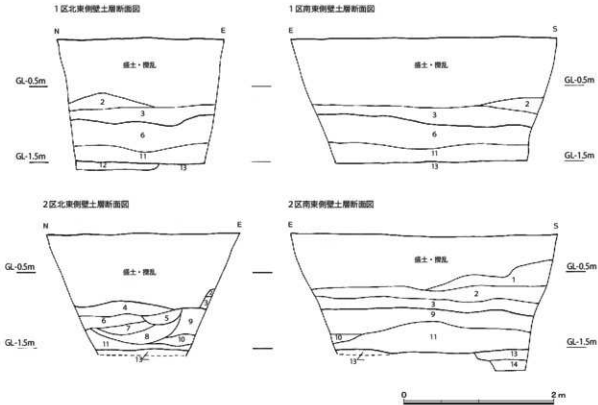
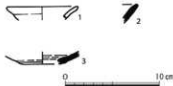


fig.85 第2遺構面平面図



1. 2.5YR4/1 黄褐色砂質土 (旧耕土)
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (旧耕土)
3. 10YR3/3 暗褐色中砂質土 (第1遺構面遺物包含層)
4. 10YR3/1 黄褐色シルト質土、中砂混じり
5. 10YR3/1 暗褐色粘性砂質土、バイラン土微量に混じる (SD101 埋土)
6. 10YR5/3 に近い黄褐色粘性砂質土、バイラン土少量混じる (第1遺構面基盤層、第2遺構面遺物包含層)
7. 7.5YR2/3 黒褐色シルト質土、バイラン土微量に混じる (SX101 埋土)
8. 7.5YR2/3 暗褐色シルト質土、バイラン土微量に混じる (SX101 埋土)
9. 10YR4/3 に近い黄褐色粘性砂質土、バイラン土少量混じる (第1遺構面基盤層、第2遺構面遺物包含層)
10. 10YR2/2 黄褐色粘性砂質土、粗砂少量混じる
11. 7.5YR4/3 暗褐色粘質土、バイラン土微量に混じる (第2遺構面遺物包含層)
12. 10YR4/3 に近い黄褐色中砂質土 (SX201 埋土)
13. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土、粗砂・バイラン土少量混じる (第2遺構面基盤層)
14. 2.5Y2/3 暗オリブ褐色粘質土、中～粗砂まじり、バイラン土少量まじり

fig.86 調査区土層断面図



1. 土師器面
- 2・3. 須恵器面
1. SD101
- 2・3. 第2遺構面上

fig.87 調査区内出土遺物



fig.88 1区東半 第1遺構面全景 (南東から)



fig.89 1区東半 第2遺構面全景 (南東から)

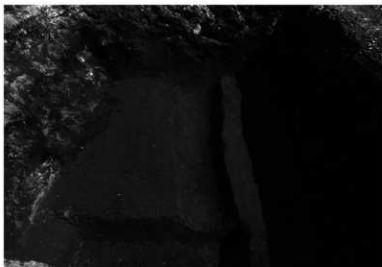


fig.90 2区 SD01 (南西から)



fig.91 2区西半第2遺構面全景 (北西から)

11. 兵庫津遺跡 第78次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、古代から近世にかけての複合遺跡である。奈良時代の大輪田泊に始まり、平安時代末には平清盛の改修によって日宋貿易の拠点として繁栄した。鎌倉時代後期には、「兵庫」と呼ばれ、瀬戸内海運の主要港として栄え、室町時代前期には明との通商の窓口として整備され、『教言御記』（1328～1410）には、将軍足利義満の兵庫下向についてたびたび記されている。戦国時代には、兵員や軍需物資の輸送などの面で戦国大名達から着目されるようになり、有力な豪商が生まれた。戦国時代末には織田信長家臣の池田恒興によって兵庫城が築かれた。江戸期には港湾機能の他に、西国街道の宿場町として発展し、宝永8年（1711）には人口2万人を擁する国内有数の都市となった。慶応3年（1867）には国内の他の重要港と共に兵庫（神戸）開港が行われ、慶応4年には、兵庫勤番所の建物に初代兵庫県庁が置かれた。

遺跡は、神戸市中央部の海岸に形成された砂嘴である和岬の東側に位置し、標高は0.5～3.9mで、北西が高く、南東が低い勾配となっている。遺跡の範囲は、北が佐比江町付近から南が和神神社までの約2km、東が海浜部から西が兵庫駅南側付近の約1kmの間にひろがる。

今回の調査地周辺では、室町時代～江戸時代を中心とした時期の遺構面が検出されている。室町時代～安土・桃山時代は、第4、49、51次調査で半地下式構造の建物や堀状遺構、礎石建物、掘立柱建物などが検出されており、堂宇をはじめとした建物が存在していたとみられている。江戸時代前期は、第49、51、54次調査で礎石建物や道路状遺構、柵列、井戸などが検出されており、兵庫津の街路整備がこの地域にまで及んでいたことがうかがえる。江戸時代中期は、第4、36、47～49、51、54、58次調査で町屋遺構や鍛冶関連遺物、礎石建物、石垣などが検出されている。とくに第33次調査では、寺院関連の遺構もみつかっており、街路の整備とともに町屋や寺院の造営も広範囲にひろがっていく段階にあたりと考えられる。江戸時代後期以降には、街路の整備がほぼ完了し、現在の町割りとは大差のない構成となる。このような周辺の様相から当調査地周辺には、室町時代から江戸時代の遺構・遺物が存在するものと考えられる。



fig.92 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は会社事務所兼倉庫建設に伴うもので、計画されている基礎梁の敷設される部分に合わせて掘削範囲を設定した。調査地の現標高は2.0 m前後である。

基本層序

発掘調査以前の当地には、共同住宅が建てていたため、既存建物の基礎によって遺構面の大半が攪乱を受けていた。層序は、現地表面から標高0.9～1.0 mまでが盛土・埋め戻し土等を含む土層で、これを取り除くと江戸時代中期～幕末を中心とする時期の遺構面が部分的に残存していた。各区で検出した遺構面の対応関係から、当調査地には、計4面の遺構面があったと考えられる。江戸時代の基礎層は、標高0.5～0.8 mで検出した灰色粗砂である (fig.94)。

各調査区からは、ピット (SP)、土坑 (SK)、井戸 (SE)、溝 (SD)、性格不明遺構 (SX) を検出した。調査の便宜上、C・E区などのように区域が隣接する部分で検出した遺構面があるため、その場合は、遺構面を検出した区名を併記する。検出した遺構面の土層は、fig.94に示したとおりである。以下、各区で検出した主な遺構の概要を記述する。

【A区】

第1遺構面

標高1.0～1.2 mで検出した炭混じりこげ茶灰色粗砂混じり中砂である。各遺構は切り合い関係にあることから、同一の遺構面でも時期差がある。SP101は、45cm×65cmの楕円形で、深さ45cm。SK101・SP103・SE101よりも新しい。陶磁器、土師器が出土している。SK101は、直径50cmの円形で、深さ30cm。SP102・103よりも新しい。陶磁器、燈明皿、すり鉢などが出土している。SE101は、直径135cmの円形で、深さ85cm。SP102・103よりも新しい。埋土中からは、雁振瓦や巴紋軒丸瓦などをはじめ、陶磁器、瓦器椀などの食器類も出土している。

第2遺構面

標高0.7～0.8 mで検出した炭混じり灰茶褐色粗砂である。SP201・202は、直径30～40cmの円形で、いずれも深さ20cm。SP201からは、陶磁器や土師器が出土している。SK201は、直径110cmの円形で、深さ30cm。陶磁器や土師器、燈明皿、土人形(神仏)が出土している。

【B区】

第1遺構面

標高0.9～1.0 mで検出した灰色粘質土である。SD101は、幅30cmで、深さ10cm。陶磁器、土師器、瓦が出土している。

【C・E区】

第1遺構面

E区から標高0.9～1.0 mで検出した茶褐色粗砂である。SP101は、直径20cmの円形で、深さ10cm。

第2遺構面

C・E区から標高0.8～0.9 mで検出した灰色粘質粗砂である。SP201は、30cm×40cm

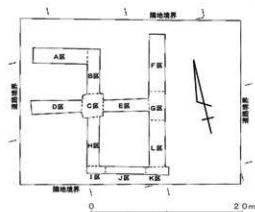


fig.93 調査区配置図

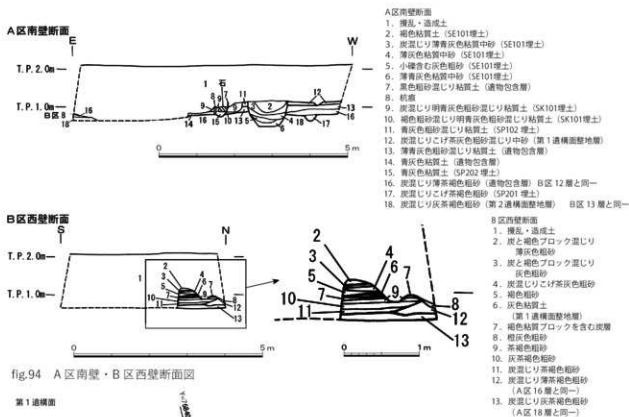


fig.94 A区南壁・B区西壁断面図

第1遺構面

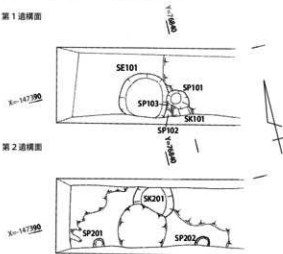


fig.95 A区遺構平面図

第2遺構面

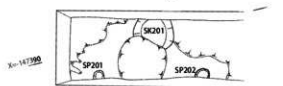


fig.95 A区遺構平面図

第1遺構面

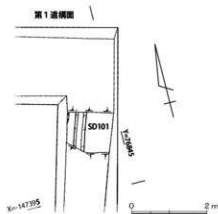


fig.96 B区遺構平面図



fig.97 A区第2遺構面北西から

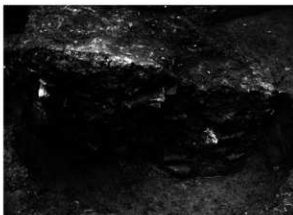


fig.98 A区SE101断面(北から)

の楕円形で、深さ20cm。陶磁器、燈明皿が出土している。SK201は、直径110cmの円形で、深さ20cm。焙烙、平瓦、焼土塊が出土している。SK202は、南北幅90cmの方形状を呈する。深さ10cm。

第3遺構面

C区から標高0.6～0.7mで検出した礫混じり暗灰こげ茶色中砂である。SK301は、最大幅2.0m以上の不整形な平面形を呈する遺構で、深さ20cm。すり鉢、耳皿、軒丸瓦や軒平瓦が出土している。SK302は、最大幅80cmの方形状になるとみられる遺構で、深さ30cm。SK303よりも古い。陶磁器、土師器、伏間瓦、硯などが出土している。

【D区】

第1遺構面

標高1.0～1.1mで検出した暗灰色粗砂である。SP101は、直径20cmの円形で、深さ20cm。陶磁器、土師器、平瓦が出土している。SK101は、最大幅80cm以上の方形状になる遺構で、二段掘りされている。深さ40cm。SX101よりも新しい。陶磁器、土師器、瓦、玩具、結晶片岩などが出土している。SX101は、最大幅80cmで、深さ10cm。町屋の整地層にあたる可能性がある。

第2遺構面

標高0.9mで検出した暗青灰色粘質土である。SK201は、直径70～80cmの円形で、深さ10cm。SX201は、最大幅1.6m以上の不整形な平面形を呈する遺構で、深さ10cm。陶磁器、土師器、瓦、円柱型土鍾が出土している。

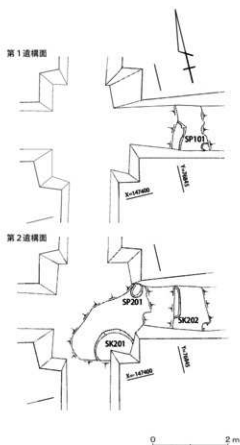


fig.99 C・E区第1・第2遺構平面図

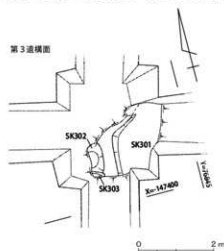
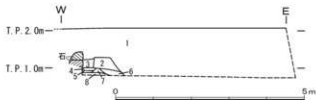


fig.100 C・E区第3遺構平面図



1. 擾乱・造成土
2. 黄褐色粘質土（塚状の盛土）
3. こげ茶灰色中砂（裏込め土か）
4. 黄褐色混じり灰青色粗砂（遺構埋土か・未掘部分にひろがる）
5. 暗灰色粗砂（遺構埋土か・未掘部分にひろがる）
6. 暗青灰色粗砂（遺構埋土か・削平受ける）
7. 茶褐色粗砂（第1遺構面整地層）
8. 灰色粘質粗砂（第2遺構面整地層）

fig.101 E区北壁断面図



fig.102 B区第1遺構面検出状況(東から)



fig.103 C区第2遺構面完掘状況(西から)

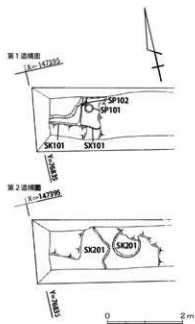


fig.105 D区第1・第2遺構平面図



fig.104 C区SK201断面(西から)

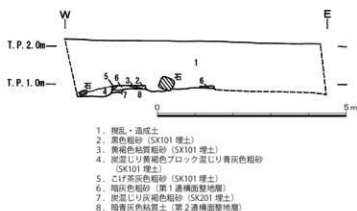


fig.106 D区北壁断面図

1. 攪乱・造成土
2. 灰色粗砂 (SK101 埋土)
3. 黄褐色粘質粗砂 (SK101 埋土)
4. 炭混じり黄褐色ブロック混じり青灰色粗砂 (SK101 埋土)
5. こげ茶灰色粗砂 (SK101 埋土)
6. 暗灰色粗砂 (第1遺構面埋土)
7. 炭混じり灰褐色粗砂 (SK201 埋土)
8. 暗青灰色粘質土 (第2遺構面埋土)

【F区】

工事影響深度まで攪乱を受け、遺構面が残存していなかった。

【G区】

第1遺構面

標高0.8～0.9mで検出した黄褐色混じり青灰色粘質中砂である。SP101は、直径30cm以上の円形になるとみられる遺構で、深さ10cm。SP102は、直径20cmの円形で、深さ10cm。SX101は、カマド状を呈する遺構で、黄褐色と赤橙色の粘土で方形に外廓を形成し、



fig.107 D区第1遺構面完掘状況（西から）



fig.108 D区第2遺構面検出状況（西から）

その外郭内に黄褐色粘土で正方形に整形した浅い掘り込みが施されている。この掘り込み内からは、拳大ほどの礫と江戸時代の瓦が出土している。外郭の粘土内からは、陶磁器、土師器、伏間瓦や軒丸瓦などが出土している。

第2遺構面

標高0.8mで検出した暗青灰色粘質中砂である。SK201は、直径60cmの円形で、深さ10cm。SE201は、90cm×1.0m以上の楕円形になるもので、深さ40cm。井戸の上部は削平を受けている。

第3遺構面

標高0.4～0.5mで検出した暗こげ茶灰色粗砂である。SP301は、30cm×40cmの楕円形で、深さ20cm。SK301よりも新しい。掘り底には、一辺15cm、厚さ3cmの方形礎板が敷かれていた。陶磁器、土師器、不明土製品などが出土している。SP302・303は、直径40～50cmの円形で、いずれも深さ30cm。双方の遺構から陶磁器、土師器が出土している。SK301は、1.0m×1.0m以上の不整形な平面形を呈する遺構で、深さ20cm。陶磁器、土師器、不明土製品などが出土している。

【H・I区】

第1遺構面

標高0.7～0.9mで検出した黄褐色混じり灰色粗砂である。SP101～103は、直径20～30cmの円形で、いずれも柱痕が残存していた。SP101・102は深さ20cm、SP103は深さ80cm。SP101からは、土師皿が裏返された状態で出土した。SP102からは陶磁器、SP103からは土師器がそれぞれ出土している。

【I・J・K区】

第1遺構面

標高1.0～1.1mで検出した灰褐色粗砂である。SP101～103は、直径20～30cmの円形になるものとみられ、深さ10～20cm。SK101は、最大幅40cm以上の方形状になるとみられる遺構で、深さ10cm。SP103よりも古い。

第2遺構面

標高0.9～1.0mで検出した暗灰色粘質土、茶色粘質土などである。SP201は、直径60cmの円形になるものとみられ、深さ20cm。柱痕が残存していた。SP202・203は、直径30～40cmの円形で、深さ10cm。

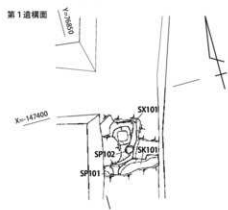


fig.109 G区第1・第2遺構平面図

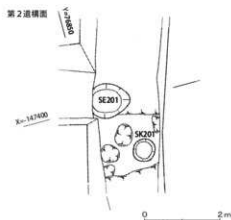


fig.109 G区第1・第2遺構平面図

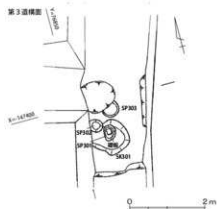


fig.110 G区第3遺構平面図

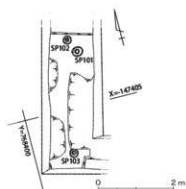


fig.111 H・I区第1遺構平面図



fig.112 G区第1遺構面検出状況(西から)



fig.113 G区第3遺構面完掘状況(東から)

【K・L区】

第1遺構面

標高0.8～1.0mで検出した炭混じり暗灰色シルト、黄褐色混じり青灰色粘質中砂である。SK101～104は、40～50cmの円形、方形、不整形円形があり、いずれも深さ10cm。SK101からは陶磁器、土師器、平瓦など、SK102からは陶磁器、土師器、平瓦、SK103からは陶磁器、土師器、軒丸瓦



fig.114 H区SP101検出状況(南から)

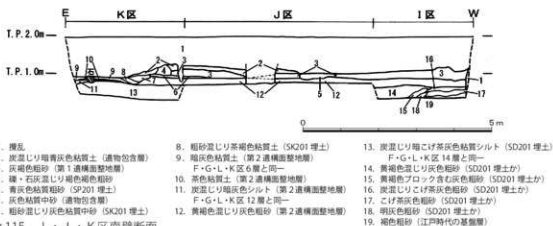


fig.115 I・J・K区南壁断面

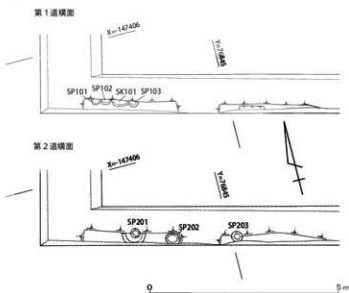


fig.116 I・J・K区 第1・第2遺構面平面図



fig.117 I・J・K区第1遺構面完掘状況 (西から)



fig.118 I・J・K区南壁断面 (北東から)

など、SK104からは備前焼甎がそれぞれ出土している。SP101～105は、幅10～20cmの円形と楕円形があり、いずれも深さ10～20cm。SP101からは平瓦が出土している。SD101は、最小幅30cm、最大幅50cmで、深さ10cm。陶磁器、燈明皿、結晶片岩が出土している。SD102は、幅20cm、深さ10cm。陶磁器、土師器、瓦などが出土している。SD103は、幅1.0m、深さ30cm。陶磁器や土師器などが出土している。

第2遺構面

標高0.5～0.6mで検出した暗青灰色粘質中砂である。SD201は、二段掘りの東西溝で、検出時の幅が2.0m以上、下段側の溝幅が1.3m。深さ30cm。I区で検出した14～18層は、この東西溝の埋土にあたる可能性がある。陶磁器、土師器、備前焼大甕、土人形、五輪塔の水輪、砥石などが出土している。

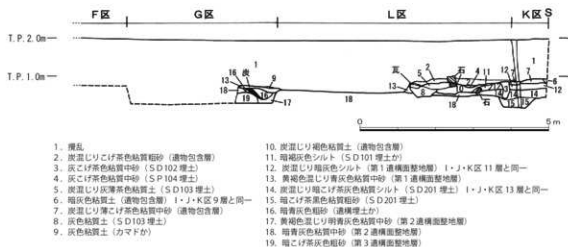


fig.119 F・G・K・L区土層断面

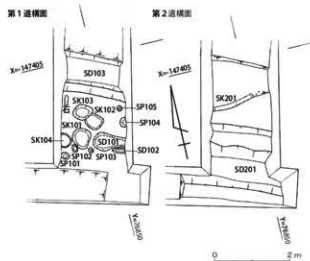


fig.120 K・L区第1・第2遺構面平面図



fig.121 L区SK102(右)・SK103(左)断面(北から)



fig.122 K・L区第1遺構面完掘状況(南から)



fig.123 K・L区第2遺構面完掘状況(南から)

3. まとめ

各区で検出した遺構面の併行関係は、検出した土層の特徴と標高、出土遺物などを検討した結果、表13のようにまとめることができる。このような状況から今回の調査では、4つの遺構面が当調査地にあったと考えられる。4面の遺構面は、江戸時代中期～後期を中心とする時期に比定することができる。当調査地は、能福寺と逆瀬川町の境界に位置する場所にあたりとみられ、その成果は、江戸時代の逆瀬川町域の様相がうかがえるものと考えられる。調査範囲が狭小であったため、部分的な状況しか判明しなかったものの、町屋に関連するとみられるピットや整地層が今回の調査によって得ることができた。

また、K・L区で検出した溝(SD201)は、H・I・J区まで延びるものとみられ、調査地を東西に貫く形で流れている。元禄9年(1696)の摂州八部郡福原庄兵庫津絵図(以下、元禄絵図)や宝暦元年(1751)の摂津国矢田部郡福原庄兵庫地図などの各種絵図・地図を参照すると、今回の調査地は、能福寺と逆瀬川町の境界部分にあたる場所に立地することがわかる。その境界にあたる付近から、このような東西溝を検出したことから、能福寺と逆瀬川町の境に、この東西溝が流れていた可能性が指摘できる。

特記すべき遺物としては、C区の攪乱内から「都」と陽刻された陶器片が出土したものが挙げられる。この陶器は、内外面ともにナデ調整されており、内面の口縁部～頸部に暗灰色の塗料、胴部に朱色が施されている。破片のため器種は不明だが、小型の碗になるものとみられる。「都」が地名を表すのか、屋号を表すのか、今後詳しい調査が必要となるが、江戸時代の兵庫津遺跡で陽刻された陶器片に「都」という文字が残る事例は、管見にして聞かない。当調査地周辺での発掘調査が進展することで、この陽刻陶器が評価できるものとし、欄筆する。

表13 各調査区で検出した遺構面の併行関係

	遺構面①	遺構面②	遺構面③	遺構面④
A区	第1遺構面		第2遺構面	
B区		第1遺構面		
C・E区		第1遺構面	第2遺構面	第3遺構面
D区		第1遺構面	第2遺構面	
F区				
G区	第1遺構面	第2遺構面	第3遺構面	
H・I区			第1遺構面	
I・J・K区	第1遺構面		第2遺構面	
K・L区		第1遺構面		第2遺構面

※ 第1～4遺構面：調査時に各区で検出した遺構面

※ 遺構面①～④：各区で検出した遺構面の併行関係に対応する遺構面

12. 兵庫津遺跡 第79次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡での第79次となる今回の調査地は、『元禄絵図』では西国街道と宮前町を東西に貫く街路がT字に交差する西国街道沿いの西側で、西国街道を挟む両側町である木戸町、木場町の町境付近に位置するものと考えられる。街道沿いに町屋が、また西側には多くの寺院が描かれ、近世初頭以降は西国街道と寺町との間に形成された町屋群の一角となる。

なお、令和2年度に『兵庫津遺跡第79次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴う調査で、埋蔵文化財に影響を及ぼす建物部分の調査を実施した。調査は作業工程の関係から調査範囲を四分割し、西からⅠ区、中央をⅡ-Ⅰ区（北側）、Ⅱ-Ⅱ区（南側）、東端をⅢ区とし、西側の調査区から順に遺構検出、掘削作業、記録作業、埋め戻しを繰り返し行った。

調査地の現標高はおよそ2.2mで、地表面より盛土、攪乱土、灰色細砂の順に堆積し、標高0.0m前後に浜提あるいは海浜の堆積と考えられる灰白色細砂が堆積する。灰色細砂層は中世の遺物包含層で、その上層には部分的に粘質土や焼土、粘土が堆積していた。粘質土からは染付類は全く出土せず、陶器や瓦片のみが出土したことから近世初頭の整地層がわずかに残ったものと想定している。

遺構面は湧水が激しく、水中ポンプを設置して常時排水作業を行いながら遺構検出、掘削を



fig.124 調査地位図 1:2,500

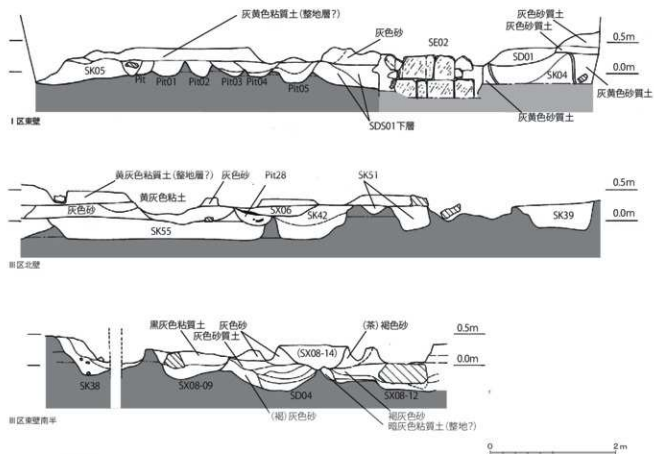


fig.125 土層断面図

行ったが、遺構や出土物はすぐに水没し、とくに遺構の底部の状況は不明なものが多い。土層の堆積状況を確認するための畦も、湧水や降雨による流出で十分な観察と記録が行えなかった箇所も多かった。

調査区内は浜提堆積と考えられる灰白色細砂面では、東から西へや下がり地形を形成する。調査区中央から西半で湧水が多く、南西部に井戸が集中する様子が窺えるが、調査区東側にも井戸が並び、全体的に湧水の多い場所と考えられる。また北側、南側にもそれぞれわずかに下がり地形を形成する様子が窺える。

第1遺構面

灰色細砂面で明確に遺構として認識できたのは、遺物包含層上層で本来形成されていた近世～近代の溝や井戸、土坑などの比較的掘削深度の大きかった遺構の下部と考えられる。ほかに柱穴や土坑を検出したが、明確なプランの判別は難しく、下層の第2遺構面でも同じ位置で同様の遺構を検出することが多く、遺構の平面プランと底部の状況の把握が難しかった。

SD101 調査区の南西部で溝を検出した。幅約2.0m、検出長は約9.0mである。調査区西壁の堆積状況から整地層と考えられる灰黄色粘質土面の遺構の可能性が考えられる。埋土は暗灰

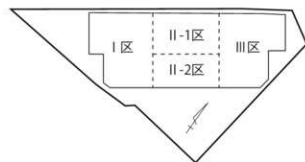


fig.126 調査区配置図

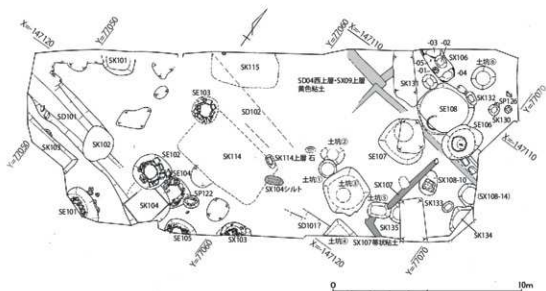


fig.127 第1遺構面平面図



fig.128 II-3区第1遺構面全景(南から)



fig.129 III区第1遺構面全景(西から)

褐色粘質土で陶器片、瓦片が出土した。

SD102 SD101に並行して調査区中央北側で同じく東西方向の溝SD102を検出した。西端のSK115と接する部分は変色して硬化していた。

SE101～105 調査区西半で石積み井戸を5基検出した。掘形はいずれも平面円形で、径1.5～2.0mを測る。SE02は一辺50cmほどの花崗岩の石材の片側を半円形に削り抜き、曲線部を描いて円形の井戸枠とする。井戸枠の内径は約0.7mである。そのほかの井戸は拳大～人頭大の石を積んで井戸枠とし、SE03では石塔の笠石が転用されていた。集水施設などは検出していない。

SK101～104 井戸や水溜めの可能性が高い土坑である。SK101・102は円形の土坑、SK103は調査区外に延びる方形の浅い落ち込みである。SK104では木質の痕跡と考えられる幅1.0cmの細い粘土が方形に巡る。SE102が近代、そのほかは近世の井戸と考えられる。

調査区東半では一辺、または径2.5mほどの南北に並ぶ3基の井戸SE106～108を検出した。湧水のため完掘できなかったが、SE106・108は瓦積み井戸、その他は素掘りの井戸である。素掘りの井戸では集水槽である曲物の輪郭を確認している。

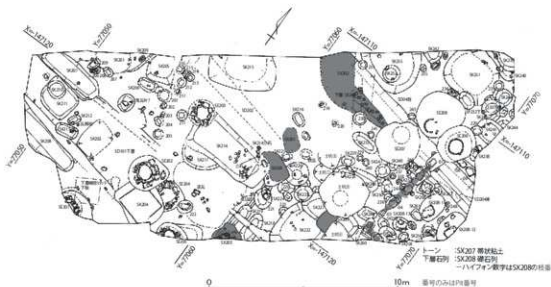


fig.130 第2遺構面平面図



fig.131 II-2区第2遺構面全景(東から)



fig.132 III区第2遺構面全景(南西から)

井戸に近接する土坑①～⑥からは近世～近代の陶器、瓦片とともに細片のコンクリートブロックも出土しており、攪乱と重複するか、近世以降、近現代まで使用された井戸の痕跡と想定している。

SX106 III区北西部で検出したカマドである。幅約1.0m、検出長約2.0mで、調査区外の西側に延びる。検出範囲の両端で火床と考えられる顕著な被熱痕のSX106-03・04を検出した。その間では薄い円形の炭の輪郭SX106-02や陶器皿10枚が重なって出土したピットSX106-01を検出した。火床の下層、カマドの基底部であるSX106-05とした堆積からは備前焼の壺、漆椀、鉄製品が出土した。

調査区北東部でピットを検出したが、灰色



fig.133 III区第2遺構面SX08 礎石建物(西から)

細砂面で掘形が明確なものは少数である。下層、第2遺構面で多くのピットを検出しており、上層で明確に検出できなかったものを多く含むものと推測している。土師器や陶器、瓦の小片が出土した。

第2遺構面

標高0.0m前後の灰白色細砂上面で建物礎石列、土坑、溝、集石遺構、ピットなど多くの遺構を検出した。これらの遺構は調査区の東西両端に集中していた。

調査区西半

南側で土坑、溝、落ち込みを検出し、北側ではピットや土坑、礎石状の石を検出した。

SD201 下層の西端で土坑 SK210～213を検出した。また明確な遺構に伴わないが、灰白色砂面で完形の瓦器椀が出土した。SD101 下層の遺物の出土状況からは浜堤面検出の一部の遺構は12世紀後半から13世紀代のものの可能性がある。

調査区西半を中心に東半の遺構からも中世の瓦が出土しており、付近に瓦を使用した建物の存在を示唆している。

調査区の中央部分は窪地を形成し、地盤が軟弱で湧水も顕著である。土坑状の落ち込みを検出し、土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦質土器、天目碗、唐津焼皿、備前焼壺・播鉢、丹波焼播鉢などが出土した。

調査区東半

建物に伴う帯状粘土と礎石列、土坑、集石遺構、ピット、溝を検出した。

SX207 調査区南東部で黄白色を呈する帯状の粘土堆積を検出した。下位には礎石列 SX208がある。

SX208 長辺40～60cm、短辺30cm、厚さ20cmほどの花崗岩で構成された礎石列である。建物西辺と北辺、南辺の一部を検出し、北西角の礎石はSE06により失われている。本来は南北6間の建物と推測される。建物南北の中軸上に大型の礎石 SX08 が東西に並ぶ。石は長辺80cm、厚さ40cmほどを測る大型のものである。

3. まとめ

今回の調査では遺構面を2面検出した。いずれも標高0.0～0.2mの範囲にあることから湧水が著しく、遺構の検出・掘削は困難であった。遺構は調査区中央で希薄であり、東西両端に集中する様子が確認できた。

検出遺構のほとんどは『元禄絵図』が描かれる以前のものである。『元禄絵図』はこれまでの調査成果から非常に精度の高い絵図であることが知られている。調査地は木戸町と木場町の町境に位置するものと推測され、『元禄絵図』ではこの部分は町境の線が描かれるのみである。残念ながら今回の調査区内には近世初頭の遺構面がほとんど残っておらず、詳細は不明であるが、宮前町の東西街路の延長線上で、同じく東西方向の溝を検出しており、また標石状の立石を検出するなど中世段階から何らかの境界となる要因をもつ可能性が推測される。

盛土下、第1遺構面の一部には整地層と考えられる堆積が認められた。東半では整地の様子が一部確認され、礎石建物やカマドを検出した。カマドを切り込む遺構から錠前や堀止などの金属製品が出土しており、大型の建物に用いられたものと考えられる。検出した礎石建物が倉庫であった可能性を示すものであり、これらは16世紀～17世紀前半頃の遺構と考えられる。

浜堤面である第2遺構面での検出遺構は土坑やピット、集石遺構、溝で15世紀後半を中心とする時期のものである。灰色砂上面でも一部、中世の遺構と考えられるピットや土坑の輪郭

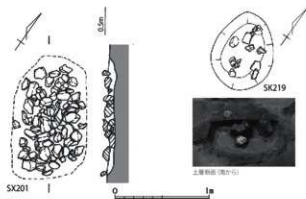


fig.134 SX201・SK209 平・断面図



fig.136 II-2区 SX204 断面と立石検出状況
(南西から)

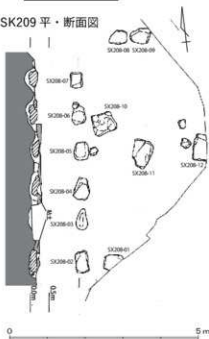


fig.135 SX208 平・断面図



fig.137 SX208 (東から)

が見えたが、明確に形状を把握することが難しかった。

遺物包含層や浜堤面の遺構から出土した遺物は15世紀後半～16世紀にかけてのものである。

第2遺構面の灰白色砂面の浅いくぼみや表層の土壌化した部分からは小片ながら12世紀後半～13世紀の遺物がまとめて出土した。

第2遺構面で検出した礎石列は大型の礎石建物と考えられる。大型建物が検出される調査地は、近世には経済的地盤が強固となる地区に今のところ位置している。今後の検討材料に供する資料が今回の調査でも得られたと考えられる。

13. 兵庫津遺跡 第80次調査

1. はじめに

当調査地周辺では、第33・36次調査が実施されている。第33次調査では、幕末～明治時代の礎石列や壇状遺構、寺領境界の溝、江戸時代後期の墓地、中世末の鍛冶遺構などが検出されている。第36次調査では、幕末～明治時代の寺院建物や墓地、江戸時代後期の鍛冶炉や輸入陶磁器・漆製品・金属製品などを多量に投棄した土坑、中世の柱穴と依積み遺構、そして、平安時代の井戸などが検出されている。このような状況から、当事業地内にも同時期の所産とみられる遺構面がひろがるものと考えられる。

今回の調査は倉庫建設に伴って実施したもので、調査地点は、能福寺の南側に隣接する地点にあたる。

2. 調査の概要

基本層序

現地表面から厚さ45cmの盛土等を除去すると、第1遺構面（黄褐色粘質土）を検出した。以下、第2遺構面（炭層）から第8遺構面（青灰こげ茶色粗砂）まであり、現地表面以下130cmで湧水層にあたる褐色粗砂を検出した。

第1遺構面 土間とみられる黄褐色粘質土を検出した。この粘質土は、性格不明遺構（SX）を埋め立てた後に敷かれていた。

第2遺構面 土間を除去すると、炭層がひろがる遺構面から土坑（SK）4基、ピット（SP）1基を検出した。これらの遺構は、炭層を切りこんでいた。

第3遺構面 第2遺構面で検出した炭層を除去すると、炭がL字形にひろがった遺構を検出した。この遺構内からは、ピット1基を検出している。このピット付近からは、二次的な被熱を受けた土器片が出土している。



fig.138 調査地位置図 1:2,500

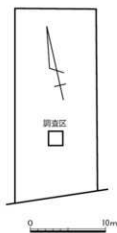


fig.139 調査区配置図



fig.140 土層断面図模式図



fig.141 第6遺構面検出状況(西から)

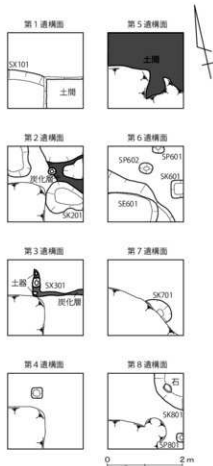


fig.142 遺構平面図

第4遺構面 灰こげ茶色粗砂を整地層とする遺構面からビット1基を検出した。第3遺構面で検出したビットとほぼ同じ位置にあることから、第3遺構面と関連する遺構の可能性はある。

第5遺構面 第4遺構面で検出した整地層を除去すると、黄褐色粘質土の土間を検出した。土間は、調査区全面に認められた。

第6遺構面 茶色粗砂をベースとする土層から井戸(SE)1基、ビット2基、土坑1基を検出した。

第7遺構面 暗こげ茶色粗砂をベースとする土層から土坑1基を検出した。

第8遺構面 青灰こげ茶色粗砂をベースとする土層から土坑1基、ビット1基を検出した。

3. まとめ

今回の調査では、8面の遺構面を検出した。いずれも江戸時代後半以降の遺構面とみられる。当事業地は、能福寺旧境内の南側、真福寺旧境内の西側に位置するが、両寺院の境内には入っていない。『元禄絵図』によれば、当事業地は畑地となっている場所にあたるが、今回の調査成果から当事業地にも江戸時代の遺構面がひろがっていることを確認することができた。当事業地の近隣では、第36次調査が行われており、中世から幕末にかけて、様々な成果が上げられている。今回の成果は、第36次調査の成果と比較すると、江戸時代後半～幕末にかけての調査成果と符合する可能性がある。今後、近隣での調査成果が進展し、絵図に描かれた様相が明らかになっていくだろう。

14. 兵庫津遺跡 第81次調査

1. はじめに

今回の調査地に接した佐比江は湊口惣門付近に位置し、柳原惣門付近に位置する柳原と共に、近世兵庫津では花街として知られている。18世紀後半にこの二カ所に集められたらしく、それまでは兵庫津内に散在していた様である。18世紀末に記された『摂津名所絵圖』には兵庫津の花街として佐比江が紹介され、柳原は記載されていない。佐比江が柳原より知られていたとも考えられる。

幕末までには状況が変わり、柳原は柳原惣門を入り、西柳原町、東柳原町、逆瀬川町、神明町と花街が拡大するのに対し、湊口惣門の佐比江は花街として拡大していない。近代でも柳原は神戸の著名な花街の一つとされ、初代県知事伊藤博文も柳原で豪遊したと記載されるが、佐比江の花街として近代の記載は見つけていない。

柳原は都賀堤の内側であり、比較的標高も高く、地盤の安定した地域である。比較して佐比江は都賀堤の外側で海岸や河川にも近く、近代までは洪水多発地帯でもあった。立地環境による差で盛衰が分かれた可能性も考えられる。同じく今回の調査地に含まれる西出町は佐比江に接し、佐比江と共に都賀堤の外側に位置している。

2. 調査の概要

共同住宅建設に伴い、調査を実施した。調査区は便宜上、北区・中区東・中区西・南区と4区分している。今回の調査では2面の遺構面から、17世紀～19世紀の遺構と遺物を確認した。また、より上層の近代で注目すべきものとして、「北風製」の銘がコバルトで記された白磁瓶が多数出土している。

第1遺構面

標高約1.0m～0.6mを測る、18世紀～19世紀の遺構面である。石垣、溝状遺構、土坑、井戸等を確認した。調査の関係で、石垣埋没後に掘削された遺構(SD101、SD102)と、石垣や石垣下面で検出した遺構を同一の第1遺構面の遺構としている。



fig.143 調査地位図 1:2,500

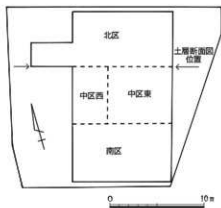


fig.144 調査区配置図



1. 暗灰褐色砂質土 (近代遺構面基盤層)
2. 暗灰褐色砂質土 (やや黄色調を帯び)
3. 暗灰褐色砂質土
4. 暗灰褐色砂質土 (やや灰を含む)
5. 暗黄褐色砂質土 (SD101 埋土)
6. 暗黄褐色砂質土 (SD102 埋土)
7. 淡褐色砂質土 (石垣前面埋土)
8. 暗黄褐色粗砂混じり砂質土 (石垣前面埋土)
9. 黄褐色粗砂 (石垣前面埋土)
10. 暗灰褐色砂質土、黄灰褐色粗砂混じる (石垣前面埋土)
11. 暗灰褐色砂質土、黄灰褐色粗砂やや混じる (石垣前面埋土)
12. 淡灰褐色砂質土 (石垣裏込め土)
13. 灰褐色砂質土 (第1遺構面基盤層)
14. 黄褐色粗砂混じり灰褐色砂質土 (第1遺構面基盤層)
15. 暗褐色砂質土 (灰を含む)
16. 暗褐色砂質土 (第1遺構面基盤層)
17. 淡茶褐色細砂～粗砂 (第2遺構面基盤層)

fig.145 土層断面図

SD101 北区で検出した南北方向にのびる溝状遺構であり、石垣遺構東側を削平している。石垣埋没後に掘削された遺構である。幅約 1.6m、深さ約 85cm を測り、茶褐色砂質土が堆積している。石垣埋没土の上面付近に 19 世紀前後の片口鉢が出土しており、19 世紀頃の遺構の可能性が高い。溝中央に径約 70cm～30cm の転石を配している。調査地は旧湊川に近く、河川の氾濫等により流出した転石を廃棄するための溝である可能性が考えられる。

SD102 SD101 の東側に並行した、南北方向にのびる溝状遺構である。SD101 と同じく石垣埋没後に掘削された遺構であり、19 世紀頃の遺構である可能性が高い。幅約 2.0m、深さ約 40cm を測り、茶褐色砂質土が堆積している。中央に径約 70cm～30cm の巨礫を一列に配置しており、SD 101 と同じく河川の氾濫等による転石を廃棄するための溝の可能性が高い。

SK101 中区東にある土坑である。幅約 2.4m × 長さ 1.9 m、深さ約 30cm を測る。埋土は灰褐色砂質土が堆積している。直径 10cm 程度の礫を多く含む他、18 世紀の肥前磁器や備前焼掘鉢が出土している。

SE101 中区東にある井戸である。掘形の直径約 1.1m で、井戸本体の直径約 0.7m を測る。掘形は灰褐色砂質土が堆積し、井戸枠内は暗灰褐色砂質土が堆積する。18 世紀の遺物が出土している。埋土に石材は認められず、おそらく木枠の井戸であった可能性が考えられる。湧水が激しく、深さ約 30cm で調査を終了している。



fig.146 南区第1遺構面 石列遺構 (東から)



fig.147 北区第1遺構面石垣・SD101 (南から)

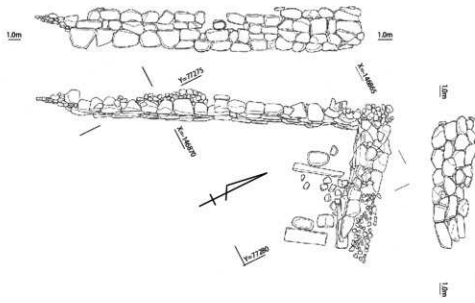


fig.148 第1遺構面石垣遺構平・立面図

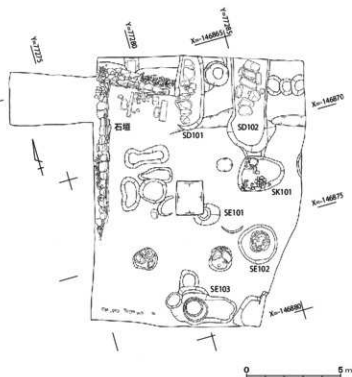
SE102 南区東端にある井戸である。掘形の径約2.1mで、井戸本体の径約0.7mを測る。掘形は灰褐色砂質土が堆積し、井戸枠内の推定部分は暗灰褐色砂質土が堆積している。18世紀の遺物が出土している。井戸枠材は残存しないが、井戸近辺に直径約10cm～15cm程度の自然石が多く残り、石組み井戸であった可能性も考えられる。深さ約45cm以下は、湧水のため調査は不能であった。

SE103 南区南端で確認した井戸である。掘形は灰褐色砂質土が堆積し、井戸枠内の推定部分は暗灰褐色砂質土が堆積している。18世紀の遺物が出土している。

石材は確認できず、木枠であった可能性が高い。掘形の径約1.3mで、井戸枠推定部分の径は0.95mを測る。深さ約70cm以下は、湧水のため調査は不能であった。

石垣 北区から中区に位置する石垣である。北区で東西方向に長さ約4.0mを確認した。東端部はSD101により削平されている。西側ではL字状に屈折し、南北方向は約9.0mの長さで築造されている。ほぼ4段組に積まれ、高さは約1.1mを測る。

石垣前面は第2遺構面を掘り込み、深くなっている。また、径50cm～20cmの多数の石や、30cm×130cm×4cm、35cm×110cm×4cmの板材を底部に埋めている。石垣前面の地盤を補強するための地均しと考えられる。



石垣掘形は暗灰褐色砂質土が堆積 fig.149 第1遺構面平面図



fig.150 北区第1遺構面全景(東から)



fig.151 中区東第1遺構面全景(東から)



fig.152 中区西第1遺構面全景(東から)



fig.153 南区第1遺構面全景(東から)

し、石垣前面は黄褐色砂質土混り灰褐色砂質土により埋没している。石垣掘形埋土と石垣埋土では遺物の時期差はなく、共に18世紀の磁器、陶器が出土している。

調査地一帯は近代まで洪水多発地帯であり、それに対応する石垣の可能性が高い。

第2遺構面

標高約0.3m～-0.15mを測る、17世紀～18世紀の遺構面である。

SK201 中区東で確認した土坑である。幅約2.7m×2.2m、深さ約50cm以上を測る。湧水により底部の確認はできなかった。土坑の中央に直径約80cmの礎石となる巨礫を据え、下部に直径約80cm～50cmの根石を4カ所に配置している。大型構造物の

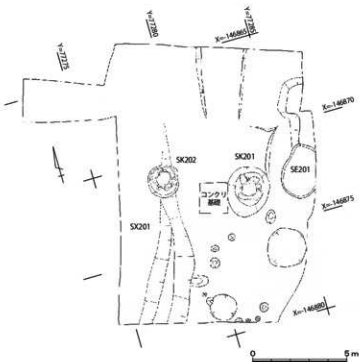


fig.154 第2遺構面平面図

礎石であろう。茶褐色砂質土が堆積し、遺物は17世紀～18世紀前半の肥前陶器、肥前磁器が出土している。

SK202 中区西で検出した土坑である。幅約1.7m×1.6m、深さ約47cm以上を測る。湧水により底部の確認はできなかった。土坑中央に直径約80cmの礎石となる巨礫を据え、下部に直径約50cm～30cmの根石を3カ所に配置している。SK201と同じく、大型建造物の礎石であろう。埋土は茶褐色砂質土が堆積し、遺物は17世紀～18世紀初頭の肥前磁器等が出土している。

SE201 中区東で確認した、井戸の可能性が高い遺構である。灰褐色砂質土が堆積する。掘形径が約2.7m×2.0m、深さ約27cm以上を測る。湧水と崩落が激しく、上層を掘削した段階で調査は終了している。

SX201 北区で検出し、幅約3.9m以上、深さ約0.9mを測る。中区西にも続くが、工事影響深度の関係で地下保存とした。あるいは大溝の可能性も考えられるが、調査区外へ続くため、不明である。埋土は上層に茶褐色砂質土が厚く堆積し、下層に暗褐色砂質土が堆積する。この暗褐色砂質土から17世紀の肥前磁器、肥前陶器、ロクロ土師器皿等が出土している。



fig.155 北区第2遺構面全景（東から）



fig.156 中区東第2遺構面全景（東から）



fig.157 中区西第2遺構面全景（北から）



fig.158 南区第2遺構面全景（東から）

3. まとめ

『元禄絵図』と照合すると今回の調査地は、18世紀頃は佐比江の入り江に近く、西出町の町屋の北端部付近に位置する事が解る。また湊口惣門に近く、近世の兵庫津では佐比江の花街として知られた場所とも近接する。

調査成果としては、2面の遺構面から17世紀～19世紀の遺構と遺物を確認した。第1遺構面では、19世紀の転石の廃棄遺構の可能性が高い配石溝状遺構、18世紀の石垣、井戸等を確認した。第2遺構面では、17世紀～18世紀前半の礎石を据えた土坑や17世紀の落ち込み等を確認している。礎石を据えた土坑（SK 201、SK 202）については、礎石の規模と根石の存在から、大型構造物を支えたものと想定できる。

また、第1・第2遺構面で轆の羽口が多数出土している。遺構は確認されていないが、第1・第2遺構面では焼土面が多々認められ、多量の鉄滓も出土している。詳細は不明だが、焼土面は鍛冶に関連する痕跡とも考えられる。

近世に鍛冶関連の業者は火事の恐れから都賀堤外に配置されたとも言われ、『浪速左界兵庫商家繁栄歳中日用記』にも大錠鍛冶の項は川崎に鍛冶屋が三軒記されている。川崎は西出町の近隣であり、同じく都賀堤外に位置する。

また、第1遺構面と第2遺構面で井戸を多く確認している事からも、当該調査地の周囲は湧水等の多い地域である事がわかる。戦後に造成が行われるまで、頻りに洪水の影響を受けており、決して生活環境の良い地域ではない様である。そのため第1遺構面の18世紀代に、地盤の補強のため、石垣が築造された可能性が高い。また、石垣埋没後に掘削された配石溝状遺構（SD 101、SD 102）は、洪水による転石を廃棄した溝の可能性が高い。

近代の遺構面から「大日本 兵庫港 北風製」とコバルトで記された白磁瓶と白磁栓、および「大日本 摂津灘 嘉納製」と記された白磁瓶が出土している。北風家は近世の兵庫津で、酢、味噌、酒の醸造業と海運業で発展した商家とされている。明治44年（1911）に刊行された『西撰大観』の「兵庫市中諸名家獨案内」には「銘酒白藤 北風丈助」、明治15年（1882）の『豪商神兵湊の魁』には「銘酒売捌所 兵庫 西出町 北風丈助」との記載もある。また、近代の北風本家である鍛冶屋町 北風荘右衛門家の番頭である『喜多文七郎日誌』にも度々北風丈助は記載され、本家の親戚筋であり、酒の醸造をしていると記されている。「大日本 摂津灘 嘉納製」に見る嘉納の姓も、灘の酒造業で菊正宗、白鶴で知られる嘉納家の系列を引くものと考えられる。

また近世の兵庫津では、鍛冶屋町 北風六右衛門がブランド化した北風酢の販売も有名であった。近代でも、前述の文献記録に「す売捌所 兵庫 カジャ町 北風新五郎」との記載もある。

以上、当該調査地が含まれる西出町で北風銘の酒類が販売されている事から、今回の調査で出土した白磁瓶は、西出町で醸造、販売された北風丈助による酒類（銘酒白藤）の容器の可能性が比較的高いと考えられる。ただし、両北風家とも兵庫港を基地とする商家であり、西出町と鍛冶屋町は500mの近距離である。また、本家の北風荘右衛門家等の動向も不明である。そのため、正確な白磁瓶の内容物の特定は困難である。

また、熊本県二本木遺跡で「大日本 兵庫港 北風製」の白磁瓶が確認され、兵庫港から出荷して九州まで流通していた事実が判明している。

北風名は文献資料では多々確認できるが、それ以外では菩提寺である能福寺の墓石が確認できるだけであった。上記の結果から、近世の兵庫津で豪商であった北風荘右衛門家の系列に繋がる人物が製造した、北風製の銘のある白磁瓶と白磁栓が多く出土したことは希少な例と判る。

15. 兵庫津遺跡 第82次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸に形成された砂嘴である和田岬の東側に位置し、古代から近世にかけての複合遺跡である。奈良時代の大輪田泊に始まり、平安時代末には平清盛の改修によって日宋貿易の拠点として繁栄した。鎌倉時代後期には、「兵庫」と呼ばれ、瀬戸内海運の主要港として栄え、室町時代前期には明との通商の窓口として整備された。戦国時代には、兵員や軍需物資の輸送などの面で戦国大名達から着目されるようになり、有力な豪商が生まれた。戦国時代末には織田信長家臣の池田恒興によって兵庫城が築かれた。江戸期には港湾機能の他に、西国街道の宿場町として発展し、宝永8年(1711)には人口2万人を擁する国内有数の都市となった。慶応3年(1867)には国内の他の重要港と共に兵庫(神戸)開港が行われ、慶応4年には、兵庫勤番所の建物に初代兵庫県庁が置かれた。

2. 調査の概要

調査地は、平成22年度に発掘調査を実施した第52次調査地の南西約50mの位置にあり、周辺では、中世の礎石建物や近世の町屋群が検出されている。今回の調査は、共同住宅の建設に伴うもので、建物の基礎等により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。表土の一部を場外処分し、東西に2分割して調査を実施した。

第1遺構面

現代の攪乱は現地地表下0.8～1.9mまで及んでおり、部分的に第3遺構面まで達していた。そのため、攪乱土を除去した段階で、3時期以上の遺構が同一検出面で確認された。検出した遺構は、町屋建物に伴う礎石列や方形の地下施設、井戸等である。18～19世紀代の遺構面と考えられる。



fig.159 調査地位置図 1:2,500

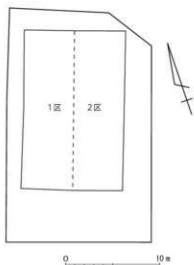


fig.160 調査区配置図

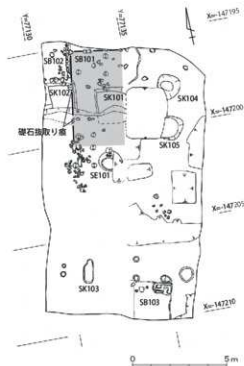


fig.161 第1遺構面平面図

SB101 北半部で検出した礎石建物で、礎石抜き取り痕を含めると、南北3.6 m以上、東西2.9 mの規模で、南北の礎石列の方向は、 $N8^{\circ}E$ である。礎石間の距離は、南北1.8 m、東西1.0 mである。

SB102 調査区北端部で、南北2 m以上、東西1.4 m以上の石列を検出した。南北の石列の方向は、 $N9^{\circ}E$ である。長径20～30cmの円礫を連続して並べ、淡黄灰色粘土で固定している。石列は調査区外に広がるため、規模は不明であるが、町屋建物に伴う石列と考えられる。

SB103 調査区南東部で検出した町屋建物である。焼土と炭を含む埋土の範囲は、東西2.1 m以上、南北2 m以上の方形で、土間部分と考えられる。北壁の方向は、 $E14^{\circ}W$ である。東側及び西側は攪乱により失われ、南側は調査区外に広がる。北東角部で東西2連の半地下式のカマドを検出した。焚口は南側である。カマド上半部は後世に削平されているが、西側燃焼部の上端部分が、焚口側へ転落した状態で残存していた。「元禄絵図」によると、調査区東側に隣接して街路が存在しており、東側に入口を持つ東西の建物と考えられる。

SK101 調査区北半部で検出した方形の遺構で、南北1.3 m以上、東西1.5 m以上、深さ約80cmを測る。北壁と西壁は、ほぼ垂直に掘削されており、板壁を持つ地下倉庫と考えられる。埋土は短期間で埋められており、瓦や陶磁器を含む。

SK102 SB102の南側で検出した方形の遺構で、南北1.4 m以上、東西1.5 m以上、深さ約70cmの規模で、調査区外にさらに広がる。北壁はSB102の南辺の石列と接しており、SB102に先行する遺構と考えられる。北壁と東壁は、SK101と同様に、ほぼ垂直に掘削されており、板壁を持つ地下倉庫と考えられる。

SE101 調査区中央部で検出した井戸で、直径約1.2 m、深さ0.9 m以上の円形の掘形を持つ。掘形内のやや南寄りに、井戸専用の瓦を使用した井戸枠を設けている。1段10枚で4段以上組み上げ、内径は約68cmを測る。瓦の法量は、縦約27.0cm、横約22.8cm、厚さ約4.1cmである。

第2遺構面

標高約1.7mで検出した遺構面で、灰茶色砂と暗灰茶色砂をベースとする整地面である。礎石建物1棟、柱穴数基を検出した。1区北半部では長径20～30cmの自然石が多数出土したが、建物として纏まるものは確認できなかった。17世紀～18世紀前半の遺構面と考えられる。

SB201 2区北端部で、礎石と考えられる板状の石を検出した。石の南側から、幅約10cm、高さ約5cmの淡灰色粘質土の高まりが1.7m南へ伸び、礎石抜取痕と考えられる窪みに接続している。礎石建物に伴う礎石と土壁の痕跡と考えられ、淡灰色粘質土の高まりの方向は、N10°Eである。



fig.162 2区SB105 カマド完掘状況(南から)

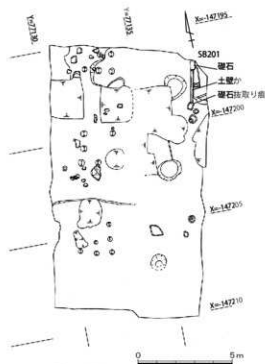


fig.163 第2遺構面平面図



fig.164 1区第1遺構面(北から)



fig.165 2区第1遺構面(北から)



fig.166 1区第2遺構面（北から）



fig.167 2区第2遺構面（北から）

第3遺構面

標高約1.5 mで検出した遺構面で、濁黄灰色粘土と黄色粗砂の互層をベースとする整地面である。部分的に炭化物を含む。磚列建物1棟、石組遺構1基を検出した。17世紀末～18世紀前半の遺構面と考えられる。

SB301 調査区南半部で東西約2.1 m以上、南北約2.9 m以上の磚列建物を検出した。南北の磚列の方向は、N7°Eである。西側は調査区外に拡がり、南側は攪乱されているため、全体の規模は不明である。塼は、幅約25cmの溝状の掘形の内側（建物側）に接するように上下2段以上並べ、黄褐色粘質土を充填して固定している。東側磚列の1段目に使用されている塼22と塼24は、それぞれ別個体の塼を上下に組み合わせて使用しており、上部の塼が本来の位置からずれており、上辺が8cmほど沈下している。2段目の塼は、後世の攪乱により上方1/3～1/2が失われているが、塼の平均法量は、長辺または短辺が完存する資料から、長辺27.6cm、短辺21.4cm、厚さ2.0cmである。磚列建物1付近の上層の遺構面及び包含層から、炭化米が多量に出土しており、蔵等の貯蔵用の建物であった可能性がある。

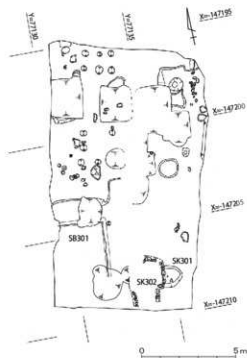


fig.168 第3遺構面平面図



fig.169 1区第3遺構面(北から)



fig.170 2区第3遺構面(北から)



fig.171 SB301 平・立面図



fig.172 埧列建物1(北東から)

SK302 2区南西部で検出した石組遺構で、内法は、南端部で東西約0.9m、南北2.4m以上、深さ33cm以上の規模である。北西側の壁が後世の攪乱により失われているため、全体の形状は不明であるが、東側壁の北半部が東へ約35cm拡張している。北半部の石組は長径15～25cmの石を使用し、南半部の石組は五輪塔の水輪を転用した直径28cmの石以外は、長径10～20cmの石を積み上げている。類例から地下倉庫と考えられる。



fig.173 2区第3遺構面石組遺構1(西から)

第4遺構面

標高約 1.4 m で検出した遺構面で、調査区のほぼ全面で焼土塊と炭層を含む整地層を検出した。溝 1 条、石積遺構 1 基、瓦敷遺構 1 基、土坑等を検出した。16 世紀代の遺構面と考えられる。瓦敷遺構 調査区南半部で検出した遺構で、平瓦 6 枚、丸瓦 1 枚、埴 1 枚で構成されている。黄白色粘土の上に、東西 3 枚×南北 2 枚の平瓦を隙間なく敷き並べ、丸瓦は平瓦 5 と平瓦 7 の南側に、埴は平瓦 2 の西側に 1 枚を南側に置かれている。いずれも凸面が上方である。凸面に摩耗痕がない事と直上層の観察から、黄白色粘土で被覆された状態で使用されたと考えられる。

用途については不明であるが、被覆粘土の上面が被熱により赤変している事と、瓦と埴の下部以外では焼土や炭が検出されている事から、カマド等の火所の床面の施設であった可能性がある。また、地面の沈下を防ぐために、荷重がかかる建物の入口付近に設けられた遺構の可能性も考えられる。

SK401 調査区南半部で検出した直径約 1.3 m、深さ約 30cm の円形の土坑である。遺物の出土は無く、用途は不明である。

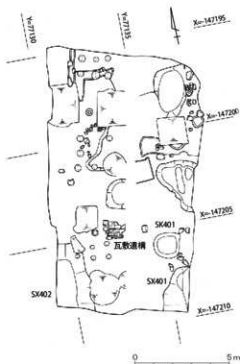


fig.174 第4遺構面平面図



fig.175 1区第4遺構面（北から）



fig.176 2区第4遺構面（北から）

SX401 調査区南半部で検出した不定形の遺構で、南北2.4 m以上、東西1.3 m以上、深さ1.2 m以上の規模である。遺構内は黄灰色粗砂が厚く堆積しており、整地の際に埋められたと考えられる。遺物の出土は無く、詳細は不明である。

SX402 調査区南半部で検出した不定形の遺構で、南北3.6 m以上、東西2.0 m以上、深さ0.3 m以上の規模である。遺構内は黄白色粗砂が堆積しており、SX401 同様、整地の際に埋められたと考えられる。遺物の出土は無く、詳細は不明である

第5遺構面

標高約1.3 mで検出した遺構面で、焼土塊と炭層を含む整地層を検出した。礎石建物1棟、石組遺構1基、磚列遺構1基、石組井戸1基、被熱痕1ヶ所検出した。15世紀後半～16世紀代の遺構面と考えられる。

SB501 調査区南半部で検出した礎石建物である。南北4.4 m以上、東西3.4 m以上の規模で、南側及び東側は調査区外へ広がる可能性がある。北東角の東隣の礎石は失われているが、南北5間以上、東西4間以上の建物である。礎石が上下に重なるものが2箇所あり、柱の建替えが行われたと考えられる。

SB502 調査区北半部で検出した南北2.8 m以上、東西0.4 m以上の塼列建物で、SK501の東壁の石組を構築する際に攪乱されている。北側及び東側が調査区外に広がり、全体の規模は不明である。塼は幅約40cmの溝状の掘形の内側(建物側)に接するように上下2段以上並べ、暗茶灰色粗砂を充填して固定している。塼の平均法量は、長辺または短辺が充存する資料から、長辺27.4cm、短辺22.8cm、厚さ2.0cmである。SB502とSK501の時期差は不明であるが、建物の更新時も区画は踏襲されていることを示している。

SK501 調査区北東部で検出した石組遺構で、南壁の一部と東壁の石組を検出した。遺構の切り合い関係から、SB502より後出する。北壁と西壁では石組は検出されなかったが、元は石を組んでいたと考えられ、隅丸形状に窪んだ遺構の形状から、石組の内法は、南北約1.8 m、東西約1.0 m、深さ70cm以上と考えられる。東壁は、1石五輪塔の転用石を含め、長辺20～55cmの石を使用しているが、南壁は、長辺25cm以下の小振りな石を使用している。

SE501 調査区南半部で井戸と考えられる石組の一部を検出した。遺構の大半が調査区外へ広がり、1段分の石のみが残存しているため詳細は不明であるが、20～60cmの石が弧状に並び、内法の直径は約1.4 m、深さ50cm以上である。井戸内からは、被熱により赤変した資料を含む多量の瓦片と陶器片が出土している。土砂の流入が少なく、瓦と陶器片を短時間に投棄した状況が伺える。火災後の廃棄土坑として利用したと考えられる。



fig.177 第5遺構面平面図



fig.178 SK501 石組遺構およびSB502 塙列建物
(南西から)

焼土整地面 調査区北西部で、焼土と炭による整地面を検出した。約2cmの厚さで叩き締められている。SB104の区画と重なり、SB104に先行する建物が存在したと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、15世紀後半～19世紀に至る5面の遺構面を検出した。調査範囲の制約と、各遺構面が後世の整地により削平を受けているため、建物全体の形状が確認できた例はない。そのため、各時期の建物配置を復元することは困難である。調査区北半部で検出した第1遺構面の建物(SB101・SB102)は、南北方向の棟行を持つ町屋建物と考えられ、北接する東西方向の街路に面していたと考えられる。SB102の区画と、第2遺構面北東部で検出したSB201の区画は、第5遺構面まで遡る事ができ、中世末～近世に至るまで大きな区画の変更はなかったと考えられる。

塙列建物SB502は、直交する街路に面する角地に建てられた建物の可能性がある。16世紀代の倉庫施設が検出されている第14次調査地や第53次調査地に近接しており、今回の調査地周辺は、倉庫を有する屋敷が立ち並んでいたと考えられる。今後、類例資料の蓄積を待って、各時期の土地利用や建物の性格を明らかにしたい。



fig.179 2区第5遺構面(北から)

16. 兵庫津遺跡 第83次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、奈良時代の大輪田泊に始まり、平安時代末の平清盛による改修で日宋貿易の拠点になった遺跡である。室町時代には日明貿易の拠点にもなり、戦国時代、安土桃山時代を経て、江戸時代の最盛期には人口2万人とされた港湾都市遺跡でもある。

これまでの埋蔵文化財発掘調査では、港湾施設に伴うと推測される、奈良時代～平安時代前半の溝等も確認されている。また、近代の兵庫運河掘削時に巨礫等が多数出土したとの記録がのこり、詳細は不明だが港湾施設であった可能性も考えられる。鎌倉時代～江戸時代では、遺構の確認できる範囲が拡大していき、港湾都市としての兵庫津遺跡が明らかになりつつある。今回は社屋建設に伴い、調査を実施した。

2. 調査の概要

今回の調査では2面の遺構面において、江戸時代と平安時代の遺物を確認した。

第1遺構面

一部が近世の遺物を含む暗灰褐色砂質土遺物包含層の下面であり、遺構面として調査したが、遺構は確認していない。荒地か耕作地である可能性が高い。

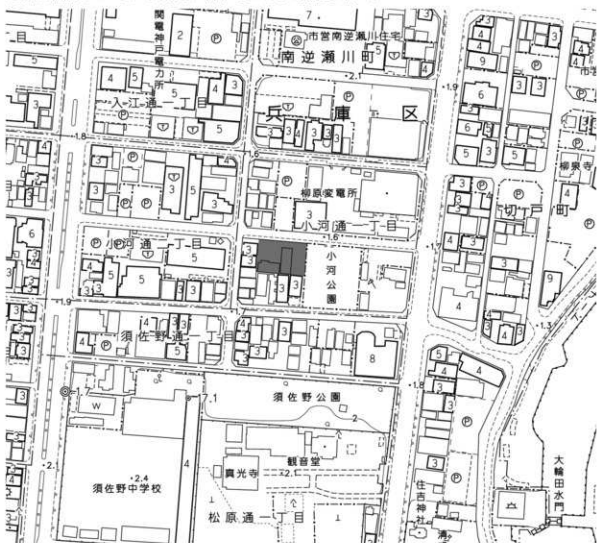


fig.180 調査地位図 1:2,500

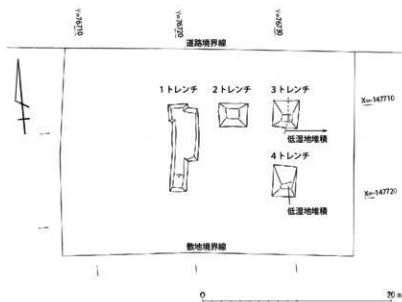


fig.181 調査区配置図

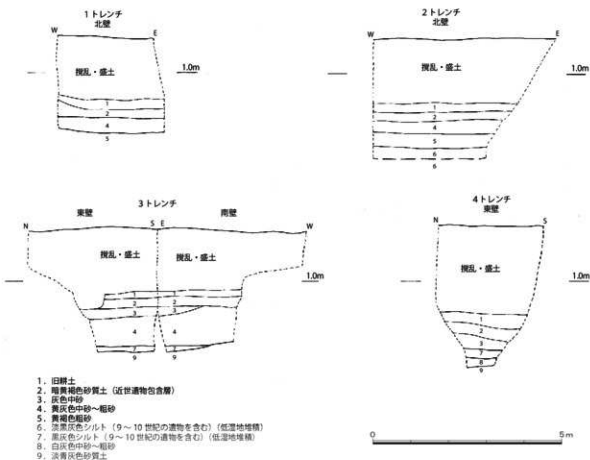


fig.182 土層断面図

第2遺構面

2トレンチ、3トレンチの標高15cm前後で、厚さ10～20cmの黒灰色シルト層を確認した。その下層は白灰色中砂～粗砂であり、この白灰色中砂～粗砂の直上では木質遺体を確認している。黒灰色シルト層は低湿地の堆積土と考えられる。

3トレンチでこの低湿地の西肩を確認し、より西に位置する2トレンチと、トレンチ1の第



fig.183 1 トレンチ全景 (東から)



fig.184 2 トレンチ全景 (南から)



fig.185 3 トレンチ全景 (北東から)



fig.186 4 トレンチ全景 (西から)

2 遺構面確認部分では、低湿地の延長上と考える遺構面を検出した。遺構、遺物とも確認していない。この事から、この低湿地は3トレンチ、4トレンチの位置する調査地東半から東方向に広がる事が判る。

遺物は黒灰色シルト層から、平安時代で9～10世紀頃の、緑釉陶器の壺、須恵器壺、須恵器壺、須恵器坏、土師器壺、須恵器転用硯等が出土している。これらの遺物には磨滅は認められず、近隣から流入したと考えられる。他に古墳時代後期の須恵器壺が出土したが、これは磨滅を受けている。

3. まとめ

『元禄絵図』と照合すると、当該調査地は真光寺の北側付近に位置し、畑と記されている。今回の調査でも、江戸時代中頃は畑か荒地であった様で、江戸時代の遺物包含層は確認したが、遺物は希薄であり、遺構も確認できなかった。

ただし、より下層で低湿地に堆積したと考えられる黒灰色シルトから、9～10世紀頃の須恵器、緑釉陶器等が出土している。磨滅は認められず、近くに当該時期の遺構の存在する事が考えられる。

この黒灰色シルトの堆積する低湿地は、今回の調査地の南東側に位置する第26次調査で確認された低湿地の北西付近に位置し、同じ低湿地の可能性が高い。また第26次調査では、この低湿地が後背湿地である事も確認されている。

周囲の調査では、第26次調査で古墳時代、奈良時代～平安時代の遺物が出土し、また今回の調査地南側に位置する第32次調査では奈良時代～平安時代前半の溝等を確認し、古代に大輪田泊と文献に記される港湾施設の一部である可能性が高いと推測されている。さらに今回の調査地南東側に位置する第67次調査でも、奈良時代～平安時代末の土坑等を確認している他、下層に古墳時代の遺構面が存在する可能性が高い事も確認されている。これらの事実から、第26次調査、第32次調査、第67次調査で確認された奈良時代～平安時代末までの遺構と遺物が、当該調査の結果も合わせ、少なくとも現状では南北280m×東西280mの範囲に広がっている事が判る。

『元禄絵図』では、第26次、第32次、第67次調査地と当該調査地の周囲は、真光寺以外ほぼ畑である。しかし埋蔵文化財調査では、第67次調査で鎌倉時代～江戸時代中期までの遺構も確認している。絵図とは異なる部分が一部で存在する事になる。

ただ周囲の調査結果と『元禄絵図』を合わせ考えて、基本的にこの地域が江戸時代元禄期には真光寺以外はほぼ畑であるのは事実であろう。また上記の結果から、この地域は古墳時代、奈良時代～平安時代末までの遺構と遺物は広く確認できるが、鎌倉時代以降に続く遺構と遺物は部分的に確認できるだけの可能性が高い。

この事から兵庫津遺跡内で、奈良時代～平安時代末までの大輪田泊関連の遺構と、鎌倉時代～江戸時代元禄期までの兵庫津関連の遺構は、一部重複するが少し位置が異なると推定できる。

今回調査した地点で9～10世紀の遺物が低湿地から確認された事は、大輪田泊の成立と展開を考える上で意義がある。

17. 松原城跡 第1次調査

1. はじめに

松原城跡は、「蒲公英城」「道場川原城」とも呼ばれ、有野川と有馬川が合流する地点の西側にある比高差25mの独立丘陵地上に立地する。東側には「丹波街道」が通り、北側には播磨方面へと向かう街道の分岐点がある交通の要衝であった。14世紀後半に築城されたとの伝承があり、『信長公記』に記されている天正6年(1578)の織田軍による三田城攻めの際の付城である「道場川原」の「足懸り」と想定されている。

今回の調査は、宅地造成工事に伴い、前年度より継続して丘陵全体の発掘調査を実施した。なお、令和2年度に『松原城跡発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

曲輪1

丘陵の東半部に位置し、最も高い場所に築かれた曲輪である。北東-南西方向約30m、北西-南東方向約35mを測り、面積は約900㎡である。形は不整形で、方形を意識して造成された曲輪2と比べて、丘陵の地形をそのまま利用していると思われる。曲輪の北東側は急峻な崖面で、北西斜面側は中腹に平坦面を設けた急勾配の切岸となっている。

基本層序 平坦部遺構検出面の標高は、約182.4m前後を測る。表土、黒褐色砂質土(近世耕作土)、暗褐色粘質細砂土、灰黄褐色粘質シルト、灰白色および浅黄色粘質シルト(地山)が堆積する。

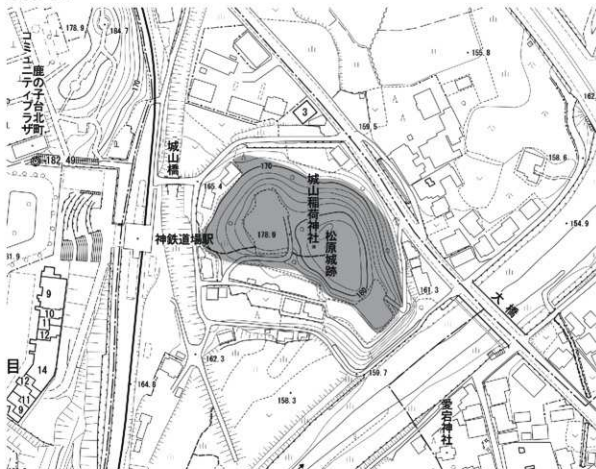


fig.187 調査地位図 1:2,500



fig.188 曲輪等配置図



fig.189 松原城全景(南から)

平面面 表土および近世耕作土が堆積し、炭化物が混じる暗褐色粘質土までは寛永通宝や近世以降の瓦や陶磁器が出土した。下層から石敷遺構、土塁裾の落ち込み溝(SD1016)、石囲いされた遺構などを確認した。建物跡は未確認だが、存在していた可能性がある。遺物は土師器や瀬戸・美濃焼天目茶碗、丹波焼播鉢、白磁、青花、鉄釘などが出土している。

石敷遺構 曲輪1の平坦部の西側に位置し、L字状に残存した遺構で、建物の軒下に造られた雨落ち溝の可能性がある。南西辺は幅約2mで直径2～5cm大の石が多く、北西辺は幅約1mで拳大の石が多い。石は大きさと色調を選別している。遺物は、陶器と磁器、16世紀代の青花が出土している。

土塁 曲輪1の南西辺～北東辺の三方向を取り囲む。地山を削り出して成形し、その上に盛土をして構築している。北西辺土塁上面は標高184.0m前後、南西辺土塁および北東辺土塁は182.9m前後を測る。北西辺土塁の断ち割りから、土塁の土質は表土、にぶい黄橙色砂質土(盛土)、褐色粘質土まじり灰白色粘質土、灰褐色粘質土、黄褐色粘質土(地山)、灰白色粘質土(地山)となる。

北西辺土塁内側では土師器、須恵器、鉄製品が出土し、北東辺では一石五輪塔や瀬戸・美濃焼天目茶碗が出土している。

曲輪2 曲輪2は、丘陵の西西部に位置し、曲輪1に次ぐ高さを持つ。平坦面の規模は北東～南西方向25m、北西～南東方向30m、面積は約750㎡である。平面形は方形で、南西側～北東側の三方を土塁に囲われる。曲輪の東側を削平し、西側は土を盛って平坦面を造成することで、曲輪全体を方形に意識して整形している。南東側には土塁の存在は確認できなかった。基本層序 曲輪中央部の標高は約179.4mを測り、南東方向へわずかに傾斜する。調査の結果、築城前(I期)、築城時(II期)、土塁改修時(III期)、廃城時(IV期)の4時期の遺構を確認した。平坦面における層序は盛土・攪乱、暗褐色粘質土(近世以降の表土)、淡灰褐色粘質土(上面がIV期)、灰黄褐色粘質土、灰白色粘質土(上面がIII期、地山)が堆積する。

第1遺構面

廃城時(IV期)に当たる。平坦面で石敷遺構、土坑、ピットと溝を検出した。

上層石敷遺構 北西土塁裾で検出した。攪乱で一部失われているが、土塁塁線に平行して直径15～40cm大の角礫を並べ、曲輪内部側に数cm大の礫を幅0.9mの範囲で敷いている。長さは約9.2mで、小礫群の検出レベルは179.52～179.58mを測る。小礫群の石材は溶結凝灰岩である。北東側の2か所に、50cm角と35cm角の板状の凝灰質砂岩が2.15mの距離で



fig.190 第2遺構平面図

据えられていた。双方とも曲輪内部側に15cm大の角礫を敷き並べる。この石敷き遺構の性格は不明であるが、土塁から流れた雨水を処理する施設、あるいは建物の雨落ち溝などが考えられる。遺物は16世紀中～後半の丹波焼播鉢が出土した。

SX2101 曲輪南部の堀切近くで検出した。東側は現代の掘削により削平されているが、上端直径約5.4mの円形の落ち込みである。ロウト状の形状で、標高176.8m以下は岩盤を円筒状に掘り下げている。遺物は、中世の土師器、丹波焼播鉢、磁器などが出土している。

第2遺構面

土塁改修時(Ⅲ期)に当たる。平坦面では虎口、石敷遺構、礎石建物、土坑、ピット、溝を検出した。

下層石敷遺構 北西土塁の内側裾、上層石敷遺構の下層で、さらに石敷遺構を検出した。規模は長さ約5.5m、幅は約2.0mで、幅は上層の石敷きよりも広い。礫の大きさは上層石敷遺構より大きく、拳大である。礫上面のレベルは179.4mで、上層石敷とは間層として黒褐色粘質細砂～にぶい黄褐色シルト層を挟む。

礎石建物 曲輪西側で総柱礎石建物を検出した。規模は3間×6間で、面積約70.5㎡である。礎石の芯々間距離は約1.95mである。礎石は一部失われているが、抜き取りの痕跡が残って

いた。礎石に使用された石材は溶結凝灰岩が主で、ほかに花崗岩と凝灰質砂岩が見られる。西側石敷遺構 曲輪南西側で、土塁に平行する長さ約14 m、幅約2.7 mの石敷きを検出した。他の石敷遺構と比較すると隙の大きさが不均一で、拳大のものから直径30cm以上の凝灰質砂岩および河原石が使用されている。石敷のほとんどは失われていたが、虎口部分の土塁直交石列および北側の下層石敷遺構に関連する遺構と考えられる。

上層土塁 北側の隅が最も高く、平坦部からは高さ約3 mを測る。裾部幅は北西辺土塁で9 m以上を測り、断面は幅広の扁平な蒲鉾形である。

第3面遺構面

築城時（Ⅱ期）に当たる。西半では斜面部に対して黄褐色・暗褐色・黒褐色粘性シルトなどを互層に盛土し、整地したうえで石列や土塁を構築していたことが判明した。

下層土塁 土塁の各辺3か所で断ち割りをしたところ、内部に下層土塁が存在することが判明した。北西辺での規模は裾部幅4.2 m、高さ1.7 mである。

下層土塁築造時の平坦面の表土層は、上層土塁築造時に削平を受けている。したがって、すでに存在した下層土塁を利用してさらに盛土をし、上層土塁を構築したことが明らかになった。この下層土塁に伴う遺構として、北西土塁南半で曲輪内部側に長さ約11 mにわたって3段の石積が確認された。石積の南半は凝灰質砂岩を用いているが、北半は河原石を用いている。曲輪内部の空間に対して、土塁が流出しないよう土留めの役割を担っていたと考えられる。

第4面遺構面

築城前（Ⅰ期）に当たる。土塁の断ち割り調査を行う過程の中で、築城前の旧表土面を検出した。遺物は、旧表土層から東播系須恵器捏鉢が出土している。

曲輪4 曲輪2の北東側斜面下に位置する腰曲輪である。北西側で曲輪5と、東側で曲輪14と土塁によって接続する。平坦面は、北西—南東方向で約27 m、北東—南西方向で約10.5 mを測り、面積は約283.5 m²である。

基本層序 標高は、中央部で175.0 m前後を測り、曲輪2との比高差は平坦面の中央部間で約4.5 mを測る。盛土、表土、褐色砂質土、にぶい黄褐色シルト質土（平坦面基盤層）が堆積する。

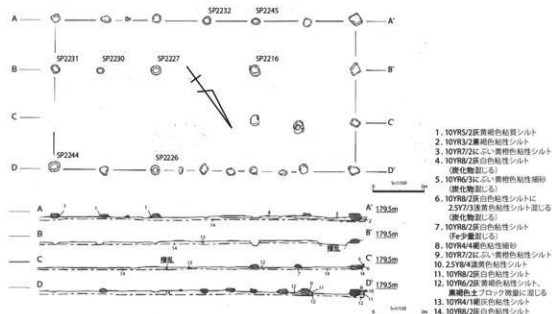


fig.191 礎石建物平・断面図

平坦面上では土坑1基、ピット3基を検出した。平坦面の褐色砂質土中およびぶい黄褐色シルト質土上面より土師器、須恵器、陶器、瓦、短刀と考えられる鉄製品、釘、鉄砲玉が出土した。

曲輪5 曲輪2の北側、曲輪4の西側で方形に張り出す腰曲輪である。平坦面は南北3m、東西4.6mを測り、面積は約18.4㎡である。南東辺の裾には凝灰質砂岩の石列があり、これを基底石として上部に盛土を行って整形されていたことがうかがえる。東隅下半部には階段状に3段石材が並び、曲輪4から登れるようになっているが、北西辺・北東斜面および曲輪2側斜面は急傾斜であり、北東辺は崩落して本来の曲輪の形状を失っている可能性がある。

曲輪14 曲輪1の北側で曲輪4との間に位置する平面三角形の腰曲輪である。

平坦面 長さ約22m、幅約10mで、平坦面の標高は178.5mである。曲輪4との比高差は約3m、曲輪1土塁上面との比高差は約5.5mを測る。岩盤上に表土、ぶい黄褐色が堆積する。遺物は土師器、陶器、瓦が出土している。

横堀 曲輪1側斜面裾にて検出した堀である。堀底幅約2～4m、深さ0.8mの断面扁平な逆台形で、後述する堀切と同様、底部は岩盤を掘削して成形している。埋土は横堀が埋没するレベルまでは黒褐色土が堆積し、その上は斜面からの崩落土が堆積する。下層の黒褐色土からは、陶器が出土している。

堀切 曲輪1と曲輪2間に当初より想定されていた堀切を確認した。長さ約39m、曲輪2平坦部肩部レベルでの幅は4.4m、堀底幅は2～3.1mで、断面形は逆台形である。曲輪2の土塁上端と堀底との比高差は約4mになる。下部は岩盤の凝灰質砂岩を削り出して平坦であるが、

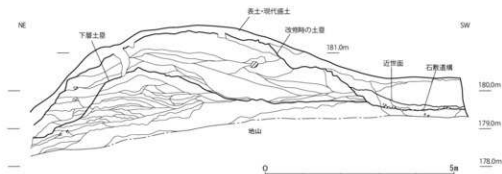


fig.192 曲輪2北西土塁断ち割り断面図



fig.193 曲輪2北西土塁断面（南から）



fig.194 曲輪2北西下層土塁南半（南から）
曲輪内部側にのみ石積が存在

底のレベルは北端で177.2 m、南端で176.0 mと南側へ緩く傾斜している。

閉塞土塁 堀切北端を塞ぐように両側面に石を積んだ盛土である。堀底からの残存高は最大0.7 m、幅3 m、上端の長さ4.5 mである。遺物は、転落石間から備前焼や丹波焼など中世陶器が出土し、盛土内からは土師器、丹波焼および瀬戸・美濃焼の中世陶器が出土している。

3. まとめ

今回の調査では土塁に囲まれた主要な曲輪のほか、堀切、横堀、切岸、礎石建物などを検出した。また、斜面部への盛土・整地や土塁の修築など複数の遺構面を確認し、元の城郭から改修を経て廃城に至るまでの流れを読みとることができた。

築城時の土塁は地山を削り出し、あるいは斜面部へ盛土してから築造されていた。改修時には元の土塁上に一気に盛土してかさ上げされており、丁寧な築盛は見られなかった。短期間のうちに防御性を高める必要に迫られたものと思われる。また、堀切には閉塞土塁を設けるなど、より侵入が困難になるような工夫が施されている。

曲輪内からの建物跡は、曲輪2の礎石建物1棟以外は確認できていない。

遺物は土師器皿、陶器插鉢、天目茶碗、中国製磁器、鉄鍬、鉄砲玉、釘、銭貨などが15～16世紀のものが多く含まれる。また、古墳時代後期の遺物も出土しており、この丘陵上に古墳が存在していた可能性も考えられ、西側に点在する北神ニュータウン内の古墳との関連がうかがえる。

以上のように、松原城跡は北摂地域の中世後半の城郭として貴重な資料となった。



fig.195 曲輪4全景(南東から)



fig.196 曲輪14横堀(西から)



fig.197 堀切全景(南から)



fig.198 堀切北端部の閉塞土塁(北から)

18. 小坂遺跡 第4次調査

1. はじめに

小坂遺跡は、八多町、有野町、道場町の境界に位置し、武庫川の支流である八田川と有野川に挟まれた丘陵北端部に位置する。平成7年度に実施した尾根上の試掘調査では、縄文時代の土器や石器、古墳時代後期の古墳7基、戦国期の防御施設と考えられる小規模城館（小坂砦跡）、中近世の墳墓群等が確認された。また、平成23年度に実施した遺跡南端部の調査（第1次調査）では、古墳時代の須恵器、時期不明の土坑、溝状遺構が検出された。平成24年度に実施した丘陵西側斜面の調査（第2次調査）では、集石墓等が流失した痕跡の可能性がある溝状地形が確認されている。平成27年度に実施した遺跡南端部の東斜面の調査（第3次調査）では、中世の経塚の可能性が高い集石遺構が2基検出されている。

今回は、宅地造成に伴う工事により、埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査地は丘陵の西側斜面に位置し、南北約150m、東西約10mの範囲である。

2. 調査の概要

厚く堆積していた落葉の除去を実施した後、調査地を8区に分割し、順次人力による遺構検出作業を実施した。調査の結果、平坦面7箇所、人為的に掘削された谷状地形2箇所、自然流路3条を検出した。

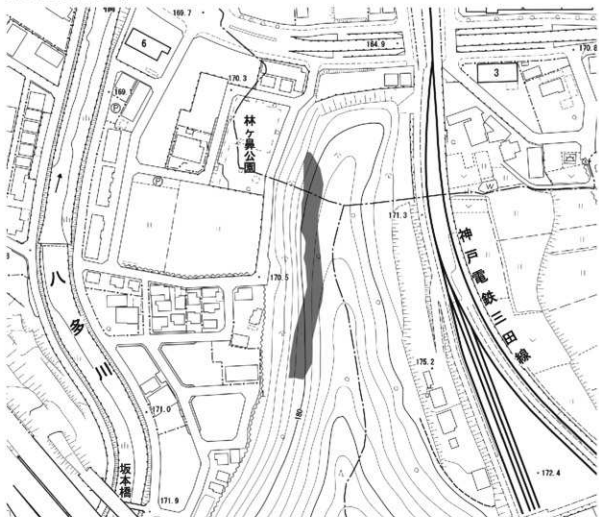


fig.199 調査地位置図 1:2,500

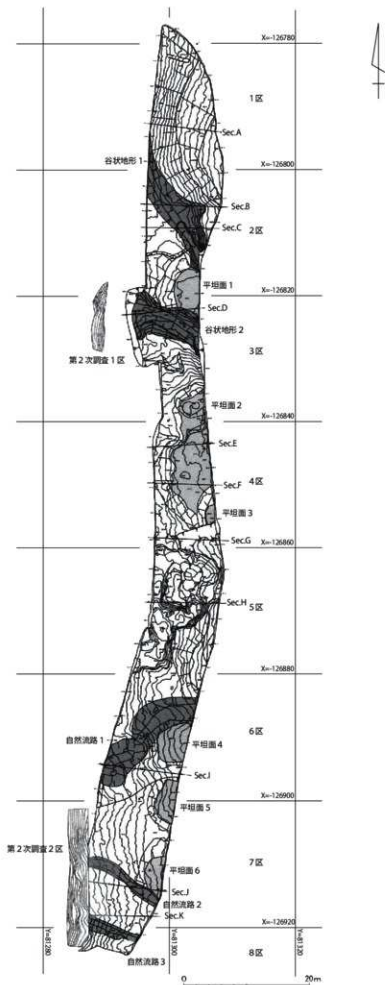


fig.200 遺構平面図

基本層序

基本的には3層で、上層から腐葉土、流土、地山の順である。腐葉土と流土中からは、多量の10～40cm大の円礫が出土したが、地山には円礫が存在せず、他所から運ばれたと考えられる。調査区北端の1区は、流土の堆積が薄く、礫はほとんど確認できなかった。当調査区が位置する丘陵北端部は竹林が広がっており、他の調査区と植生が異なっている。このことから、後世の伐採を伴う造成により旧地形が失われたと考えられ、埋蔵文化財の存在は確認できなかった。平坦面5箇所、谷状地形2箇所、自然流路2条を検出した。

平坦面1 3区との境付近の高位（東側）で検出した南北約4mの平坦面で、北側に谷状地形1、南側に谷状地形2が存在する。遺物は出土しなかった。

谷状地形1 平面形は1区から2区の北端部を取り巻くように南東から北西へ弧を描いており、幅2～3.9m、深さ約1.6m、肩の斜度は約30度を測る。埋土からは、長径10～40cmの礫が多く出土したが、堆積状況から、主に南東側から流入したと考えられる。尾根部に隣接し、谷状地形1に流入する雨水量が少なく、深い谷状地形を形成する水量と流速は考え難いと考えられる事と、平面形が弧を描いている事から、人工的に掘削されたと考えられる。遺物の出土は無く時期は不明であるが、今回の調査地南東部に主要部のある小坂岩跡の防御性を高める機能があると考えられる。近接する尾根上には堀切状の窪みは無く、丘陵先端部を区画する性格の遺構ではないと考えられる。

谷状地形2 平坦面1と平坦面2の間で検出した谷状地形である。幅4.5～5.1m、深さ約1.8m、断面はV字状で、肩の斜度は約45度を測る。埋土からは、長径10～30cmの礫が多く出土したが、谷状地形1と比較すると礫の量は少ない。遺物の出土は無く時期は不明であるが、谷状地形1と同様、防御性を高める機能を持つ遺構と考えられる。

平坦面2 谷状地形2の南側の高位に位置する南北約21mの平坦面である。流土の堆積は薄く、礫の出土は少なかった。遺物の出土はなく、時期や性格は不明である。

平坦面3 平坦部2の南東部で検出した平坦部で、一段高位に位置する。南側は攪乱されており、南北の残存長は約4.2mである。平坦面及び西側斜面の地山直上より、弥生土器、須恵器、土師器の小片が出土しているが、原位置を保っていない。

平坦面4 自然流路1の南側の高位に位置する平坦面で、南北約4mを測る。遺物は出土しなかった。

自然流路1 平坦面4の北側から南西方向に流れる自然流路である。幅4～5m、深さ約0.8mを測る。埋土より、長径約30cmの礫が多量に出土した。中世の須恵器皿の小片が出土した。

平坦面5 平坦面4の南側に位置する平坦面で、南北約4mを測る。遺物は出土しなかった。

平坦面6 自然流路2の北側の高位で検出した平坦面である。南北約4mを測る。遺物は出土しなかった。

自然流路2 平坦面6の南側で検出した北西方向に流れる自然流路である。幅約2m、深さ約0.4mを測る。埋土より、長径約30cmの礫が多量に出土した。

自然流路3 調査区南端部で検出した北西方向に流れる自然流路である。幅約1～2.5m、深さ約0.4mを測る。埋土より、長径約30cmの礫が多量に出土した。

調査前には、自然流路2と自然流路3に挟まれた斜面上に長軸20～30cmの円礫が多量に存在し、集石墓群の存在を想定していた。調査の結果、円礫の下から落葉を含む流土が検出される例が大半であり、確実に原位置を保つ礫は特定できなかった。遺物は、腐葉土中から墨痕

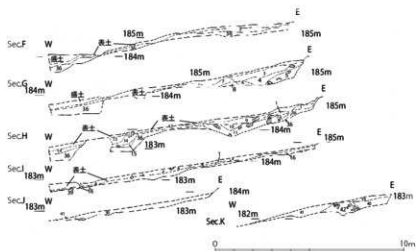
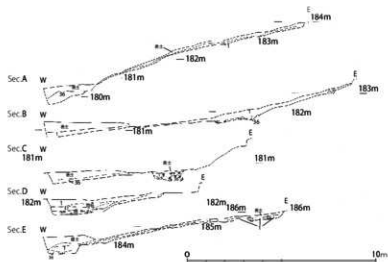
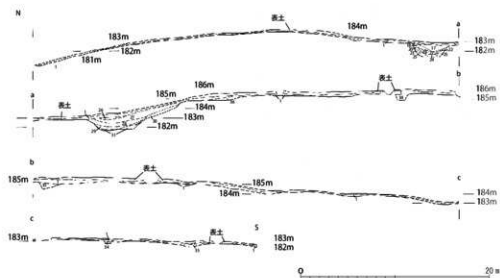


fig.201 土层断面图(1)



- | | | |
|--------------------------|-----------------------------------|-----------------------------|
| 1. 淡黄褐色砂質土 | 16. 淡褐色砂質土、極細砂～シルト多く含む、大礫少量含む | 29. 黄褐色礫混じり砂質土、小～中礫多く含む |
| 2. 淡黄褐色砂質土、大礫多く含む | 17. 灰褐色礫混じり砂質土、大礫多く含む | 30. 灰褐色小礫混じり砂質土、小礫多く含む |
| 3. 淡褐色砂質土 | 18. 淡褐色小礫混じり砂質土 | (やや黄色帯びる) |
| 4. 淡褐色砂質土、大礫多く含む | 19. 淡褐色小礫混じり砂質土 (やや黄褐色帯びる) | 32. 灰褐色大礫混じり砂質土 |
| 5. 淡褐色砂質土、大礫多く含む | 20. 淡黄褐色砂質土 | 33. 灰褐色大礫混じり砂質土 (32より大礫少ない) |
| 6. 淡褐色砂質土、粗砂～小石多く含む | 21. 灰褐色礫混じり砂質土、小～中礫多く含む (やや黄色帯びる) | 34. 黄褐色砂質土 |
| 7. 淡褐色砂質土 (やや赤みを帯びる) | 22. 灰褐色礫混じり砂質土、小～中礫多く含む | 35. 黄褐色砂質土、粗～中砂やや多く含む |
| 8. 灰白褐色極細砂 | 23. 灰白色小礫混じり砂質土 | 36. 黄褐色砂質土、極細砂多く含む |
| 9. 淡褐色砂質土、中～大礫多く含む | 24. 灰黄褐色小礫混じり砂質土 | 37. 黄褐色砂質土、粗砂多く含む (3と類似する) |
| 10. 淡褐色砂質土、粗砂～小礫多く含む | 25. 淡褐色小礫混じり砂質土、小礫多く含む | 38. 褐色砂質土、粗～中砂多く含む (地山層様由来) |
| 11. 淡褐色砂質土、大礫多く含む | 26. 淡黄褐色礫混じり砂質土、小～大礫含む | 39. 淡黄灰色砂質土 (流土) |
| 12. 黄褐色砂質土、ややシルト帯びる | 27. 褐色礫混じり砂質土、大～小礫含む | 40. 黄灰色砂質土 |
| 13. 淡褐色砂質土、ややシルト帯びる、中礫含む | 28. 灰褐色礫混じり砂質土、大礫多く含む | 41. 淡灰色粗砂、10～25cmの礫含む |
| 14. 淡褐色砂質土、細砂から極細砂多く含む | | 42. 淡黄灰色砂質土、10～25cmの礫多く含む |
| 15. 灰白褐色極細砂 (8と類似する) | | |

fig.202 土層断面図 (2)

を持つ奈良～平安時代の須恵器小皿等の破片が、流土中からは古墳～中世の須恵器の小片が出土したが、いずれも上方より流入した遺物と考えられる。

3. まとめ

人為的に掘削された谷状地形は、形状や規模から戦国期と考えられる小坂砦に付随する防衛施設の一つとしての役割があった可能性が考えられるが、全体の形状や時期が不明であるため、詳細は不明である。調査区のほぼ全域で検出された多量の円礫は、確実に原位置を保つものは確認されず、遺構に伴うものとは確定できなかった。しかし、当丘陵の地層中には、同様の円礫は含まれない事から、この円礫は他所から運ばれたものと考えられる。尾根上で検出されている石室や集石墓に円礫が使用されている事から、調査区東側のより高位に存在する遺構から流出したものと考えられる。尾根稜線に向かって斜面の傾斜は緩まっており、当調査区東側から尾根上にかけては、多くの遺構が残存していると可能性がある。



fig.203 調査地全景 (南西より)



fig.204 調査区全景（北西から）

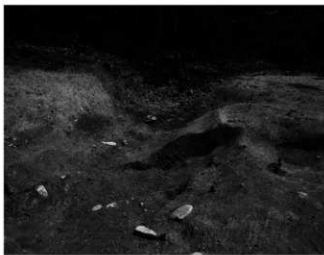


fig.205 2区谷状地形1（北西から）



fig.206 3区谷状地形2（南東から）

19. 御蔵遺跡 第71次調査

1. はじめに

御蔵遺跡は、六甲山系から南東方向に流れる刈藻川によって形成された自然堤防から後背湿地上に位置する遺跡である。これまでに70次の発掘調査が行われ、弥生時代後期～中世の複合遺跡であることが確認されている。弥生時代後期～庄内式期（弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）の水田跡や土器溜り、飛鳥時代の倉庫を含む掘立柱建物、奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物群や墨書土器・金属製帯金具といった官衙的要素の強い遺構・遺物が発見されるが、平安時代末には一般的な集落となっていたと考えられている。

今回の調査は倉庫建設工事に伴うもので、建設計画地の一部はすでに平成10年に事務所建設に伴って第10次調査として発掘調査を実施している。この第10次調査地点や近接する第8次調査地点などで弥生後期～庄内式期の遺物・遺構の存在が知られていたため、工事影響範囲のうち未調査部分について発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

調査は、第1包含層上面までを重機で掘削し、以下の遺物包含層掘削、遺構面検出、遺構掘削等は人力で行った。調査区は3分割し、北東側から1～3区と設定した。

基本層序

現地表面の標高は、7.5m前後を測る。層序は上層より、盛土・攪乱、旧耕土、にぶい黄褐色粘性砂質土（第1包含層）、褐色粘性砂質土（上面が第1遺構面）、黄褐色粘質土（第2包含層）、黄褐色シルト質土（上面が第2遺構面）、にぶい黄褐色粘質土（第3包含層）、黒色粘性砂質土（上面が第3遺構面）、暗オリーブ灰色～灰色粘質土（上面が第4遺構面）の順に堆積する。調査区の南西側に比して北東側は、土壌化による還元が進み青～灰色味がかっている。

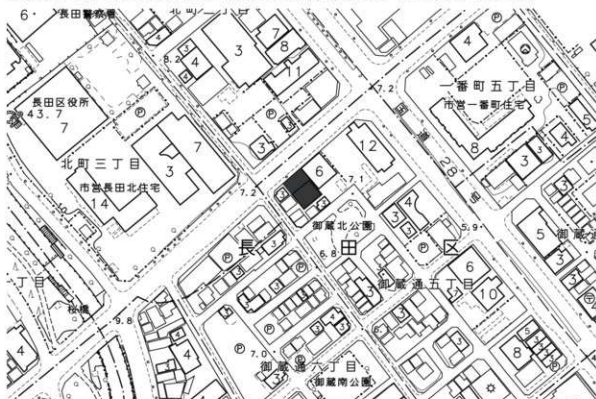


fig.207 調査地位置図 1:2,500

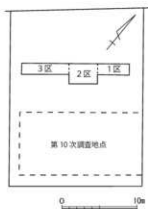


fig.208 調査区配置図

第1遺構面

中世の遺物を含む黄褐色～緑灰色粘性砂質土を掘削後、褐色～褐灰色粘性砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は6.7 m前後を測る。遺構は溝1条・ピット1基を検出した。遺構面上から奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

第2遺構面

奈良時代の遺物を含んだ褐色～褐灰色粘性砂質土を掘削後、南西側では黄褐色～灰色シルト質土上面、北東側では黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は6.5～6.6 mを測る。本遺構面では遺構を確認できなかったものの、遺構面上から古墳時代後期の須恵器や韓式系土器が出土した。

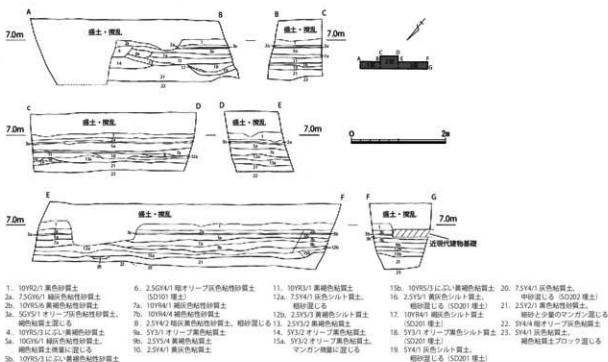
第3遺構面

時期は不明であるが土師器を含んだ黄褐色～灰色シルト質土・黒褐色粘質土・ぶい黄褐色～オリーブ黒色粘質土を掘削後、黒色粘性砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は6.3～6.5 mを測る。遺構は溝2条・水田畦畔を検出した。遺構面上からは遺物は出土しなかったが、周辺の調査成果から庄内式期のものと推測される。

SD301 1区南西側～2区北東側で検出した幅1.05 m前後、深さ0.35cmを測る溝である。埋土は暗褐色粘質土である。黄灰色シルト質土、褐灰色シルト質土、オリーブ黒色シルト質土、灰色シルト質土の順に堆積し、溝内から土師器片が出土した。

SD302 3区北東側で検出した幅0.3 m前後、深さ0.2 m前後の溝である。灰色粘質土を埋土とし、溝内から土師器片が出土した。第10次調査の成果から、各水田への配水路としての機能が考えられる。

水田畦畔 SD302の南東に沿って検出された。残存する高さは5 cm程度である。



- | | | | |
|------------------------|--------------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 10YR2/1 黄色粘質土 | 6. 2.50Y4/1 暗オリーブ灰色粘性砂質土 | 11. 10YR3/1 黄褐色粘質土 | 20. 7.5Y4/1 灰色粘質土 |
| 2a. 7.50Y6/1 緑灰色粘性砂質土 | (SO20) 埋土 | 12a. 7.5Y4/1 灰色シルト質土 | 40 砂質土 (SO20) 埋土 |
| 2b. 10YR5/1 黄褐色粘性砂質土 | 7a. 10YR4/1 緑灰色粘性砂質土 | 埋土 | 21. 2.5Y2/1 黄褐色粘性砂質土 |
| 3a. 50Y5/1 オリーブ灰色粘性砂質土 | 7b. 10YR4/4 暗褐色粘性砂質土 | 12b. 2.5Y3/3 黄褐色シルト質土 | 埋土と少量のマンガン層に |
| 埋土に土器片を | 8. 2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘性砂質土 | 埋土 | (SO20) 埋土 |
| 4. 10YR5/1 ぶい黄褐色粘性砂質土 | 9a. 5Y3/1 オリーブ黄褐色粘質土 | 13. 2.5Y3/2 黄褐色粘質土 | 22. 5Y4/4 暗オリーブ灰色粘質土 |
| 5a. 10G6/1 緑灰色粘性砂質土 | 9b. 2.5Y3/4 黄褐色粘質土 | 14. 5Y3/2 オリーブ黄褐色粘質土 | 23a. 1Y4/1 灰色粘質土 |
| 埋土に土器片を | 10. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 | 15a. 5Y3/2 オリーブ黄褐色粘質土 | 埋土に土器片を |
| 5b. 10YR5/3 ぶい黄褐色粘性砂質土 | | マンガン層に | 23b. 5Y4/1 灰色シルト質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 24. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 25. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 26. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 27. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 28. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 29. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |
| | | | 30. 5Y4/1 灰色粘質土 |
| | | | 埋土 |

fig.209 土層断面図

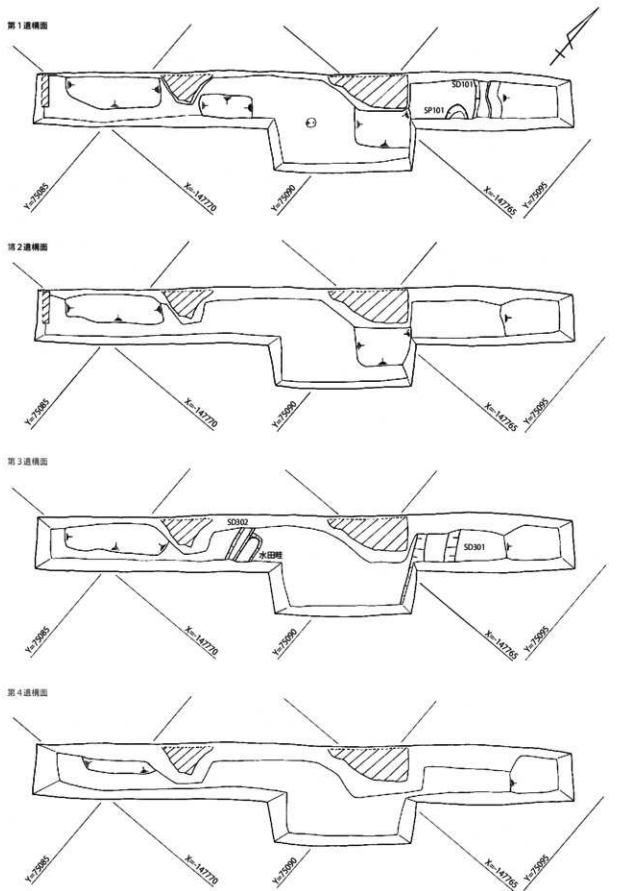


fig.210 遺構平面図

第4遺構面

弥生土器を含んだ黒色粘性砂質土を掘削後、暗オリーブ灰色～灰色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は6.1～6.2 mを測る。本遺構面では遺構を確認できなかったものの、遺構面上から弥生時代後期の土器が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、4面の遺構面から奈良時代の溝1条・ピット1基、庄内式期の溝2条・水田畦畔とそれらに伴う遺物を得た。

今回の調査地点の南東側に位置する第10次調査地点では、弥生時後期～庄内式期にかけての遺構面が4面検出されているが、第1遺構面と第2遺構面はほぼ同時期とされるため、実質的には3時期と考えられる。今回の調査地に比定すると、第10次調査第3遺構面で検出された水田畦畔およびこれに沿う溝と今回の第3遺構面で検出された水田畦畔とSD302は同一のものと考えられる。しかし、今回の奈良時代の土器が出土した第1遺構面と古墳時代後期の土器が出土した第2遺構面は第10次調査では対応する遺構面が存在しない。御蔵遺跡では全体的に古墳時代の遺構・遺物が少なく、第2次調査地点で古墳時代後期の遺構を検出したものの、それ以外の調査では同時期の遺構・遺物は発見されておらず、具体相は明らかではない。このような状況から、第2遺構面上で検出した須恵器や韓式系土器は、周辺の遺跡からの流れ込みや持ち込みの可能性もある。一方、第10次調査第1遺構面では、庄内式期の土器溜りが検出されており、この時期の遺構面と判断できる。以上のことから、今回の第2遺構面は第10次調査第1・2遺構面に対応するものと考えられ、その形成時期は庄内式期と考えられる。なお、今回の第3遺構面で検出したSD301は第10次調査第2遺構面で検出されたSD02と同一の溝と考えられ、当調査のSD301は第2遺構面に属する溝であった可能性もある。また、第70次調査地点の庄内式期の遺構面で検出されたSD02と同一の溝である可能性が高い。

今回の調査地点の周辺では、第2、12、19、68次調査地点では奈良～平安時代の遺構・遺物が確認されており、今回検出した第1遺構面もこの時期に相当するものと考えられる。

第7、10、12、19、49次調査地点で庄内式期の土器溜りおよび多数の土器、第10、22、68次調査地点で同時期の水田跡が検出されたほか複数の遺構が検出されており、この時期に活発な活動が想定される。今回の調査はこれまでの成果と合致する。

また、第24、50-11、67次調査地点では遺構の密度が低く、これらの地点より北西～西側は後背湿地が広がっていた可能性が指摘される。今回の調査地点は集落形成可能な空間の西端ともいえる箇所であり、ここに水田が営まれたことは興味深く、遺跡内の空間利用を考えるうえでも貴重な成果を得たといえる。



fig.211 第1遺構面全景
(北東から)



fig.212 第2遺構面全景
(北東から)



fig.213 第3遺構面全景
(北東から)



fig.214 第4遺構面全景
(北東から)

20. 大田町遺跡 第22次調査

1. はじめに

当遺跡は、妙法寺川下流域の沖積地に立地する弥生時代～安土・桃山時代の複合遺跡である。各時期の集落址や「荒田郡」銘の須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器をはじめ、「須磨駅家」関連の遺構がこれまでの調査で検出されている。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うものである。工事の影響を受ける範囲のうち、調査可能な部分を対象として発掘調査を実施した。調査地点は、JR鷹取駅から直線距離で北西へ約450 mのところにあたる。

2. 調査の概要

基本層序

発掘調査は、柱状改良される箇所で調査可能な範囲を対象として、調査区を3か所設定した。調査対象面積は、19.4 m²である。発掘調査は、現地表面から耕作土までを重機で掘削し、遺構面と遺物包含層は人力で掘削した。

遺構面は、薄灰褐色粘質土上で検出した。検出した遺構は、B区からピット1基である。薄灰褐色粘質土を精査した際は、このピットを認識できなかったが、調査区断面を精査していた際に確認することができた。薄灰褐色粘質土と薄褐灰色粘質土を取り除くと、奈良時代の遺物包含層である暗灰色粘質土と灰黄色粘質土を検出した。両層からは、土師器や須恵器が多量に出土した。



fig.215 調査地位図 1:2,500

3. まとめ

今回の調査では、ピット1基を検出したのみだが、この遺構は、奈良時代の遺物包含層を切りこんでいた。遺構面を形成している薄灰褐色粘質土中からは、奈良時代～中世の遺物が混在していたため、遺構面の時期を比定する判断材料が乏しいものの、近隣での試掘調査成果を踏まえると、奈良時代～平安時代にあたる可能性がある。このことから、当調査地周辺には、奈良時代～平安時代の遺構がひろがっているとみられ、近隣での調査成果が進展することによって当該期の様相が明らかになるものと考えられる。

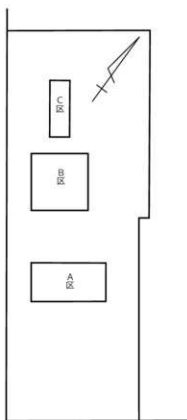


fig.216 遺構配置図



fig.217 B区 東壁 (南西から)

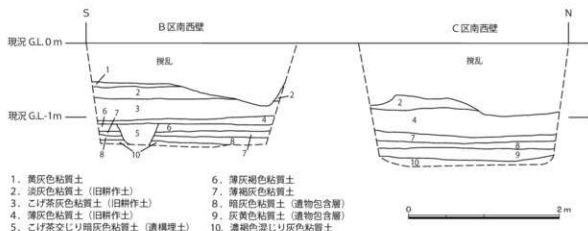


fig.218 B・C区南西壁断面図

21. 垂水日向遺跡 第39次調査

1. はじめに

当遺跡は、福田川河口付近に立地する縄文時代～安土・桃山時代の複合遺跡である。遺跡の標高は、最も高い北西側部分が9.4 m、最も低い南側部分が6.1 mであり、垂水小学校東部や陸ノ町北側など、微高地が遺跡内に点在している。地形は、福田川と天神川が段丘を開析して流れている。遺跡の範囲は、東が福田川から西が天神川までの約600 m、南が国道2号線から北が垂水小学校付近までの約390 mである。

当調査地周辺では、第1・4次調査で縄文時代早期後葉に比定されている鬼界アカホヤ火山灰の堆積層や、漣痕の残る砂の堆積を示す層が検出されており、その検出面にヒトや偶蹄目などの足跡が残っていたのが確認されている。また、第4次調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴建物が、第36次調査では、鎌倉時代の掘立柱建物と溝がそれぞれ検出されている。当遺跡東部で集落が展開するのは、平安時代後期～鎌倉時代前期であり、現在の垂水区役所を中心に40棟近くの掘立柱建物が存在していたことが明らかとなっている（第1・6・7・12・16次発掘調査など）。室町時代以降は、耕作地もしくは水田域として利用されていたとみられる。このような状況から、当事業地内にも周辺で検出されている同時期の遺構面がひろがっているものと考えられる。

個人住宅建設に伴い、令和元年4月12日に実施した試掘調査で遺跡のひろがりを確認したため、工事の影響を受ける範囲のうち、調査可能な部分を対象として発掘調査を実施した。調査地点は、垂水区役所から北へ約60 mの地点にあたる。

2. 調査の概要

発掘調査は、基礎が敷設される範囲を対象として、トレンチを2箇所設定した。



fig.219 調査地位置図 1:2,500

基本層序

現地表面から20cmまでが盛土で、その下に旧耕作土が15～18cmほど堆積していた。これを取り除くと中世の遺構面に当たる。

遺構面 黄灰色粘質土上で遺構面を検出した。検出した遺構は、土坑(SK)、東西溝(SD)、南北溝1条、ビット(SP)、性格不明遺構(SX)である。

土坑 いずれも直径25～40cmの円形もしくは楕円形を呈する。SK105は、直径115cm、幅70cm、深さ35cmであり、床面から白磁碗や青磁碗などが出土している。土坑の平面形や出土遺物からみて、土壙墓の可能性はある。SK105が土壙墓とすれば、この遺構に近接するSP105は、SK105の墓標掘形になるものとみられる。

溝 いずれも幅15～20cm、深さ10cm程である。SD101は、SX101の掘方底から検出した南北溝で、中世の基盤層である黄灰色粘質土を掘りこんでいた。

ビット 直径10～20cmの円形を呈するものが多い。SP101・106～109は、掘立柱建物を構成する柱穴とみられる。1間あたりの幅は、約80～100cmであるため、3尺が1間分となる。SP101とSP109の延長線上にあたる調査区壁面にビットは確認できなかったことから、この柱列は、建物東側の側柱部分にあたるものと考えられる。建物の方位は、真北から東に若干振れている。

性格不明遺構 SX101は、凹字形状を呈しており、凹字形の凹んだ部分には、柱穴等の遺構が形成されている。SX102はSX101に切られており、その掘方直径は、160cmをこえる。掘方の規模と堆積している埋土の状況から、井戸にあたる可能性がある。

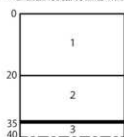
3. まとめ

今回の調査では、中世の遺構面を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物の東側側柱にあたる可能性がある柱穴4基(SP101・106～109)、土壙墓の可能性のある遺構1基(SK105)、土坑8基、東西溝1条、南北溝1条、ビット14基(掘立柱建物のビットを除く)、性格不明遺構3基である。遺構の切り合い関係からみて、少なくとも2時期が同一の遺構面で形成されていたとみることができるといえる。

当事業地周辺の調査成果と今回の調査成果を照合していくと、当事業地の南側では、第1次調査で平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物群、第12次調査で中世の溝とビット、第36次調査で12世紀後半～13世紀初頭の溝や掘立柱建物などが検出されている。今回検出した遺構面の時期とも符合することから、当事業地内にも鎌倉時代を中心とした時期の集落が形成されていたといえるだろう。また、当事業地周辺の地形図を参照すると(国土地理院・土地傾斜図)、今回の調査地は、福田川の河岸段丘上に立地しており、今回の調査地と第12・36次調査地の間には、福田川の浸食によって形成されたとみられる傾斜地が認められる。第12・36次調査で中世の遺構が少なく、第1次調査で12世紀の建物群が密集していると報告されているのは、このような地形的制約が影響しているものと考えられる。今回の調査地は、第1次調査で検出されている12世紀の集落群を見下ろす位置に立地しており、当該期における集落の景観を復元する上で意義ある成果を得ることができた。

垂水日向遺跡における福田川河口の西岸域で行われた発掘調査例は少ないが、今回の調査成果によって、当事業地周辺に中世の遺構がひろがっているものと考えられる。

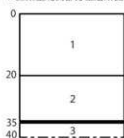
① A区西壁北側部分土層断面



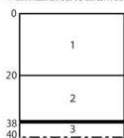
② A区西壁南側部分土層断面



③ B区東壁北側部分土層断面



④ B区東壁南側部分土層断面



1. 灰黑色粗砂 (盛土)
2. 黄色粘質土 (耕作土)
3. 黄灰色粘質土 (中世遺構面基盤層)

※ 太線は遺構面を抽出した部分
 ※ ①～④はfig.222に対応

fig.220 土層断面模式図

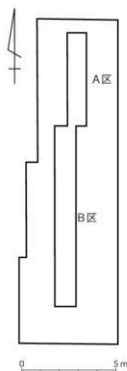


fig.221 調査区配置図

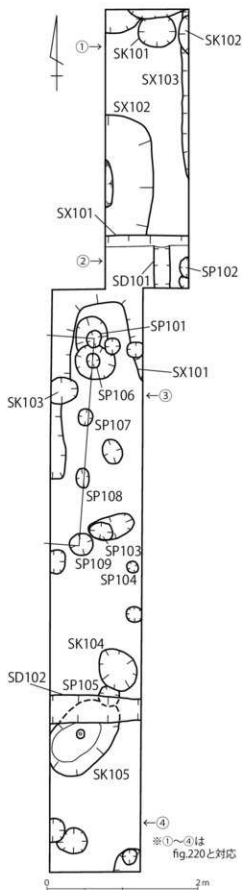


fig.222 遺構平面図



fig.223 A区遺構面検出状況（北から）



fig.224 A区北側西壁断面（東から）



fig.225 B区遺構面検出状況（南から）



fig.226 B区遺構面検出状況（北から）



fig.227 SX101西壁断面（東から）



fig.228 SK105断面（南から）

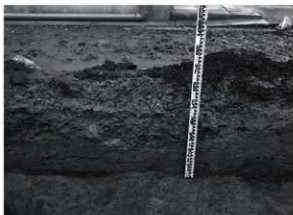


fig.229 B区南側東壁断面（西から）

22. 出合遺跡 第53次・第54次・第56次調査

1. はじめに

出合遺跡は、弥生時代から鎌倉時代までの複合遺跡である。弥生時代中期の方形周溝墓や水田、初期須恵器の窯跡や古墳時代後半期の墓域を含む集落址、奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物などがこれまでの発掘調査によって明らかにされている。遺跡の標高は10.3～31.7mで、北西が高く、南東が低い勾配となっている。国土地理院の土地条件図によると、遺跡内の西側は洪積段丘、東側は明石側による氾濫平野と旧河道上がひろがっている。遺跡の範囲は、北が平野町中津から南が王塚台の約2.2km、東が玉津町出合から西が平野町中津の約1.95kmにわたる。

第53・54・56次調査地周辺では、これまでに平成21・22年度試掘調査および第45～49次調査が行われ、主に弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、平安時代後期～鎌倉時代前期の4時期の遺構や遺物が確認されている。

2. 調査の概要

(第53次調査)

第53次調査は、第46次調査19トレンチに隣接する事業地で個人住宅の建設が計画されたため、今回の工事計画で埋蔵文化財に影響を与える部分を発掘調査した。

発掘調査は、柱状改良される箇所を対象とし、柱状改良の隣接する部分を繋げて2箇所の調査区を設定した。調査対象面積は約4.5㎡である。調査は、現地表面から厚さ105～110cmほどの盛土と45cmほどの耕作土を重機で掘削したのち、第46次調査で確認している第1遺構面基盤層とみられる土層から人力で掘削した。

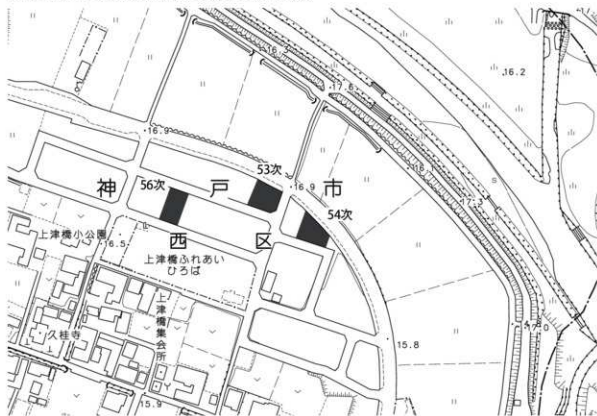


fig.230 調査地位置図 1:2,500

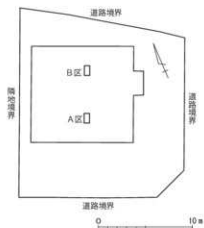


fig.231 調査区配置図

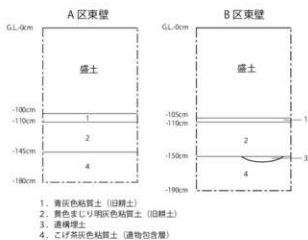


fig.232 土層断面図

基本層序

旧耕作土を除去すると、こげ茶灰色粘質土を検出した。こげ茶灰色粘質土は第46次調査で検出している第1遺構面に相当する土層とみられる。

検出遺構

遺構はB区で土坑を1基検出した。直径25cm、深さ15cm程度である。遺物は、A区のこげ茶灰色粘質土中から出土した土師器、B区の耕作土中から出土した土師器と須恵器がある。いずれも細片のため、時期の比定が難しいもの、おおむね古代～中世にあたるものと考えられる。

まとめ

今回の調査では、B区のこげ茶灰色粘質土上で土坑を1基検出した。調査範囲が狭小であり、出土遺物も細片のみだったが、第46次調査19トレンチの第1遺構面は、平安時代後期～室町時代に否定されているため、今回検出した遺構面も、既往調査の結果とほぼ同時期の所産と考えられる。このような成果から第46次調査の第1遺構面で検出した遺構が当調査地周辺で広がっているとみられる。



fig.233 A区完掘状況(西から)



fig.234 B区完掘状況(東から)

(第54次調査)

第54次調査は個人住宅建設工事に伴うもので、本調査地の隣接地および周辺より弥生時代～中世の遺構・遺物が確認されていたため、工事影響範囲について発掘調査を実施した。調査は、柱状改良工事が集中して施工される部分において試掘坑状に2ヶ所設定し、西から1・2区とした。記録図化にあたっては、調査区南西隅にある道路境界線と隣地境界線との交点(点A)をベンチマーク(BM ± 0 m)とし、ここからの比高差を記録した。

基本層序

現地表面の標高は、BM + 0.4 m前後を測る。層序は上層より、盛土・攪乱、旧耕土、暗灰黄色シルト質土(上面が第1遺構面)、黒褐色粘質土(上面が第2遺構面)、黄灰色粘質土(上面が第3遺構面)の順に堆積する。

第1遺構面

旧耕土を掘削後、暗灰黄色シルト質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高はBM - 1.0 ~ - 1.1 mを測る。本遺構面で遺構は確認できなかったが、遺構面上から平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器と須恵器が出土した。

第2遺構面

平安時代後期～鎌倉時代前期の遺物を含んだ暗灰黄色シルト質土を掘削後、黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高はBM - 1.3 ~ - 1.5 mを測る。本遺構面で遺構は確認できなかったが、遺構面上から平安時代後期の土師器と須恵器が出土した。

第3遺構面

土師器および弥生土器を含んだ黒褐色粘質土を掘削後、黄灰色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は南東側でBM - 1.8 ~ - 2.0 m、北西側でBM - 2.5 m前後を測る。本遺構面では不明遺構2基、土器溜まり1ヶ所を検出した。遺構面上および土器溜まりから弥生時代中期の土器が出土した。

SX301 1区南西側で検出した不明遺構である。大部分が調査区外にかかるため全容と性格は不明である。工事影響範囲から外れることや安全面から遺構の掘削は行っていない。第45・46次調査で検出されたSD2023と同一の溝である可能性も考えられる。

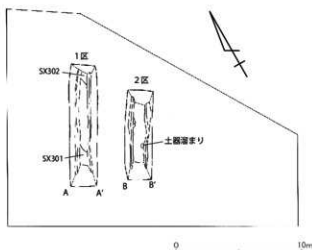


fig.235 調査区配置図および第3遺構面平面図

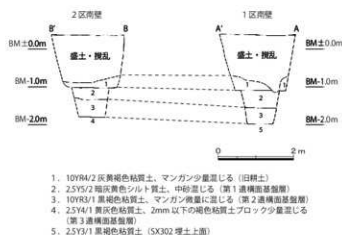


fig.236 土層断面図

- 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、マンガシ少量混じる(旧耕土)
- 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質土、中砂混じる(第1遺構面基盤層)
- 10YR3/1 黒褐色粘質土、マンガシ少量混じる(第2遺構面基盤層)
- 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、2mm以下の暗色粘質土ブロック少量混じる(第3遺構面基盤層)
- 2.5Y3/1 黒褐色粘質土(SX302埋土上面)

SX302 1区北東側で検出した不明遺構である。大部分が調査区外にかかるため全容と性格は不明である。上面より弥生土器が出土したが、工事影響範囲から外れることや安全面から遺構の掘削は行っていない。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代～中世の3面の遺構面および遺構とそれらに伴う遺物を得た。隣接する第45・46次調査では、弥生時代前期や古墳時代の遺構・遺物が発見されたものの、本調査では、これらの時期のものは確認できなかった。本調査の第3遺構面は、南西側に比して北東側が低くなっており、旧地形を復元するうえで貴重なデータとなる。

本調査地点は、出合遺跡において明石川に近い地点であり、遺跡内における活動範囲や空間利用を考えるうえで重要な成果を得たといえる。



fig.237 1区北半 第3遺構面全景 (南東から)



fig.238 2区北半 第3遺構面全景 (南東から)

(第56次調査)

第56次調査は個人住宅建設工事に伴うもので、本調査地の隣接地および周辺より弥生時代～中世の遺構・遺物が確認されていたため、工事影響範囲について発掘調査を実施した。

調査区は柱状改良工事が集中して施工される部分においてトレンチを3ヶ所設定し、南東側から1～3区とした。

記録図化にあたっては、調査区北側の道路境界線と隣地境界線との交点(点A)をベンチマーク(BM±0m)とし、ここからの比高差を記録した。

基本層序

現地表面の高さは、BM+0.3m前後を測る。層序は上層より、表土、盛土、暗褐色細砂質土(旧表土)、暗オリーブ灰色粘性砂質土(旧耕作土)、緑灰色粘性砂質土(旧耕作土)、黄褐色粘性砂質土(第1遺構面基盤層、第2遺物包含層)、灰黄褐色粘質土(第1遺構面基盤層、第2遺物包含層)、暗灰黄色粘質土(第2遺構面基盤層)、暗オリーブ褐色シルト質土、黒褐色シルト質土、灰色シルト質土の順である。

第1遺構面

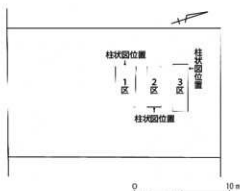


fig.239 調査区配置図

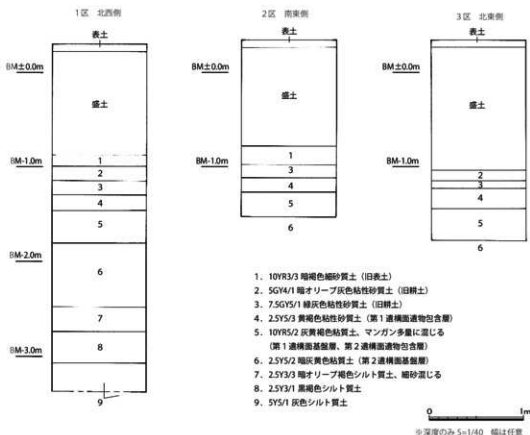


fig.240 土層断面柱状図

古墳時代、飛鳥時代、中～近世の土器を含む黄褐色粘性砂質土（第1遺物包含層）を掘削後、灰黄褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の高さはBM - 1.3 ～ - 1.5 mを測る。

本遺構面では土坑1基とビット11基を検出した。遺構面上から平安～鎌倉時代の土師器と須恵器が出土した。

P 1～7 3区で検出したそれぞれ直径30～40cm、深さ16～30cmを測るビット列である。各ビットは中心間で70cm程度を測る。ビットは直線に並び、埋土も同一の褐灰色シルト

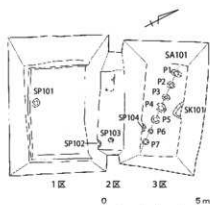


fig.241 第1遺構面平面図

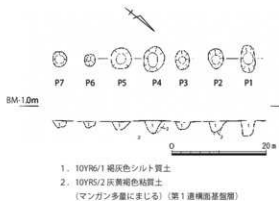


fig.242 P 1～7 平・断面図



fig.243 1区第1遺構面全景（北西から）



fig.244 2区第1遺構面全景（北西から）



fig.245 3区第1遺構面全景（北西から）

質土であることから一連の遺構と考えられる。ピット列は調査区外へ続くものと考えられ、第45・46次調査SH1901の西側で検出したピット群と関わる可能性がある。掘立柱建物の一部とも考えられるが、今回の1・2区で類似するピット列が検出されていないことから、柵列の一部と推定される。なお、ピット内より土師器と須恵器が出土したが、いずれも小片のため詳細な時期は不明である。

第2遺構面

弥生時代後期～庄内式期の遺物を含んだ灰黄褐色粘質土（第2遺物包含層）を掘削後、暗灰黄色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の高さはBM - 1.5～1.8 mを測る。本遺構面では調査区北側への落ち込みと土器溜まりを検出した。遺構面上および土器溜まりから弥生時代後期～庄内式期の土器が出土した。

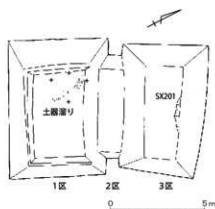


fig.246 第2遺構面平面図



fig.248 2区第2遺構面全景（北西から）



fig.247 土器溜まり出土状況平面図

SX201 3区北東側で検出した落ち込みである。埋土は黄灰色シルト質土であり、本遺構内より遺物は出土しなかった。第45・46次調査で検出したSD1912へと続くものと考えられる。土器溜まり 1区北側で2m×0.5mほどの範囲で土器が列状にまとまって出土した。土器溜まり中には、弥生時代後期～庄内式期の壺2点以上・甕2点以上・高環2点以上・鉢1点以上を含むものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、平安～鎌倉時代および弥生時代後期～庄内式期の2面の遺構面において遺構が検出され、それらに伴う遺物が出土した。これらは、第45・46次調査の第1遺構面および第2遺構面とそれぞれ対応するものと考えられる。第2遺構面の基盤層である暗灰黄色粘質土より下層は、シルト質土が堆積していることから旧河道内、又は河川の氾濫原もしくは後背湿地にあたるものと推定され、遺構・遺物は確認されなかった。これは、第45・46次調査でも、今回の調査地に隣接する地点には第3遺構面が存在しないことと整合する結果といえる。また、本調査ではBM - 3.4m前後まで掘削を行ったものの、第45・46次調査で検出された第4遺構面まで到達できなかった。安全対策のため、これ以下の掘削は行えなかったが、下層に遺構面が存在する可能性がある。

今回の調査成果は、周辺で行われたこれまでの調査成果を補強するものといえる。今回の調査地を含む上津橋地区は、出合遺跡のなかでは明石川に近い地点である。このため、当遺跡における活動範囲や空間利用を考えるうえで重要な地区であり、今度の調査成果の積み重ねに期待するところである。



fig.249 1区第2遺構面全景（北西から）



fig.250 3区第2遺構面全景（北西から）

23. 出合遺跡 第55次調査

1. はじめに

当遺跡は、弥生時代から鎌倉時代までの複合遺跡である。弥生時代中期の方形周溝墓や水田、初期須恵器の窯跡や古墳時代中期～後期の墓域を含む集落址、奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物などがこれまでの発掘調査によって明らかにされている。遺跡の標高は10.3～31.7 mで、北西が高く、南東が低い勾配となっている。国土地理院の土地条件図によると、遺跡内の西側は洪積段丘、東側は明石川による氾濫平野と旧河道上がひろがる。遺跡の範囲は、北が平野町中津から南が王塚台の約2.2 km、東が玉津町出合から西が平野町中津の約1.95 kmにわたる。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うものである。調査区は、柱状改良される部分で調査可能な範囲を対象として2か所設定した。

基本層序

現地表面から45～50 cmで古墳時代の遺物包含層を検出した。

遺構は確認できなかったが、出土遺物から緑色ブロック混じり明黒灰色粘質土～濃褐色混じ



fig.251 調査地位図 1:2,500

り明青灰色粘質土が古墳時代後半期、こげ茶混じり青灰色粘質土が布留式併行期、橙色混じり暗青灰色粘質土が庄内式併行期の遺物が各層から出土している。

3. まとめ

今回の調査では、遺構を確認できなかったものの、古墳時代の中でも時期差がおえる土層を検出することができた。当調査地周辺では、試掘調査で弥生時代の遺物包含層なども確認されていることから、今回の調査成果も踏まえると、当調査地周辺には、弥生時代～古墳時代の遺物包含層がひろがっているものと考えられる。

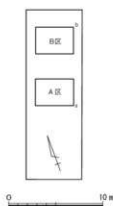


fig.252 調査区配置図

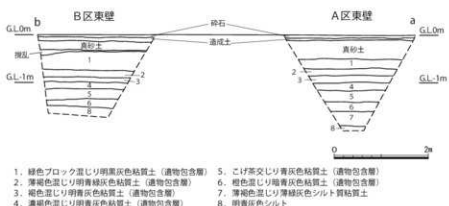


fig.253 土層断面図



fig.254 A区完掘状況 (東から)



fig.255 B区完掘状況 (西から)

Ⅲ．文化財科学的調査の成果

本山遺跡第34次調査出土杭材の年代測定

小林謙一1)・佐野雅規2)・李貞2)・中塚武2)・中村大介3)

1)中央大学、2)名古屋大学大学院環境学研究所、3)神戸市文化財課（現職）

はじめに

令和3年度刊行の『平成30年度神戸市埋蔵文化財年報』において、本山遺跡出土土料を含む神戸市内出土土器付着物、木材土料について、炭素14年代測定結果を報告した（小林ほか2022）。それらは、国立歴史民俗博物館年代測定研究グループによる学術創成研究の一環としての研究であったが、それとは別に中塚武教授を中心とする酸素同位体比研究の一環として、平成11年度の本山遺跡第34次調査出土木材について酸素同位体比を測定した。本稿では、その成果報告を中心に、先に報告した炭素14年代測定事例のうち、本山遺跡関連資料について、改めて改訂されたIntCal20の校正曲線を用いて計算し直した校正年代を提示し、年代的検討を加えることとした。

1. 発掘調査の概要

本山遺跡は神戸市東部の東灘区に所在する。六甲山地南麓の扇状地裾から、縄文海進時に形成された海食崖をこえて南側に広がる沖積地に立地している。

既往の調査では縄文時代晩期～弥生時代前期～中期に至る遺構や遺物が出土しているが、特に平成5年度の第17次調査と、第34次調査で出土した弥生時代前期初頭の木製農具は近畿の農耕開始期の資料として、また平成元年度の第12次調査で出土した四区製炭禪文銅鐸の出土は注目される。酸素同位体比年輪年代法による分析調査を実施した木製品が出土した第34次調査地は、国道2号線の南側、現地表面の標高8m～10mの地点に位置する。

発掘調査はI区～V区に分割して実施した。結果、数条の自然流路と溝状遺構が検出され、

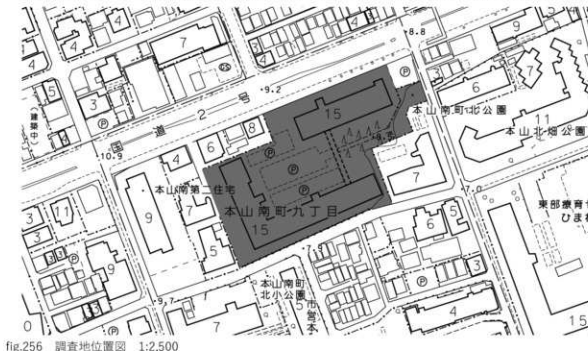


fig.256 調査地位置図 1:2,500

流路底には杭列や井堰などの灌漑施設が存在することが判明した。

出土土器からは流路が弥生時代前期初頭から中期にかけて存在したことが示唆されたものの、灌漑施設が敷設された年代を構成部材そのものから推定するため、平成29年度、総合地球環境学研究所教授（当時）の中塚武氏、中央大学教授の小林謙一氏のご協力を得、分析調査を実施することとなった。測定に供した資料は表14に示した、I区杭列1の丸杭（W-7448/酸素同位体試料No.2）、V区杭列5の半丸杭（W-7506/酸素同位体試料No.1・W-7524/酸素同位体試料No.3）、杭列4の割杭（W-7528/酸素同位体試料No.6）、流路4杭列7の丸杭（W-7544/酸素同位体試料No.4）、井堰を構成する丸杭（W-7581/酸素同位体試料No.5）および割材（W-7636/酸素同位体試料No.7）の7点である。

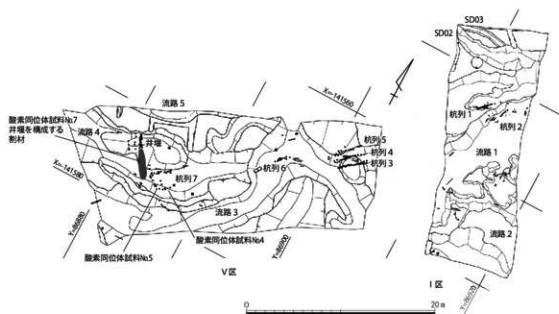


fig.257 I区・V区平面図

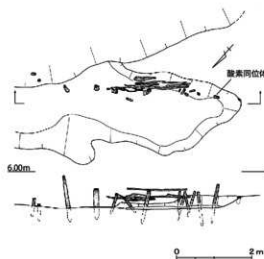


fig.258 I区杭列1平面図

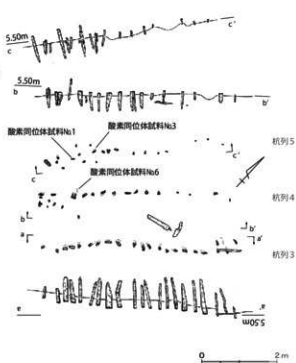


fig.259 V区杭列3～5平・断面図

2. 炭素 14 年代測定・ウイグルマッチングの再検討

前報（小林ほか 2022）で報告したように、平成 16 年度に国立歴史民俗博物館年代測定研究グループとして採取・測定した本山遺跡出土試料として、16 次および 17 次調査出土の土器付着物 17 点（うち 2 点は同一固体の内外面付着物）、34 次出土の割材 3 点（うち 1 点は年輪試料 6 サンプルによるウイグルマッチングを行う）の炭素 14 年代測定を行っている。

今回、酸素同位体比による年代決定と対比検討する上で、較正曲線が IntCal20 による再計算を行う。また、一部の土器付着物については IRMS により安定同位体比を測定したので、それも併せて報告する。試料について表 14、AMS 法炭素 14 測定値および OxCAL4.4.4 (Bronk Ramsey, 2009)、IntCal20 (Reimer et al. 2020) を用いた較正年代を表 15、IRMS による安定同位体比および C/N 比 (mol 比) を表 16 に示す。fig.260・261 に較正年代確率密度分布を示す。なお、表 15 に記す較正年代は、 2σ の有効範囲の中で確率の大きい年代範囲 3 つまでを記した。詳しい数値は図を参照されたい。また、fig.262 にウイグルマッチングの結果を図示する。

まず 16 次・17 次調査で検出された流路から出土した縄文晩期突帯文・弥生前期 1 期古・中・新の土器片の付着炭化物は、IRMS による安定同位体比から、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-25\sim-26\%$ 程度で、陸性の植物質由来の炭化物であると考えられる。これらは土器の外側に吹きこぼれた炭化物と観察され、調理による煮コゲと考えられる。少なくとも海洋リザーバー効果により、古くなっている可能性は極めて少ない。年代を見ると 790 \sim 500cal BC ころの一群 (HYKB 3、4、5、7、10、22 など)、650 \sim 540cal BC 頃にピークがある 1 群 (HYKB-6 など)、600-400cal BC こ

表 14 炭素 14 年代測定試料一覧

試料番号	調査・回数	台帳番号・出土区・ 出土遺構	種別	資料種類	時期	備考	部位
HYKB-03-a	本山遺跡 16 次	R157	土器付着	深鉢	縄文晩期突帯文	煮焦げ	口縁内
HYKB-03-b	本山遺跡 16 次	R157	土器付着	深鉢	縄文晩期突帯文	吹きこぼれ	口縁外
HYKB-04	本山遺跡 17 次	R207 II 区流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期中	吹きこぼれ	胴外
HYKB-05-b	本山遺跡 17 次	R520,212,152,385 流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期中	吹きこぼれ	胴外
HYKB-06-a	本山遺跡 17 次	R385	土器付着	壺	弥生前期 I 期古	スス	口縁外
HYKB-06-b	本山遺跡 17 次	R385	土器付着	壺	弥生前期 I 期古	スス	胴外
HYKB-07	本山遺跡 17 次	R400 包含層	土器付着	深鉢	縄文晩期突帯文	吹きこぼれ	胴外
HYKB-08	本山遺跡 17 次	R323	土器付着	壺	弥生前期 I 期前半	不明	口縁外
HYKB-10	本山遺跡 17 次	R100	土器付着	深鉢	縄文晩期突帯文	吹きこぼれ	口縁外
HYKB-13	本山遺跡 17 次	R059 III 区流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期前半	吹きこぼれ	胴外
HYKB-15	本山遺跡 17 次	R195 流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期古	スス	胴外
HYKB-17	本山遺跡 17 次	R105 流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期	吹きこぼれ	胴外
HYKB-18	本山遺跡 17 次	R194 流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期	吹きこぼれ	胴外
HYKB-20	本山遺跡 17 次	R153 流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期前半	スス	胴外
HYKB-21	本山遺跡 17 次	R081 II 区流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期中 - 新	吹きこぼれ	口縁外
HYKB-22	本山遺跡 17 次	R207 II 区流路 1	土器付着	壺	弥生前期 I 期中 - 新	吹きこぼれ	胴外
HYKB-24	本山遺跡 17 次	R017 II 区灰色粗砂	土器付着	壺	弥生前期 I 期中	吹きこぼれ	胴外
HYKB-C11	本山遺跡 34 次	R264, ⑥, W-7496	木材	割杭	弥生前期		掘外年輪
HYKB-C12	本山遺跡 34 次	R265, W-7497, V 区杭 列 5-22	木材年輪	割杭	弥生	針葉樹 (スギ)	I-61 年輪
HYKB-C16	本山遺跡 34 次	R244, W-7477, V 区杭 列 3-21	木材	割杭	弥生	スギ	掘外年輪

ろにピークが来る1群 (HYKB-8、21、24) というようにも見えるが、基本的にはほぼ重なっている。34次出土の木杭である木材試料のうち、HYKB-C11も同様の弥生前期の年代を示す。HYKB-C12とした本山遺跡34次調査のV区杭列5-22 (R-265、W1-7497) については、最外年輪 (C12-1)、最外から21年目の1年輪 (C12-21)、最外から31年目の年輪 (C12-31)、同41年目 (C12-41)、同51年目 (C12-51)、同61年目 (C12-61) を採取し、年輪ごとのAMS測定結果から、ウイグルマッピングを行っている。その結果について、OxCAL4.4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を使用し、校正データには IntCal20 (Reimer et al. 2020) を用いて再計算を行った。その結果、最外年は1 σ で2240-2208cal BP (291-259cal BC) (68.3%)、2 σ で2246-2177 cal BP (297-228cal BC) (92.0%)、2156-2146 cal BP (207-197cal BC) (1.8%)、2132 cal BP (183-174cal BC) の校正年代となる。Mean (平均) 266BC (± 25)、Median (中央値) 275BCである。この年代は、弥生中期中葉に相当しよう (小林 2009a)。単独測定の際材の木杭であるHYKB-C16も概ね同様の値を示している。

表 15 炭素 14 年代測定値一覧

試料番号	測定機関番号	$\delta^{13}\text{C}\%$	^{14}C BP	2 σ cal BC	確率	3つの確率範囲まで記載			
HYKB-03-a	MTC-05927	(-24.6)	2505 \pm 40	790-481	95.4%				
HYKB-03-b	MTC-05928	(-24.5)	2510 \pm 40	792-514	94.4%	500-486	1.1%		
HYKB-04	MTC-09039	-26.6	2480 \pm 35	773-468	94.0%	435-423	1.5%		
HYKB-05-b	MTC-05929	(-26.1)	2505 \pm 40	790-481	95.4%				
HYKB-06-a	MTC-05930	(-24.6)	2540 \pm 40	802-720	34.8%	708-662	16.5%	653-543	44.2%
HYKB-06-b	MTC-05931	(-23.0)	2480 \pm 40	773-464	93.2%	437-421	2.2%		
HYKB-07	MTC-05932	(-25.2)	2495 \pm 40	780-473	94.6%	433-424	0.8%		
HYKB-08	MTC-09040	(-26.2 \pm 1.4)	2425 \pm 35	750-685	17.5%	668-636	7.7%	589-402	70.0%
HYKB-10	MTC-05933	(-25.5)	2490 \pm 40	778-468	94.1%	435-422	1.3%		
HYKB-13	MTC-09041	-26.3	2490 \pm 35	777-477	95.4%				
HYKB-15	MTC-05934	(-19.6)	2470 \pm 40	769-458	91.2%	442-418	4.2%		
HYKB-17	MTC-09042	(-26.6 \pm 0.6)	2520 \pm 70	803-458	92.3%	442-418	3.1%		
HYKB-18	MTC-09043	(-25.1 \pm 1.4)	2525 \pm 35	795-718	28.4%	710-660	18.1%	655-542	48.9%
HYKB-20	MTC-09044	(-26.4 \pm 0.8)	2495 \pm 35	779-481	95.4%				
HYKB-21	MTC-09045	-26.8	2435 \pm 35	751-684	20.7%	668-634	9.3%	591 - 406	64.3%
HYKB-22	MTC-09046	-26.6	2515 \pm 35	791-639	95.4%				
HYKB-24	MTC-09047	(-26.8 \pm 0.7)	2445 \pm 35	754-691	23.7%	670 - 609	14.5%	595 - 409	57.3%
HYKB-C11	PLD-4881	(-25.9 \pm 0.1)	2460 \pm 25	756-679	31.7%	671 - 605	19.2%	598 - 456	40.0%
HYKB-C16	PLD-4882	(-28.2 \pm 0.2)	2160 \pm 25	355-283	38.0%	230-102	56.7%	67-60	0.7%
HYKB-C12-1	MTC-09051	外から1年輪目	2180 \pm 30						
HYKB-C12-21	MTC-09052	外から21年輪目	2205 \pm 35						
HYKB-C12-31	MTC-09053	外から31年輪目	2240 \pm 35						
HYKB-C12-41	MTC-09054	外から41年輪目	2205 \pm 30						
HYKB-C12-51	MTC-09055	外から51年輪目	2155 \pm 30						
HYKB-C12-61	MTC-09056	外から61年輪目	2170 \pm 30						

表 16 IRMS 安定同位体比

資料番号	試料種類	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	N (%)	C (%)	C/N (mol比)	測定
HYKB-4	吹きこぼれ	-26.6	12.40	3.47	65.2	21.9	昭光通商
HYKB-13	吹きこぼれ	-26.3	10.10	3.36	61.1	21.2	昭光通商
HYKB-21	吹きこぼれ	-26.8	9.59	3.19	65.0	23.8	昭光通商
HYKB-22	吹きこぼれ	-26.6	11.00	3.21	64.5	23.4	昭光通商

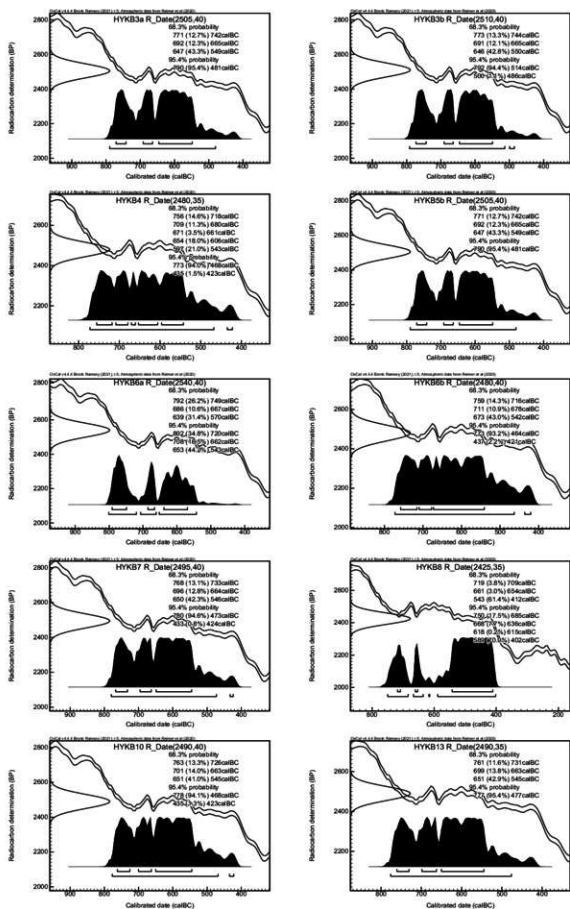


fig.260 較正年代確率密度分布 (IntCal20) その1

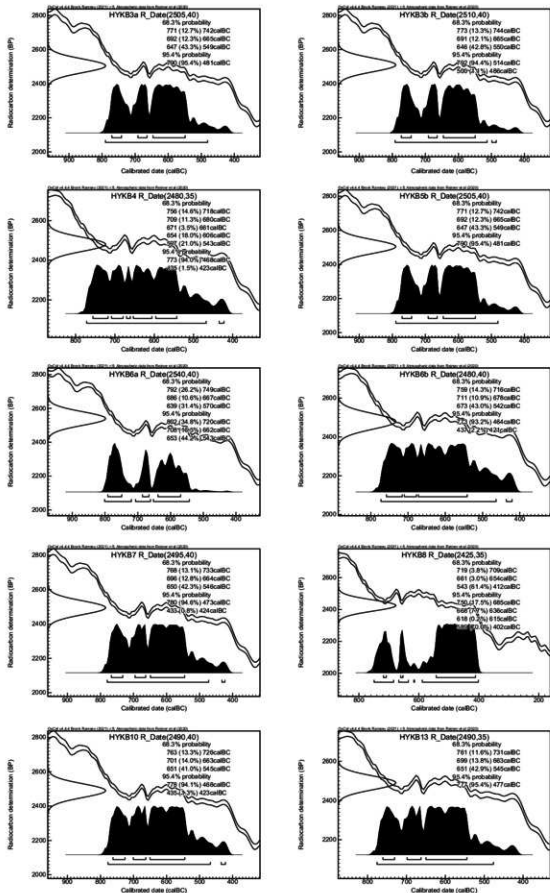


fig.261 較正年代確率密度分布 (IntCal20) その2

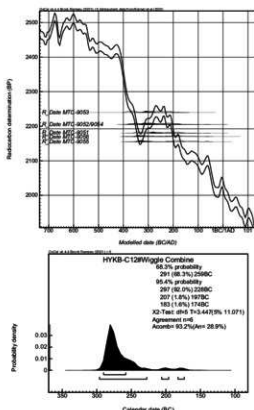


fig.262 HYKB-C12 ウィグルマッピング
校正年代確率密度分布 (IntCal20)



fig.263 V区井壇 (東から)



fig.264 V区坑列 (南東から)

3. 本山遺跡出土土材の酸素同位体年輪測定

本研究では、年輪数が比較的多かった10点を分析の対象とした。まず、ダイヤモンドホイールソーを用いて木材を1mm厚の薄板に切り分けた。この段階で、3点については年輪の判別が難しかったため以後の解析から除外した。残りの7点について、薄板の形状を保ったまま各種の化学処理を施しセルロースを抽出した (Kagawa et al., 2015)。次いで、セルロース板を顕微鏡で観察しながら、1年層ずつ重量が100～300マイクログラムになるように年輪を切り分け銀箔に封入した。なお、分析対象とした7点についてもセルロース板の収縮による年輪判別の難しい部位については切り分けせず、替わりに木材の状態で年輪数を数え、酸素同位体比による年代照合の結果と組み合わせることで末端の年輪年代を決定した。サンプルの酸素同位体比 ($\delta^{18}\text{O}$) は、熱分解式の元素分析計 (TCEA, Thermo Fisher Scientific) を連結した同位体比質量分析計 (Delta V Advantage, Thermo Fisher Scientific) を用いて測定した。標準物質の繰り返し測定から得た分析精度 (標準偏差) は0.2‰以下であった。

各サンプルの酸素同位体比の時系列データに含まれる長周期の変動パターンは年代照合の障壁となるので、11年の移動平均を当てはめて実測値からの偏差を求め、短周期の成分を抽出した。年代照合には、公表済みのデータを紀元前1085年まで延長させた最新の標準年輪曲線を使用した (Nakatsuka et al., 2020; Sano et al., 2022)。この標準曲線についても長周期の変動成分が取り除かれており、サンプルと同じ短周期の成分が保持されている。今回のサンプルの年代観は、先行研究により紀元前に限定されているので、年代照合の範囲を標準曲線の存在する紀元前の期間 (前1085～1年) に絞った。年代決定の評価には、1階の自己相関を補正した t 値 (t_{adj})、 $1/p$ 値 (ボンフェローニ法で多重比較補正した p 値の逆数)、IF 値 (isolation factor: 1番目と2番目に高い照合結果が得られた年代での p 値の比) を用いた。いずれの数

値も大きいほど年代照合の確度が高まるが、パターンマッチングの性質上、年代決定の成否を峻別する値は定義できない。そこで、先行研究で使用されている $1/p > 100$ 、 $IF > 10$ を年代決定の成否の基準とし (Loader et al., 2019)、これを満たした場合、高い信頼度で年代決定に至ったと便宜的に判断した。

表 17 に測定試料、表 18 に年代照合の結果を示す。7 個体のうち 4 個体 (MY7506, MY7448, MY7524, MY7544) で先に設けた統計基準を上回り年代決定に至った。年代照合に成功した各個体の t 値の分布 (上段)、および標準曲線との変動パターンとの比較 (下段) を図 1 に示す。年代決定に成功した場合、ただ 1 つの年代において t 値の明瞭なピークが出現する。この年代が、酸素同位体比データの末端年代に一致する。本研究では、木材の劣化のため、全ての年輪について酸素同位体比を測定できていない。したがって、実際のサンプルの末端年代は、表 18 に示したように、紀元前 126 年 (MY7506)、前 257 年 (MY7448)、前 149 年 (MY7524)、前 201 年 (MY7544) となった。さらに、全てのサンプルにおいて樹皮が確認できなかったことから、樹木としての枯死年は、これらの年代よりも後になる。

一方、年代決定できなかった 3 個体の特徴は、全てのサンプルで年輪数が 40 年を下回っていた。標準曲線との比較では、 t 値の微弱なピークが複数の年代で出現した。そこで、次のアプローチとして、サンプル間で酸素同位体比のパターンマッチングを行い、年代の定まらなかつ

表 17 酸素同位体比・炭素 14 年代測定試料一覧

試料No.	登録No.	台帳No.	樹種	地区	遺構	器種	木取り	樹皮残存	最外年輪
1	W-7506	R-279	ヒノキ	V区	杭列 5-18	半丸杭	芯持丸木	なし	有
2	W-7448	R-090	ヒノキ	I-2	流路内②	丸杭	芯持丸木	なし	有
3	W-7524	R-297	ヒノキ	V区	杭列 5-13	半丸杭	芯持丸木	なし	有
4	W-7544	R-319	カヤ	V区	流路 4-30	丸杭	芯持丸木	なし	?
5	W-7581	R-356	モミ	V区	流路 4-53	丸杭	芯持丸木	なし	有
6	W-7528	R-302	スダジイ	V区	杭列 4-14	割杭	みかん割	なし	有
7	W-7636	R-410	オニグルミ	V区	流路 4-121	割材	みかん割	なし	有
HYKB-C16	W-7477	R-244	ツブラジイ	V区	流路内 3-21	割杭	みかん割	なし	?
HYKB-C11	W-7496	R-264	スダジイ	V区	杭列 4-19	割杭	芯持丸木	なし	?
HYKB-C12	W-7497	R-265	ヒノキ	V区	杭列 5-22	丸杭	芯持丸木	なし	?

表 18 酸素同位体比による年輪年代照合の結果

No.	ID	年輪番号	$\delta^{18}O$ 測定年輪	n	r	t_{adj}	1/p	IF	$\delta^{18}O$ 年代	サンプル末端年代
1	MY7506	1-114	2-62	61	0.72	7.39	> 1M	> 1M	-178	-126
2	MY7448	1-57	10-53	44	0.86	10.04	> 1M	> 1M	-261	-257
3	MY7524	1-103	1-65	65	0.55	4.96	288	393	-187	-149
4	MY7544	1-98	1-63	62	0.61	5.64	2891	918	-236	-201
5	MY7581	1-40	1-40	40	-	-	-	-	-	-
6	MY7528	1-35	1-35	35	-	-	-	-	-	-
7	MY7636	1-32	1-32	32	-	-	-	-	-	-

注：酸素同位体比を測定した年輪数 (n)、標準曲線とサンプルの相関係数 (r)、自己相関を補正した t 値 (t_{adj})、ボンフェローニ法で多重比較補正した p 値の逆数 (1/p)、1 番目と 2 番目に高い照合結果が得られた年代の p 値の比 (IF)、酸素同位体比を測定した年輪の一番外側の年代 ($\delta^{18}O$ 年代)、酸素同位体比を測定しなかった年輪を加味したサンプルの最終的な年輪年代 (サンプル末端年代: BC をマイナス表記)。いずれのサンプルも樹皮を含まないため枯死年は不明。No. 5-7 は年代照合に至らなかったため空欄とした。

た個体の年代照合を試みた (Sano et al., 2022)。具体的には、年代決定できた4個体のデータを平均して、本山遺跡の年輪酸素同位体比を代表するクロノロジーを作成し、これに対して年代の定まらなかった3個体の年代を照合した。さらに、本山遺跡の全7個体のデータを個別に扱い、総当たりで相対年代の照合も試した。その結果、MY7528とMY7581の間に相対年代の候補が出現したものの、これら2個体を合わせたデータを標準曲線と照合したところ、複数の年代ピークが出現し、真の年代は絞り込めなかった。従って、これらの追加解析でも年代の候補を提示することが出来なかった。

以上の結果をまとめると、分析に用いた7個体のうち4個体について設定した統計基準を上回り、年輪年代を決定することができた。これらサンプルの最外年輪は紀元前257～126年を示した。いずれのサンプルも樹皮を含んでいなかったため、樹木が枯死した年代は、これらの年代より数年から数十年ほど追加する必要がある。正確な伐採年は特定できないが、木材サンプル群のうち少なくとも1個体は、紀元前125年以降に枯死したことが判明した。

4. 年代的考察

以上のように、本山遺跡34次調査出土の杭材について、酸素同位体比分析及びAMS法炭素14年代測定、2つの手法を用いた年代測定の結果を得た。

酸素同位体からの検討では、不確定な割材が弥生前期のBC500くらいに相当するが、ほかの杭材はBC257～126と中期中葉から中期後葉はじめくらいの年代を示した。

炭素14年代測定では、酸素同位体比と別の資料で水路の杭(C12)が、ウイグルマッチでベストフィットがBC275年、297-228cal BCに92%の確率で含まれる年代(杭の最外年輪の年代であり伐採年としては数年程度失われている可能性がある)で、弥生中期中葉と考えられる。ウイグルマッチは行っていない単独での炭素14年代測定のC16も弥生中期中葉で先の測定例と整合的だが、別の杭列のC11は弥生前期の年代を示す。また16次・17次調査で検出された流路出土の土器付着物の炭素14年代測定は、790-405cal BCの較正年代の幅に収まり、すべて弥生前期に属する年代で、出土土器型式の年代(縄文晩期突帯文から弥生前期I期)と合致している。

以上より、当該流路は弥生前期に使用開始された遺構ではあるが、当初設けられた杭列に加え、弥生中期まで継続利用される中において新たに打設された杭もあり、その際、杭の先端が前期の溝底を貫通した可能性が示唆される。今後も検討を重ねていく必要がある。

おわりに

以上、弥生時代の年代測定研究として、酸素同位体比と炭素14年代測定の両面から検討し、重要な測定例を蓄積することができた。弥生時代の水田関連施設の構築状況については、炭素14年代測定を中心に兵庫県岩屋遺跡での事例を取り上げたことがある(小林2009b)が、今後も事例を増し検討を重ねていく必要があるだろう。

本稿は、1を中村大介、2・4を小林謙一、3を佐野雅規・李貞・中塚武が執筆し、全体を小林がまとめた。この年代測定およびその解析は、2021-2025年度基盤研究S「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」(代表中塚武、21H04980)、2022-2026年度基盤研究A(一般)「高精度年代体系による東アジア新石器文化過程—地域文化の成立と相互関係—」(代表小林謙一、22H00019)の成果である。

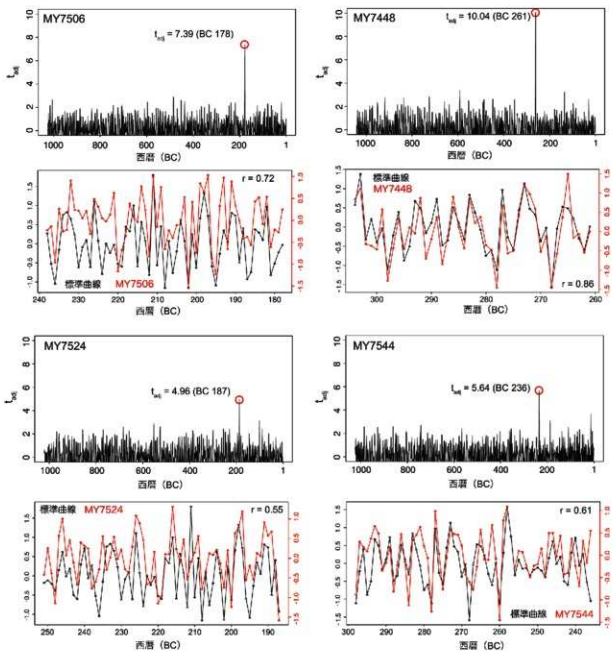


fig.265 酸素同位体比年輪年代法による年代照合の結果（設定した統計基準を上回り年代決定に成功した4個体 (MY7506, MY7448, MY7524, MY7544; 上段: t 値の分布, 下段: 標準曲線とサンプルの酸素同位体比変動パターンの比較)

〈引用文献〉

- 小林謙一 2009a 「近畿地方以東の地域への拡散」『弥生農耕のはじまりとその年代』新弥生時代のはじまり第4巻
西本豊弘編 雄山閣 55-82頁
- 小林謙一 2009b 「炭素14年代を使った弥生集団論」『弥生文化の輪郭』弥生時代の考古学1 同成社
- 小林謙一・坂本稔・春成秀爾・尾崎大真・松崎浩之・安田滋・中村大介 2022 「神戸市内遺跡出土試料の¹⁴C年代測定」
『平成30年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市, 148-159頁
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(4), 337-360.
- Kagawa, A., Sano, M., Nakatsuka, T., Ikeda, T., Kubo, S., 2015. An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths, *Chemical Geology* 393-394, 16-25.
- Loader, N.J., Mccarroll, D., Miles, D., Young, G.H.F., Davies, D., Ramsey, C.B., 2019. Tree ring dating using oxygen isotopes: a master chronology for central England, *Journal of Quaternary Science* 34, 475-490.
- Nakatsuka, T., Sano, M., Li, Z., Xu, C., Tsushima, A., Shigeoka, Y., Sho, K., Ohnishi, K., Sakamoto, M., Ozaki, H., Higami, N., Nakao, N., Yokoyama, M., Mitsutani, T., 2020. A 2600-year summer climate reconstruction in central Japan by integrating tree-ring stable oxygen and hydrogen isotopes, *Clim. Past* 16, 2153-2172.
- Sano, M., Li, Z., Murakami, Y., Jinno, M., Ura, Y., Kaneda, A., Nakatsuka, T., 2022. Tree ring oxygen isotope dating of wood recovered from a canal in the ancient capital of Japan, *Journal of Archaeological Science: Reports* 45, 103626.
- Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., J Heaton, T., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C., J. van der Plicht, C., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S. M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon* 62(4), 725-757.

令和元年度 神戸市埋蔵文化財年報

令和5年3月 印刷

令和5年3月 発行

発行 神戸市文化スポーツ局文化財課
神戸市中央区加納町 6-5-1
TEL 078-322-5799

印刷 交友印刷株式会社
神戸市中央区港島南町 5-4-5
TEL 078-303-0088